

# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

I

鹿兒島県始良郡溝辺町所在遺跡の調査

西 免 遺 跡  
朽 場 遺 跡  
山 神 遺 跡  
曲 迫 遺 跡  
桑ノ丸 遺 跡

1977. 2

鹿 兒 島 県 教 育 委 員 会

## 序 文

九州縦貫自動車道・鹿児島線（鹿児島～吉松間）建設に伴う埋蔵文化財の調査は、昭和46年度、始良町小瀬戸遺跡から開始しましたが、調査体制の遅れから、一時中断せざるを得ませんでした。

このため、県教育委員会では、昭和48年度から文化課を独立させて体制の整備をはかると共に、文化財保護関係者及び地元の御協力を得て、加治木～溝辺間の各遺跡について調査を再開しました。その後は各年度継続して自動車道建設に伴う遺跡の調査を実施しており、現在は溝辺町北部の石峯、木佐貫原遺跡を調査中であります。

この間、調査終了の遺跡も多く、すでにその一部は自動車道として使用開始されています。

本来、調査が終了すると同時に公開すべき報告書の作成が、諸般の事情から遅れがちになっておりましたが、この度、ようやく鹿児島線（加治木～溝辺間）建設に係る遺跡のうち溝辺町桑ノ丸、山神等の5遺跡について発掘調査報告書を作成することができました。

本報告書は、昭和46年に県教育委員会が九州縦貫自動車道建設に伴う遺跡の発掘調査にとりかかって以来、初めての発刊であり、意義深いものと考えております。この報告書が多くの方々へ文化財愛護の糧として活用されることを心から念じています。

なお、調査に当たっては、地元及び関係諸方面の方々へ多大の御協力と文化財に対する深い御理解をいただきました。ここに深甚の謝意を表するものであります。

昭和52年2月28日

鹿児島県教育委員会  
教育長 国分正明

## 例 言

- 1 この報告書は、九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、昭和49年度に発掘した西免遺跡・柵場遺跡・山神遺跡・曲迫遺跡・桑ノ丸遺跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公道の受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆は、つぎのとおりである。

はじめに	I	.....本蔵久三
	II・III	.....平田信芳
	IV	.....鹿児島大学教授石川秀雄
西免遺跡		.....平田信芳
柵場遺跡	I・II・III・IV-(2)・V	.....平田信芳
	IV-(1)・(3)	.....吉永正史
山神遺跡	I・II・III・IV・V-(1)・(2)・	
	VI-(5)・(6)・VII	.....平田信芳
	V-(3)・VI-(3)・(4)	.....牛ノ浜修
	VI-(1)・(2)・(8)	.....吉永正史
	VI-(7)	.....立神次郎
曲迫遺跡		.....弥栄久志
桑ノ丸遺跡	I・II・III・IV-(1)・(2)-1・2-①・②・⑤・(3)-	
	①・③・(4)-①・V-(1)-1~9・13-15	.....新東晃一
	IV-(2)-2-③・④・⑤・V-(1)・02	.....中村耕二
	IV-(3)-②・V-(1)-⑩・⑪	.....青崎和恵
	V-(2)	.....牛ノ浜修
	V-(3)	.....新東晃一・青崎和恵・中村耕二・牛ノ浜修

- 4 掲載地形図の承認番号は、昭52九複第97号である。
- 5 発掘調査に当たり鹿児島県文化財専門員河口貞徳氏の指導助言をえた。順序および石器の石材同定について鹿児島大学教育学部石川秀雄教授の助言をえた。陶磁器の鑑定は竜門寺焼（三彩）技術保持者川原軍二氏の協力をえた。
- 6 墨書土器の写真撮影について鹿児島県警察本部（鑑識課）の協力をえた。
- 7 縦貫道完成後の遺跡周辺の全景写真は道路公団鹿児島工事事務所より提供をうけた。
- 8 本書の編集は、西免・柵場・山神遺跡を平田、曲迫遺跡を弥栄、桑ノ丸遺跡を新東晃一がそれぞれ編集した。なお、本書で用いたレベル数値はすべて海抜高である。

## 調 査 の 組 織

西免遺跡	調査責任者	文化課長	犀川錠吉	
	調査担当者	主任文化財研究員	平田信芳	
		文化財研究員	出口 浩	
		主 事	吉永正史	
	主 事	牛ノ浜修		
柵場遺跡	調査責任者	文化課長	犀川錠吉	
	調査担当者	主任文化財研究員	平田信芳	
		文化財研究員	出口 浩	
		主 事	立神次郎	
	主 事	牛ノ浜修		
山神遺跡	調査責任者	文化課長	犀川錠吉 (昭和49年度)	
		文化課長	宇都 哲 (昭和50年度)	
	調査担当者	主任文化財研究員	平田信芳	
		文化財研究員	出口 浩	
		主 事	立神次郎	
	主 事	吉永正史		
	主 事	牛ノ浜修		
曲迫遺跡	調査責任者	文化課長	犀川錠吉	
	調査担当者	主任文化財研究員	平田信芳	昭和49年7月
		文化財研究員	出口 浩	
		文化財研究員	諏訪昭千代	昭和50年1月以降
主 事	弥栄久志			
桑ノ丸遺跡	調査責任者	文化課長	犀川錠吉 (昭和49年度)	
		文化課長	宇都 哲 (昭和50年度)	
	調査担当者	主 事	新東晃一	
		主 事	青崎和憲	
		主 事	中村耕治	
	主 事	牛ノ浜修		

## 埋蔵文化財発掘調査委託契約書

1. 委託事務の名称 九州自動車道（溝辺～加治木間）埋蔵文化財発掘調査
2. 調査施行区域 九州自動車（溝辺～加治木間）
3. 委託期間 昭和49年4月1日から昭和50年3月31日まで
4. 委託金額 40,296,000円

日本道路公団福岡建設局長早生隆彦（以下「甲」という。）は、鹿児島県知事金丸三郎（以下「乙」という。）に頭書の発掘調査の実施を次の条項により委託する。

第1条 甲は、別紙発掘調査計画書に基づき、頭書の委託金額の範囲内で頭書の調査の実施を乙に委託する。

第2条 甲又は乙の都合により、委託期間を延長し、若しくは発掘調査計画を変更し、又は調査を中止するときは、事前に協議して書面により定めるものとする。

第3条 乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し、甲に提出しなければならない。

第4条 乙は、第3条の資金使用計画書に基づき、頭書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2. 甲は、前項の請求があったときは、頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して、請求書を受理した日から15日以内に乙に所要の額を支払うものとする。

第5条 甲は、必要と認めるときは、頭書の調査の処理状況について調査し、又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2. 乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

3. 乙は、発掘調査の実施にあたり、作業箇所に作業表示旗をかけ、調査関係者には腕章等を着用させなければならない。

4. 乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに完了届を提出しなければならない。

5. 乙は、費用精算調書を作成し、委託期間内に甲に提出しなければならない。

第6条 この契約に基づく報告書、費用精算調書その他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指定しない限り、乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条 乙がこの契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等はすべて甲に帰属するものとする。ただし、発見した文化財に関する甲の権利は放棄するものとする。

第8条 調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については、乙が代行するものとする。

第9条 乙の責に帰する事由により頭書の期間内に第5条第4項に規定する完了届を提出しないときは、甲は遅滞損害金として期間満了日の翌日から起算し、提出当日までの遅滞日数につき頭書の委託金額に対して年8.25パーセントの割合で計算した金額を徴収することができる。

2. 甲の責に帰する事由により第4条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は甲に対して年8.25パーセントの割合で遅延利息の支払いを請求することができる。

第10条 乙の責に帰すべき事由により、甲が契約を解除したときは、乙は頭書の委託金額の10分の1を違約金として、甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。

第11条 この契約を変更する必要があるときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書2通を作成し、当事者記名押印のうえ各自1通を保有する。

昭和49年7月1日

甲 福岡市中央区天神2丁目13番7号  
日本道路公団福岡建設局  
局長 早 生 隆 彦

乙 鹿児島市山下町14番50号  
鹿児島県  
知事 金 丸 三 郎

## 九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

(昭和46年～昭和52年2月現在)

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	概要
1	堀之内B	吉松町川添				種寄川西側の山麓(傾斜面)畑地に縄文式土器、弥生式土器、須恵器の散布が見られる。
2	木場A	栗野町木場				コミュニティーセンター東部山間地の台地に、土師器、弥生式土器の散布が見られる。
3	木場B	〃				コミュニティーセンター南部山間地の台地に土師器、弥生式土器の散布が見られる。
4	木場C	〃				北部に湯ノ谷川、北に傾斜する台地中腹に土師器、弥生式土器の散布が見られる。
5	山崎B	栗野町山崎				栗野市街地の南の山間部畑地に土師器、弥生式土器の散布が見られる。
6	山崎B	〃				〃
7	山崎C	〃				〃
8	中尾田(山城)	横川町中野				横川市街地の北東、天降川を見下す南面する舌状台地に縄文、弥生土器片、石鏃の散布が見られる。中世山城と推定される。
9	木佐貫原	溝辺町木佐貫	50、12、1	(予案) 26,000㎡	吉 永 牛 ノ 濱	縄文時代(前期後期)土器片 (調査中)
10	石 峯	溝 辺 町 麓	一次 (50.10、2 50.12.20 二次 51、11、24	( 〃 ) 16,000㎡	河 口 出 口 西 田	①縄文(前期)土器、住居跡1基、集石遺構 ②土器器片 (調査中)

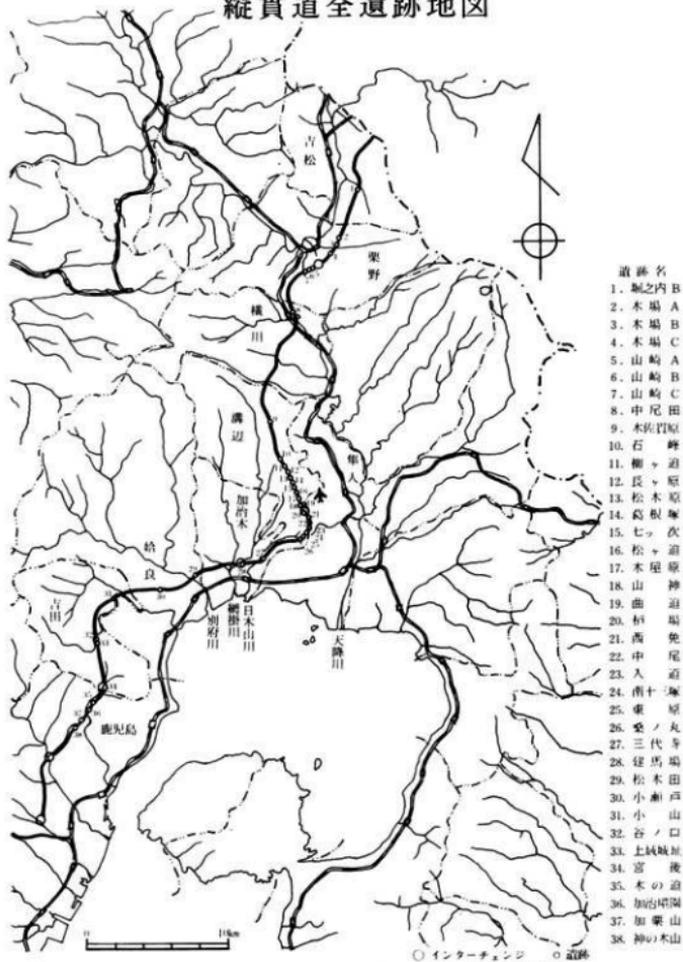
11	柳ヶ迫	溝辺町 藤	51. 3. 22 51. 5. 17	m <sup>2</sup> 700	長野 西田	①細石器制片(黒曜石) ②縄文時代(後期)土器片 (整理中)
12	長ヶ原	〃	50. 10. 1 50. 11. 28	1,140	新東 中村	①細石器制片(黒曜石) ②縄文時代(前期)土器片 ③弥生時代(後期)土器片 ( 〃 )
13	松木原	〃	50. 9. 18 50. 9. 26	420	新東 池中 畑村	①弥生時代(後期)土器片、 黒曜石 ( 〃 )
14	葛根塚	〃	50. 9. 8 50. 9. 26	790	〃	①弥生時代(後期)土器片、 石鏃(黒曜石) ( 〃 )
15	七ツ次	〃	50. 8. 5 50. 9. 18	2,700	弥栄 池畑 中村	①縄文時代(後期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片 ( 〃 )
16	松が迫	〃	50. 7. 14 50. 8. 11	600	弥栄 中村	①弥生時代(後期)土器片 ( 〃 )
17	木屋原	〃	50. 4. 7 51. 3. 31	4,500	弥栄 立神	①縄文時代(前期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片 ( 〃 )
18	山神	〃	49. 6. 13 50. 4. 28	6,900	平田 牛ノ 吉永	●①縄文時代(前・後期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片 ③平安時代・建物遺構、溝状 遺構、須恵器、墨書土器(燹、 廣一坏2、破片15)
19	曲迫	〃	50. 1. 27 50. 3. 31	4,300	藤訪 弥栄	●①縄文時代(後期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片 ③土師器片
20	畑場	〃	49. 6. 5 50. 3. 27	2,550	平田、牛 ノ瀬、吉永	●①縄文時代(前・後期)土器片
21	西免	隼人町西光寺	49. 5. 25 50. 2. 8	1,500	平田 吉永	●①弥生時代(後期)土器片 ②玉髓、黒曜石 ③弥生時代(後期)土器片 ④土師器片

22	中尾	隼人町西光寺	49. 9. 25 50. 2. 10	2,500㎡	出吉	口水	①縄文時代(後期)土器片 ②弥生時代(終末期)土器片、磨製石鏃 ③土師器片
23	入道	~	49. 8. 5 50. 3. 31	1,720	~	~	①弥生時代(終末期)土器片、石鏃、土師器、溝状遺構
24	南十三塚	溝辺町崎森	49. 7. 16 49. 9. 20	600	出中	口村	①弥生時代(終末期)土器片、
25	東原	~	49. 9. 17 50. 1. 24	8,700	源中	訪栄村	①縄文時代(早期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片、住居跡1基 ③土師器片
26	桑ノ丸	~	49. 8. 1 50. 4. 25	8,750	新青	東崎	●①縄文時代(早・前・後期)土器片、石斧、石鏃
27	三代寺	加治木町日木山	49. 3. 15 49. 7. 31	2,300	河新弥	口東栄	①縄文時代(早・前期)土器片、石斧、石鏃、集石遺構 ②弥生時代(終末期)土器片 ③土師器、土埴、ピット群
28	建馬場	加治木町反土	46. 12. 8 46. 12. 12	540	盛立	園神	①弥生時代(後期)土器片
29	松木田	給良町鍋倉	46. 12. 12 46. 12. 15	20	~	~	①柱穴~22個
30	小瀬戸	給良町西餅田	46. 8. 20 46. 11. 2	2,780	河立尾中	口崎神ノ上間元	①縄文時代(前期)土器片(塞ノ神) ②弥生時代(中期)土器片 ③黒書土師器(伴、大伴、原、仲家)、青磁、白磁、緑釉陶器、須恵器、紡錘車、土鏝、井戸杵、木製器、柱穴(多数)
31	小山	吉田村東佐多浦	46. 11. 6 47. 2. 10	1,420	~	~	①縄文時代(早・前期)土器片(吉田、塞ノ神) ②弥生時代土器片 ③黒書土師器、須恵器片、青磁、白磁、緑釉陶器、滑石製石鏃

32	谷ノ口	吉田町本城	46. 11. 10 46. 11. 18	124 <sup>m</sup>	盛岡 立神	①縄文時代(後期)土器片、 黒曜石剥片 ②弥生時代土器片 ③土師器、白磁、滑石製石鏡
33	土城城址	〃	47. 1. 14 47. 1. 18	20,000 現地踏査	盛岡 田野辺	①中世～山城、青磁、白磁、 瓦器
34	宮後	吉田町宮之浦	46. 11. 10 46. 11. 18	44	〃	①縄文時代(晩期)土器片、 石鏡(黒曜石) ②土師器
35	木の道	鹿児島市 川上町	50. 12. 9 50. 12. 11	300	立神、牛ノ 嶺、吉永	①弥生時代(後期)土器片
36	加治岡園	〃	50. 11. 26 51. 7. 31	1,200	赤栄 新東 長野 中村	①細石器～細石刀、細石核、 同時期土器片(有文) ②縄文時代前期土器片(塞ノ 神式)、集石遺構 ③弥生時代後期土器片
37	加栗山	〃	50. 2. 15 51. 10. 16	30,600	戸崎 青立 吉永 牛ノ嶺	①細石器～細石刀、細石核、 石鏡14、局部磨製石斧1、 大型台形石器1 ②縄文時代(前期)土器片(古 田式、前平式)、住居跡17、 土城72、集石遺構14、石鏡、 陰陽石(軽石製) ③中世～山城、棚列跡、空部、 柱穴、青磁、瓦器
38	神の木山	〃	50. 5. 12 50. 5. 15	20	戸崎 青立	①耕作上の下部はシラス割で 遺物なし

(●は、調査報告書発行終了)

# 縦貫道全遺跡地図



- | 道   | 跡   | 名 |
|-----|-----|---|
| 1.  | 製之内 | B |
| 2.  | 木場  | A |
| 3.  | 木場  | B |
| 4.  | 木場  | C |
| 5.  | 山崎  | A |
| 6.  | 山崎  | B |
| 7.  | 山崎  | C |
| 8.  | 中尾  | 田 |
| 9.  | 木原  | 原 |
| 10. | 石   | 峠 |
| 11. | 柳ヶ  | 道 |
| 12. | 長   | 原 |
| 13. | 松   | 木 |
| 14. | 高   | 根 |
| 15. | 高   | 七 |
| 16. | 松   | 木 |
| 17. | 松   | 木 |
| 18. | 山   | 神 |
| 19. | 山   | 神 |
| 20. | 山   | 神 |
| 21. | 山   | 神 |
| 22. | 山   | 神 |
| 23. | 山   | 神 |
| 24. | 山   | 神 |
| 25. | 山   | 神 |
| 26. | 山   | 神 |
| 27. | 山   | 神 |
| 28. | 山   | 神 |
| 29. | 山   | 神 |
| 30. | 山   | 神 |
| 31. | 山   | 神 |
| 32. | 山   | 神 |
| 33. | 山   | 神 |
| 34. | 山   | 神 |
| 35. | 山   | 神 |
| 36. | 山   | 神 |
| 37. | 山   | 神 |
| 38. | 山   | 神 |

九州縦貫自動車道鹿兒島線 (えびの~鹿兒島間) 路線内遺跡位置図

## 本文目次

### はじめに

I	調査に至るまで	20
II	遺跡の立地	21
III	縦貫道加治木・溝辺間路線内分布地の再確認	25
IV	綱序	27

### 西免遺跡

I	遺跡の位置	33
II	調査の経過	33
III	調査の概要	40
IV	遺物——弥生・石鏃	40
V	まとめ	42

### 柞場遺跡

I	遺跡の位置	43
II	調査の経過	43
III	調査の概要	43
IV	遺物——縄文・弥生・土師・石鏃・石斧・土錘	47
V	まとめにかえて	51

### 山神遺跡

I	遺跡の位置	52
II	調査の経過	54
III	綱位	59
IV	調査の概要	61
V	遺構——(1)溝状遺構	72
	(2)建物遺構	73
	(3)石組遺構	80
VI	遺物——縄文・弥生・土師・埴書土器・須恵器・土錘・石鏃・ 石匙・鍛石・鉄鏃・ふいごの羽口・青銅製仏像	81
VII	まとめ	115

曲直遺跡

I	遺跡の位置および調査期間	117
II	日誌抄	117
III	地形	118
IV	土層および拡張区の出土状況	118
V	遺物——縄文・土師・石畿・石匙	122
VI	まとめ	124

桑ノ丸遺跡

I	遺跡の位置	159
II	調査の経過	161
III	調査・出土遺物の概要	165
IV	各地点の調査	167
	(1) 層位	167
	(2) 第1地点の調査	168
	①調査の概要	
	②遺構	
	③出土遺物と土器出土状況	
	(3) 第2地点の調査	181
	①調査の概要	
	②遺構	
	③出土土器	
	(4) 第3地点の調査	184
	①調査の概要	
	(5) 第4地点の調査	185
	①調査の概要	
	②遺構	
V	出土遺物	188
	(1) 土器	188
	(2) 石器	226
	(3) まとめ	232

## 図 版 目 次

図版 1	山神遺跡遠景	125
図版 2	西免遺跡第 1 地点Ⅱ層上部のピット群、西免遺跡出土の成川式土器	126
図版 3	榎場遺跡第Ⅱ層上面と断面	127
図版 4	榎場遺跡出土の縄文式土器	128
図版 5	榎場遺跡出土の縄文式土器、山神遺跡出土の縄文式土器	129
図版 6	榎場遺跡出土の甕形土器・成川式土器	130
図版 7	山神遺跡第 8 地点の溝状遺構	131
図版 8	山神遺跡第 10 地点の溝状遺構と出土遺物	132
図版 9	山神遺跡第 8 地点の焼土とピット群 (第 1 号建物遺構) 第 9 地点の焼土とピット群 (第 3 号建物遺構)	133
図版 10	山神遺跡第 9 地点の土層横転の状況・第 8 地点の焼土の断ち割り面	134
図版 11	山神遺跡第 10 地点の石組遺構	135
図版 12	山神遺跡第 8 地点の石匙の出土状況・炭化物出土のピットの断ち割り	136
図版 13	山神遺跡第 8 地点の黒書土器の出土状況 第 10 地点の黒書土器の出土状況	137
図版 14	山神遺跡出土の条痕文土器	138
図版 15	山神遺跡出土の縋糸文土器	139
図版 16	山神遺跡出土の甕形・鉢形土器	140
図版 17	山神遺跡出土の土師器環	141
図版 18	山神遺跡第 8 地点出土の黒書土器 (SS 撮影と赤外線フィルム撮影)	142
図版 19	山神遺跡第 8 地点出土の黒書土器片	143
図版 20	山神遺跡出土の須恵器・石匙	144
図版 21	西免・榎場遺跡出土の石鎌	145
図版 22	山神遺跡出土の石鎌	146
図版 23	山神・榎場遺跡出土の石鎌・土錘	147
図版 24	山神遺跡出土の仏像・鉄鎌	148
図版 25	曲道遺跡近景及びトレンチ・出土状況	149
図版 26	曲道遺跡出土の手づくね土器・成川式土器・縄文式土器・石匙・石鎌	150
図版 27	縦貫道完成後の遺跡周辺の全景写真	151

## 挿 図 目 次

第1図	九州縦貫自動車道溝辺工区周辺遺跡分布図（1／50000）……………	24
第2図	山神遺跡の順序……………	28
第3図	桑之丸遺跡の順序……………	29
第4図	西免・榎場・山神・曲道遺跡発掘区域全体図……………	31
第5図	西免遺跡第1地点の第Ⅱ層遺物出土状況……………	34
第6図	西免遺跡第1地点の上層図……………	35
第7図	西免遺跡第2地点の上層図……………	37
第8図	西免遺跡第3地点の上層図……………	39
第9図	西免遺跡出土の成川式土器……………	41
第10図	榎場遺跡第5地点の第Ⅱ層の遺物散布状況……………	44
第11図	榎場遺跡第4地点の上層図……………	45
第12図	榎場遺跡第5地点の上層図……………	46
第13図	榎場遺跡第5地点出土の縄文式土器……………	47
第14図	榎場遺跡第4地点出土の縄文式土器……………	48
第15図	榎場遺跡第5地点出土の縄文式土器……………	49
第16図	榎場遺跡第5地点出土の成川式土器……………	50
第17図	榎場遺跡出土の磨製石斧……………	51
第18図	山神遺跡の上層横断面所……………	60
第19図	山神遺跡第6地点の旧道跡……………	61
第20図	山神遺跡第8地点の溝状遺構と遺物散布状況……………	62
第21図	山神遺跡第8地点の焼土とピット群……………	63
第22図	山神遺跡第8地点の上層図(1)……………	65
第23図	山神遺跡第8地点の上層図(2)……………	66
第24図	山神遺跡第8地点の第Ⅲ層上部での遺物散布状況……………	66
第25図	山神遺跡第9地点の上層図……………	67
第26図	山神遺跡第10地点の上層図……………	68
第27図	山神遺跡第9地点の焼土とピット列（3号建物遺構）……………	69
第28図	山神遺跡第9地点E-145b・c・d-Ⅲのピット群……………	69
第29図	山神遺跡第10地点の溝状遺構下の焼土とピット群……………	70
第30図	山神遺跡第10地点の礎板をもったピット群……………	70
第31図	山神遺跡第10地点の溝状遺構平面図……………	71
第32図	山神遺跡1号建物遺構……………	74

第33頁	山神遺跡2号建物	78
第34頁	山神遺跡第10地点の第Ⅲ層上部の石組遺構	80
第35頁	山神遺跡出土の縄文式土器	82
第36頁	山神遺跡出土の燃糸文土器	83
第37頁	山神遺跡出土の縄文式土器	84
第38頁	山神遺跡出土の縄文式土器	85
第39頁	山神遺跡出土の石器	87
第40頁	山神遺跡出土の石器	88
第41頁	西免・榎場遺跡出土の石鏃	91
第42頁	山神遺跡出土の石鏃	92
第43頁	山神遺跡出土の石鏃および榎場遺跡出土の土鏃	93
第44頁	山神遺跡第8地点出土の壘形土器・鉢形土器	94
第45頁	土師器坏の計測	96
第46頁	山神遺跡出土の土師器	108
第47頁	山神遺跡出土の黒書土器	109
第48頁	山神遺跡出土の須恵器	112
第49頁	山神遺跡出土のふいごの羽子	114
第50頁	山神遺跡第8地点出土の青磁片	115
第51頁	山神遺跡第10地点溝内出土の遺物	114
第52頁	曲道遺跡位置図	118
第53頁	曲道遺跡附近の地形図および調査区	119
第54頁	曲道遺跡Q～T-152区の北側断面図	120
第55頁	曲道遺跡O・P・Q-129～133区の出土状況	121
第56頁	曲道遺跡出土の土器実測図	122
第57頁	曲道遺跡出土の石器実測図	123

## 表 目 次

第1表	山神・榎場・西免遺跡の調査面積一覧	53
第2表	1号建物計測表	73
第3表	2号建物計測表	77
第4表	3号建物計測表	79
第5表	石鏃分類表	90
第6表	土師器坏の計測	98

## 図 版 目 次 (そのII)

図版 1	桑ノ丸遺跡遠景(南から).....	237
図版 2	第1地点遠景(東から).....	237
図版 3	第1地点確認調査(東から).....	238
図版 4	第1地点確認調査(南から).....	238
図版 5	12類(成川式土器)出土状態.....	239
図版 6	12類(成川式土器)出土状態.....	239
図版 7	窯状遺構断面写真.....	240
図版 8	窯状遺構.....	240
図版 9	窯状遺構全景.....	241
図版10	窯状遺構と断層断面.....	241
図版11	円筒土器(2類)出土状態.....	242
図版12	円筒土器(2類)出土状態.....	242
図版13	第1地点遺物出土状態(Ⅲb層).....	243
図版14	角筒土器(2類)出土状態.....	243
図版15	第1地点発掘風景.....	244
図版16	遺物出土状態(Ⅲb層).....	244
図版17	地層横転転1 検出状態.....	245
図版18	地層横転転1 掘り上げ状態.....	245
図版19	地層横転転3 断面.....	246
図版20	地層横転転3 掘り上げ状態.....	246
図版21	第2地点遠景(東から).....	247
図版22	Ⅲa 層の集石.....	247
図版23	第3地点落ち込み.....	248
図版24	第3地点全景(南から).....	248
図版25	落ち込み.....	249
図版26	円筒土器(1類)出土状態.....	249
図版27	近世墓検出状態.....	250
図版28	近世墓群.....	250
図版29	近世墓の供養祭.....	251
図版30	近世墓出土の人行.....	251
図版31	1類(古田式土器)・2類(前平式土器).....	252
図版32	2類(前平式土器).....	253

図版33	2類(前平式土器)	254
図版34	2類(前平式土器)	255
図版35	2類(前平式土器)	256
図版36	2類(前平式土器)口縁施文	257
図版37	2類(前平式土器)口縁施文	258
図版38	1類(吉田式土器)・2類(前平式土器)	259
図版39	3類	260
図版40	3類	261
図版41	3類	262
図版42	3類	263
図版43	4類(押型文土器)	264
図版44	4類(押型文土器)・5類(平付II式土器)	265
図版45	6類(塞ノ神A式土器)	266
図版46	8類(阿高式土器)・9類(轟式土器)	267
図版47	10類(指宿式系土器)	268
図版48	11類(西平式・三万田式土器)	269
図版49	12類(成川式土器)	270
図版50	14類(須恵器)・15類(近世磁器)	271
図版51	15類(近世陶器)	272
図版52	石鏃	273
図版53	石器	274

## 挿 図 目 次 (そのII)

第1図	糸ノ丸遺跡地形図……………	159
第2図	糸ノ丸遺跡周辺地図……………	160
第3図	糸ノ丸グリット配置図……………	165
第4図	遺物類別出土状況図……………	166
第5図	糸ノ丸遺跡順序……………	167
第6図	第1地点断面実測図……………	169
第7図	第1地点平面図(Ⅰ)……………	171
第8図	窯状遺構実測図……………	173
第9図	12類定形土器出土状態実測図……………	175
第10図	土器実測図及拓影……………	176
第11図	第1地点平面図(Ⅱ)……………	177
第12図	地層横断実測図……………	179
第13図	縄文式土器出土状況図……………	180
第14図	第2地点平面図……………	181
第15図	集石実測図……………	182
第16図	第2地点・第3地点断面図……………	183
第17図	第3地点平面図……………	184
第18図	第4地点平面図……………	185
第19図	第4地点断面図……………	186
第20図	柱穴遺構配置図……………	187
第21図	1類土器(古田式土器)……………	188
第22図	2類(前平式土器—Ⅰ)……………	193
第23図	2類(前平式土器—Ⅱ)……………	194
第24図	2類(前平式土器—Ⅲ)……………	195
第25図	2類(前平式土器—Ⅳ)……………	196
第26図	2類(前平式土器—Ⅴ)……………	197
第27図	2類(前平式土器—Ⅵ)……………	198
第28図	2類(前平式土器—Ⅶ)……………	201
第29図	2類(前平式土器—Ⅷ)……………	202
第30図	2類(前平式土器—Ⅸ)……………	203
第31図	第3類土器(Ⅰ)……………	207
第32図	第3類土器(Ⅱ)……………	208

第33頁	第Ⅲ類土器(Ⅲ) .....	209
第34頁	4類(押型文土器) .....	210
第35頁	5類(平存B式)、6類(塞ノ神A式)、7類(塞ノ神B式) .....	212
第36頁	8類(轟式土器)、9類(阿高式土器) .....	214
第37頁	第10類(指宿式系土器) .....	216
第38頁	11類(西平式、三万田式土器) .....	217
第39頁	12類(成川式土器—Ⅰ) .....	218
第40頁	12類(成川式土器—Ⅱ) .....	219
第41頁	12類(成川式土器—Ⅲ) .....	221
第42頁	13類(土師器) .....	223
第43頁	14類(須恵器) .....	224
第44頁	15類(近世陶器) .....	224
第45頁	石器実測図 .....	227
第46頁	石器・スクレーパー実測図 .....	228
第47頁	石器実測図 .....	229
第48頁	石器実測図 .....	230

## 表 目 次 (そのⅡ)

第1表	桑ノ丸遺跡出土土器類別表 .....	166
第2表	1類土器(古田式土器)一覽表 .....	189
第3表	2類土器(前平式土器・円筒形)一覽表 .....	191
第4表	2類土器(前平式土器・角筒形)一覽表 .....	200
第5表	3類土器一覽表 .....	206
第6表	4類(押型文土器)一覽表 .....	210
第7表	5類(平存式)、6類(塞ノ神A式)、7類(塞ノ神B式)一覽表 .....	211
第8表	8類(轟式土器)、9類(阿高式土器) .....	213
第9表	10類(指宿系土器)、11類(西平・三万田式系土器) .....	220
第10表	12類(成川式土器) .....	220
第11表	13類(土師器)、14類(須恵器) .....	225
第12表	15類(近世陶器) .....	225
第13表	石器一覽表 .....	231

## I 調査に至るまで

九州縦貫自動車道の建設事業が始まったのは、昭和43年で、本県の鹿児島線については、加治木～鹿児島間の工事施工命令が昭和43年4月1日に出されている。当教育委員会としてはこれに対処するために、社会教育課文化係（当時）を中心に、関係者の協力を得て、昭和43年12月から昭和44年1月まで、九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財分布調査を実施し、この調査結果に基づいて鹿児島～加治木間の路線が決定された。

その後、鹿児島線（加治木～吉田間）の工事計画が具体化するに及んで、県教育委員会は、昭和46年1月に再度、県文化財専門委員（当時）河口貞徳氏の指導を得て、日本道路公団福岡支社・鹿児島工事事務所と路線内の分布調査を実施した。この結果に基づき、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」第4項により、日本道路公団と協議した結果、昭和46年度において、始良町小瀬戸遺跡ほか6か所の発掘調査と中世の山城1か所について調査を行うことになった。この調査のうち小瀬戸遺跡、小山遺跡については、県文化財専門委員・河口貞徳氏を主任調査員とした調査団が当たり、残りの遺跡は県社会教育課が実施した。

その後、道路公団は、昭和47年2月23日に覚書に基づき、鹿児島線（吉松～加治木間）の埋蔵文化財について協議を求めた。これに対し、県文化室は、昭和47年8月2日～10日、同月18日から26日までの間に、延長38キロメートル、巾2キロメートル（溝辺～加治木間は予定路線内）にわたって分布調査を実施した。

この結果に基づいて、文化室は路線の決定について埋蔵文化財の保護のうえから十分配慮されることを要望した。これについて、道路公団は、溝辺～加治木間についてはすでに昭和47年5月17日に路線を発表した後だった関係上、路線内の各遺跡についてはすべて記録保存することで合意した。さらにその後これらの遺跡について再度確認するために、県文化財専門委員・河口貞徳氏、同池水寛治氏の協力を得て分布調査を実施し、発掘調査前の取扱いに慎重を期した。又、吉松～溝辺間の埋蔵文化財については、昭和47年度に実施した分布調査の結果によって協議を進めてきたが、さらに、昭和49年1月～2月、河口貞徳氏の協力を得て再確認のための分布調査を実施し、これらの結果に基づいて遺跡の保存区分を決め、道路公団と協議の結果保存する遺跡1か所（吉松町堂迫地下式横穴）、記録保存する遺跡10か所（横川町中尾田遺跡他）が決定した。

その後、県教育委員会は記録保存する遺跡について、昭和49年3月19日より加治木町三代寺遺跡の発掘調査をはじめとして実施することにした。なお、発掘調査については、各年度毎に契約することになった。

以後、発掘調査は関係者各方面の協力を得て続行されているが、昭和52年2月現在、調査終了した遺跡は加治木～吉田間の6遺跡、溝辺～加治木間の17遺跡、吉田～鹿児島間の4遺跡等で、調査面積も約100,000平方メートルに及んでいる。

## II 遺跡の立地

標高 200～280m の溝辺の台地は、本来始良カルデラの北壁に連なるシラス台地と云われている。東側は天降川水系によって霧島山塊と隔てられ、西側は網掛川水系によって蒲生地塊と切りはなされている。この台地上の20km<sup>2</sup>をこえる平坦面は古来十三塚原と称せられ、その一部は昭和18年頃、海軍航空隊の基地として切りひらかれ、滑走路のほかに随所に誘導路・えんたい壕・機関銃座などが作られていたところであり、そのため昭和20年終戦まじわにはたびたびB-29・グラマン機の攻撃をうけ、現在でも当時の不発弾が時々発見されることがある。海軍航空隊設営以前は、台地とは云っても山あり谷ありと云ったような地形で、よく狐の出るところだったらしいが、現在は地ならしされてほとんど起伏が失なわれつつある。第2次大戦後、飛行場跡は2反5畝単位で分配されその大半が茶畑と化していたが、昭和46年以降この地は再び飛行機と緑の深い鹿児島空港に変身してしまっている。十三塚原のほとんどが茶畑で、茶畑づくりには40cm～1mも掘りおこすとのことであり、この数年茶集団茶園化をはかるためブルドーザーがたいふ投入されたらしい。昭和39年から昭和40年にかけて大規模な構造改善事業が実施されたところが多いことも発掘調査に入ってから聞かされた。また「溝辺こぼろ」の名で県内に親しまれたごぼろの産地で、たゞできえ深く掘りおこさなければならぬのに、昭和45年頃からトレンチャーとよぶ機械が導入されて、たいそう深く掘りかえられたらしい。

このように掘りかえしと地ならしを繰り返しているうちに、広範囲にわたって土器片を散らしてしまったものと考えられ、分布調査ではほとんどないところはないほどに地表にその散布がみとめられる。かつては遺跡が存在していたとしても、知らず知らずの間にかなり荒されてしまったと考えられ、遺物が散らばることになる根元を探りだすのは大規模な調査でなければほとんど不可能な地域でもある。

また、溝辺町の古代・中世に関する史料は皆無の状態がよく判らないが、地名などに古い時代からのものと考えられるものが散見される。十三塚原台地の北端に神話上山幸になる彦火々出見尊（ヒコホホデミノミコト）の陵とされる「高屋山陵」があり、宮内庁管轄の陵墓となっているが考古学的には実態不明である。溝辺台地の南端で、桑之丸川を隔てて桑之丸遺跡に相対する山に「弓削」という集落があり、その地から石鏃の原材料のひとつとされる玉髓が出るとのことである。大隅一之宮鹿児島神宮の裏山ともいえるところであり、由緒ありげなところであるが学問的検討は加えられていない。「丹附生」（ニツケ）・「地久里」（チクリ）・「瀬間利」（セマリ）など古代の地名も今後検討を要しよう。「十三塚」には13の塚それぞれに石碑が立てられており、土地の人々からこれにまつわる伝説を聞かされたがその実態はよく判らない。先学柳田国男が全国的にリストアップした十三塚と云う地名以上に検討は進んでいない。「論地」と云う地名も中世になんらかの土地争いのあったところであろうが、史料は皆無である。近世に至り加治木郷にふくまれていたものが慶安年間に溝辺郷として独立しているが、そ

の理由もよく理解できない。

今日の集落は台地の縁辺部および台地の直下に点在しているが、遺跡もまた今日の集落近くに存在している。周辺の遺跡と対比してそれらとの関連を考察すべきであるが、資料準備不足のため簡単に地図(第1図)と一覧表をかかげるだけにとどめることにする。その他耕作中にたまたま出土した完形品(須恵器の甕・持高坏など)が溝辺町内の中学校・小学校などに保管されているとのことであり、それらを関連遺跡の遺物として資料化をはかる計画であったが、残念ながらそこまでは手がまわりかねた。来年度の報告書で当地区を再びとりあつかうことになるので、その際それらについてまとめた。

第1表 九州縦貫道溝辺工区内遺跡および周辺の遺跡一覧表

地図番号	遺跡名	所在地	地形	遺物	備考
1	三代寺	加治木町三代寺	山腹	縄文(早・中)・土師器	S49調査、現在整理中
2	榮ノ丸	溝辺町崎森榮ノ丸	台地	縄文(前・中・後)・弥生(後)～古墳・土師器・近世陶器	本報告書所収
3	東原	〃〃東原	台地	縄文(早・後)・弥生(後)～古墳・土師器	S49調査、現在整理中
4	南十三塚	〃〃南十三塚	台地	弥生(後)～古墳	〃
5	入道	華人町西光寺入道	台地	弥生(後)～古墳	〃
6	中尾	〃〃中尾	台地	弥生(後)～古墳	〃
7	西免	〃〃西免	台地	弥生(後)～古墳	本報告書所収
8	戸場	溝辺町戸場	台地	縄文(前・後)・弥生(後)～古墳・土師器・須恵器	〃
9	山神	〃〃山神	台地	縄文(前・後)・弥生(後)～古墳・土師器・須恵器・青磁	〃
10	曲道	〃〃曲道	台地	縄文(後)・弥生(後)～古墳・土師器	〃
11	木屋原	〃〃木屋原	台地	縄文(早・前)・弥生(後)～古墳	S50調査、現在整理中
12	松ヶ道	〃〃松ヶ道	台地	弥生(後)～古墳	〃
13	七ツ次	〃〃七ツ次	台地	縄文(後)・弥生(後)～古墳	〃
14	葛根塚	〃〃葛根塚	台地	弥生(後)～古墳	〃
15	松木原	〃〃松木原	台地	弥生(後)～古墳	〃
16	長ヶ原	〃〃長ヶ原	台地	細石器・縄文(前)・弥生(後)～古墳	〃
17	柳ヶ道	〃〃柳ヶ道	台地	細石器・縄文(後)	〃
18	石峰	〃〃石峰	台地	縄文(早期一押型文土器)	現在発掘調査継続中(註.1)
19	十三塚原第1地点	〃〃鹿児島空港内	台地	縄文(前・中)一平向山・家之神・阿高糸	S45.7調査(註.2)
20	十三塚原第2地点	〃〃〃	台地	弥生(後)	〃
21	久保山	〃〃久保山	台地	縄文・弥生	〃
22	掘石ヶ岡	〃〃竹子掘石ヶ岡	山地	縄文(早一押型文土器)	? (註.3)
23	横頭	〃〃横頭	台地	縄文・弥生・土師	? (註.4)

地図番号	遺跡名	所在地	地形	遺物	備考
24	中野	溝辺町 中野	台地	縄文(後)・弥生・土師・須恵・黒曜石	
25	麦平田	〃 有田麦平田	山地	縄文(前・中・後)・葦之神・並木・岩崎下副式	
26	菅ノ口A	〃 〃 菅ノ口	山林	弥生	
27	菅ノ口B	〃 〃 〃	山林	弥生	
28	石原	〃 〃	台地	縄文・弥生	
29	倉ノ山	〃 〃 倉ノ山	台地	弥生	
30	竹山	〃 〃 竹山	山麓	縄文(前)・古田式・石鏡・石笥・石斧	
31	仏石	加治木町 小山田仏石	山地	縄文(後)・晩一岩崎上副、夜日式	
32	反土	〃 反土	水田	弥生(後)	
33	日本山調査	〃 日本山	山麓	縄文(前)・日本山式・獣骨・厨窓・住居跡	
34	黒川山	〃 黒川山	山地	弥生(後)・重弧文土器	
35	楠原	〃 日本山中野 〃 刑楠原	台地	縄文(前・中)・弥生(重弧文土器)	
36	弓削丘	卑人町 小田弓削丘	台地	須恵器(蔵骨器)	
37	沢家墓所	〃 宮内	畑地	古墳	
38	牟人塚	〃 内山田	平野	供養塔	
39	塚ノ原	〃 小田塚ノ原	畑地	縄文(前)・弥生	
40	伽藍	〃 貞孝108	遺跡地	弥生・鉄剣	
41	鹿兒島神宮	〃 宮内	山麓	貝塚(縄文・弥生)	S 52 工事中発見

(地図番号は第1図のものである。)

- 註1 昭和41年8月5日～8月9日、河口貞徳・玉竜高校考古学クラブが調査。「日本考古学年報19」。
- 2 「給良郡溝辺町大型空港建設地内における埋蔵文化財発掘調査報告書」鹿兒島県史跡調査会、1971。3。
- 3 「全国遺跡地図：鹿兒島県、文化庁、昭和50年3月」および「鹿兒島県遺跡地図：鹿兒島県教育委員会、昭和48年」はこの地点にドットをおとしているが、「溝辺町郷土誌：溝辺町、昭和48年11月」では異なった地点になっている。竹子にあるならばこの地図には入らない。この地点と竹子の方とを現地確認していないので、地元の方に分があるとは思われるがそのまま地点をおとしておく。
- 4 「全国遺跡地図：鹿兒島県」および「鹿兒島県遺跡地図」はこの地点にドットをおとしているが、「溝辺町郷土誌」では異なっている。現地確認をしていないのでそのまま地点をおとしておき、後日検討したい。

上記の遺跡一覧表を作るにあたり、註1～4にかかげた文献の他に使用したものはつぎのものである。「鹿兒島県遺跡地名表」鹿兒島県教育委員会、昭和39年3月。「埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書、九州高速道路鹿兒島線(加治木～古松間)」鹿兒島県教育委員会、1973。



第1図 九州縦貫自動車道清辺工区周辺道路分布図 (1/50000)

### III 縦貫道加治木～溝辺間路線内分布地の再確認

文化課に着任したばかりの平田・出口がまずとりかゝったのが、九州縦貫道溝辺上区路線内の発掘調査準備であり、昭和49年4月16日～18日の三日間とりあえず現地をみて調査計画をたてることにした。

4月16日 溝辺インターチェンジ予定地(柵場遺跡)→入道遺跡の分布調査。西免地区で黒曜石の石鏃を採集(図版21-1, 図41-1)。出口は生まれてはじめて表面採集で石鏃を発見することができたことと喜ぶ。堀途溝辺町教育委員会に立寄り、作業員募集について打合わせ。

4月17日 インターチェンジ～木屋原間およびサービスエリア(曲道遺跡)の分布調査。バイパス南側の畑地に多量散布していることを確認し、こゝを掘れば出るなど話しあう。(発掘調査時の山神第8地点)。ひばりがさえずる一面黄色な菜の花畑で昼食をとったが、なにげなく腰をおろしたところに、土器の破片が数片ころがっていたのが印象的。(発掘調査時の柵場第5地点)。

4月18日 桑之丸・東原・南十三塚・入道地区の遺物散布状況を確認。桑之丸・東原はその南半部に多量に散布がみられることを確認。入道は三角点付近の畑地に多量の土器散布がみられることを確認した。また持参した資料に記されていない区域すなわち中尾地区に土器片の散布がみられたのでこゝも調査対象地として追加することにした。午後、論地・糸走など地権者・耕作者の自宅を尋ね歩いて耕作時の状況について聞きとり調査。西免のごぼう作りおよび茶園の集団化、山神の養蚕工場の地下倉庫、昭和18年海軍航空隊基地造営のための地ならし作業など、東原は昭和40年から42年にかけて農地基盤整備事業が行なわれたなど、遺跡が荒らされているかも知れない要素を聞きこむ。それでも遺構の最下部はとらえられるのではないかと希望的観測をもつ。午後3時、森田専門員・河野主任とともに溝辺町教育委員会を訪問し、調査開始に伴う諸打ち合わせを行なう。

現地調査の結果「九州高速道加治木～古松間埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書」(1973年、鹿児島県教育委員会)にあげられた遺跡地名および地図に若干のミスがあることに気付いたので、こゝで修正しておく。

小屋原遺跡 (分布調査報告書遺跡番号105, 全国遺跡地図:鹿児島310-42)

「木屋原」が「山神」にある表記である。小字木屋原は県道加治木～溝辺間バイパスの北側に当たり、県道より南側は「山神」となる。地続きでしかも同性格の遺跡であり、県道の両側をひとまとめにして一遺跡名で統括してもよいであろうが、昭和49年度の調査対象地が県道の線までであり、山神地区が遺跡の主体となっていたので「木屋原遺跡」と「山神遺跡」とに区分した。全国遺跡地図における小屋原遺跡の地点は本報告書であつた曲道遺跡にあっている。本報告書ではこの遺跡を「山神」「曲道」「木屋原」とに分け、今回は山神・曲道につい

て報告する。

**中免・西免地区遺跡**（分布調査報告書遺跡番号106，全国遺跡地図：鹿児島10-43）

分布調査報告書では所在地溝辺町中免となっているが、一筆図に中免という地名はなく、該当地の小字名は「柵場」である。聞きとりの結果、柵場一帯のことを俗に中免とも云うことを知ったが、俗称を避けて柵場を遺跡名にした。したがって「柵場遺跡」と「西免遺跡」とに区分することにした。柵場が溝辺インターチェンジがつくられたところになる。西免は柵場の隣接地であるが、溝辺町ではなく牟人町の行政区画内に入る。

**東原遺跡**（分布調査報告書遺跡番号107，全国遺跡地図：鹿児島10-44）

分布調査報告書に示された地図と一筆図と現地とを比較して、示された地図は現実には「南十三塚」の地形であり、しかも別に本物の「東原」にも遺物の散布がみられたので、混同を避けるために「東原遺跡」と「南十三塚遺跡」とにはっきり分けることにした。両者の距離は約500mはなれている。全国遺跡地図のドットは東原の地点におとされている。

この他、「南十三塚」と「西免」との間に、「入道」に二ヶ所「中尾」に一ヶ所散布地があることを現地踏査で確認した。

このようにして昭和49年度の発掘調査は、北から「山神」・「<sup>〃</sup>曲道」・「<sup>〃</sup>柵場」・「<sup>〃</sup>西免」・「<sup>〃</sup>中尾」・「<sup>〃</sup>入道」・「南十三塚」・「東原」・「桑ノ丸」の各遺跡が対象地となった。本報告書では山神・曲道・柵場・西免・桑ノ丸をとりあつかう。中尾・入道・南十三塚・東原は担当者が長期の調査にはりついているため次回の報告書にまわすことにした。

## IV 層 序

鹿児島大学教育学部教授 石川 秀 雄

### 山神遺跡

#### (1) 層序

本地域の層序は上位より下位にかけて、I層からV層の5層に分けられる（第①図参照）。各層の概要は下記の通りである。

I層（黒色火山灰層）…最上位にあり耕作土となっており、ところによって、黒ボク（上位）と黒ニガ（下位）の2層に分れているところもある。

II層（上部ローム層）…“赤ホヤ”層とも呼ばれ、下部に特徴的な7～8mm大のオレンジ色の軽石からなる軽石層がみられる。

III層（中部ローム層）…下部に砂質部の混った5mm～6mm大のオレンジ色の軽石からなる軽石層がある。

IV層（下部ローム層）…中位に黒色粘質帯をはさむ。

V層（シラス層）…最下位のV-cは風化した赤シラス、中位に黄褐色シラス層（V-b）があり、ときに砂質部を含む。最上位は粘土層からなる。

第7地点（曲道 Site）W-160-dにおいて、II・III層が70°の傾斜をもって拗曲しているところがみられるが、これは、局部的な小断層を伴う微褶曲をうけたところであり、その変動の時期はII層堆積後I層堆積前である。

#### (2) 遺物

I層の最下部に弥生、縄文後晩期の遺物を出すのが、従来、この層位から、志布志湾岸において縄文後期初頃（3,000年前）の遺物などが出土しており、これに対比されよう。従来<sup>10</sup>CからII層（上部ローム層）上部の黒褐色ローム層からは（4,640±80 Y. B. P；松井, 1966）が、同層下部の腐食層から（6,390±90 Y. B. P, 松井, 1966）が得られている。よって、III層（中部ローム層）上位のIII a層上部から出土した縄文前期の遺物は、ほぼ6,390年前頃のものと思われる。なお、V-a層はこれに対比される地層から（10,630～11,220 Y. B. P.；石川ら, 1972）が得られており、これに対比されよう。

#### (3) ローム層の構成鉱物

本地域のローム層を構成する重鉱物としては、磁鉄鉱（M）、普通輝石（Au）、シソ輝石（Hy）がある。それらの量比は下記の通りである。

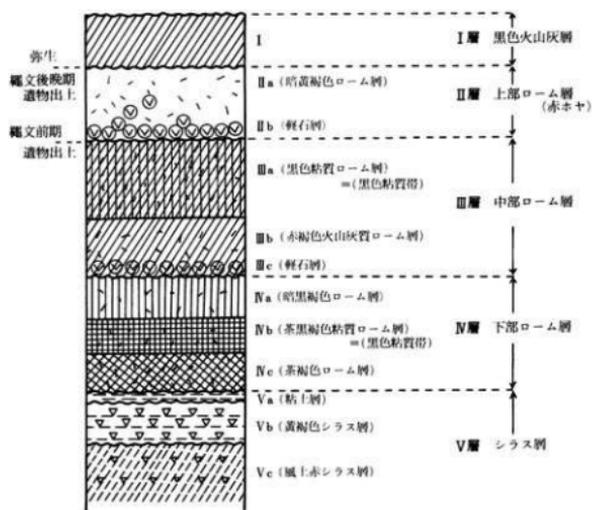
上部ローム層 M > Hy > Au

中部・下部ローム層 Hy > M > Au

本地域のローム層を構成する粘土鉱物は下記の通りである。

上部・中部ローム層…アロフエン

下部ローム層…加水ハロイサイト、モンモリロナイト



第1図 溝辺町山神遺跡の層序

### 桑ノ丸遺跡

本地域の層序は溝辺町山神遺跡の場合と類似しており、上位より黒色火山灰層（Ⅰ層）上部ローム層（Ⅱ、Ⅲa、Ⅲb）および中部ローム層（Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ）からなる。

#### (1) 黒色火山灰層

耕作土となっており、その下部より弥生式遺物を出土する。

#### (2) 上部ローム層

全体的に厚さは80cm程であり、上位から赤褐色ローム層（Ⅱ）、茶褐色ローム層（Ⅲa）、茶色ローム層（Ⅲb）があり（Ⅲb）層には1～3mm大の軽石が含まれる。（Ⅱ）層から縄文後期、（Ⅲ-a）層から縄文前期（新）、（Ⅲ-b）層から縄文前期（古）のそれぞれ遺物を出土する。なお本層と対比される地層の年代は上限4,640年～下限6,390年として与えられているが、これに対応している。

#### (3) 中部ローム層

全体的に測定できる厚さは80cm程度であり、上位より、黒褐色粘質ローム層（Ⅳ）、茶褐色粘質ローム層（Ⅴ）および砂層（Ⅵ）からなり、砂層（Ⅵ）はさらに上部の含軽石砂層と下部の砂質層に分けられる。

(4) 本地域には局所的に小断層、地層の撓曲部がみとめられ、その形成時期は上部ローム層堆積後、黒色火山灰層堆積前と考えられる。

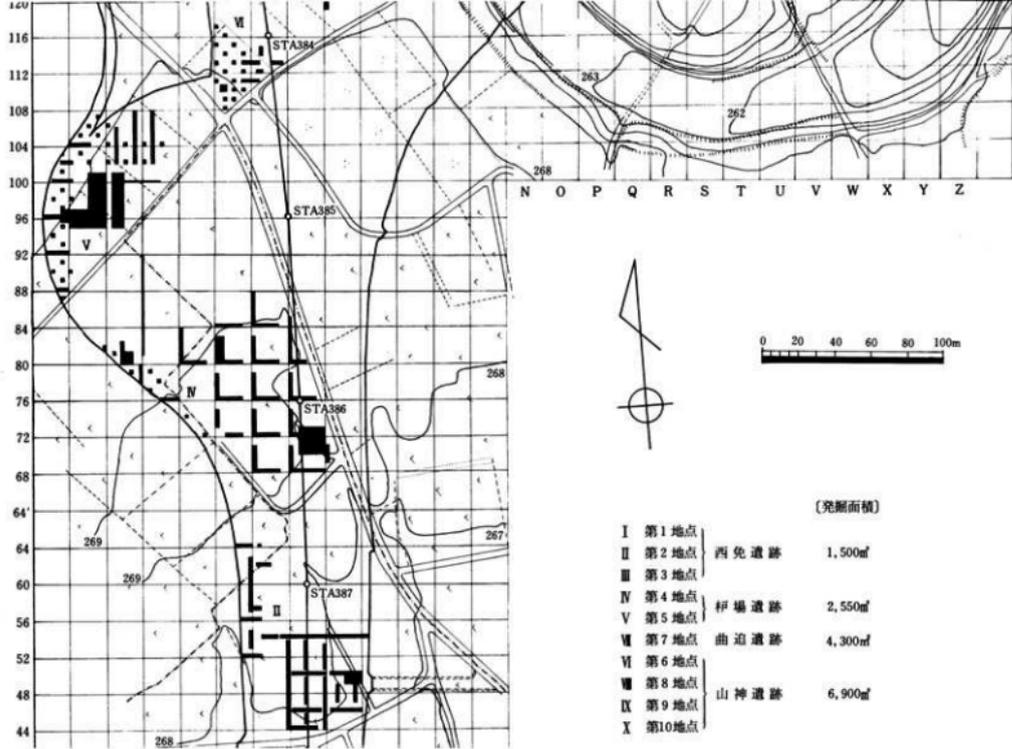


第2図 桑ノ丸遺跡の層序

本文は昭和49年6月および昭和50年3月に、鹿児島県文化財専門員の石川秀雄鹿児島大学教授のご指導をうけた。その際の文化財調査報告書を掲載させていただいた。

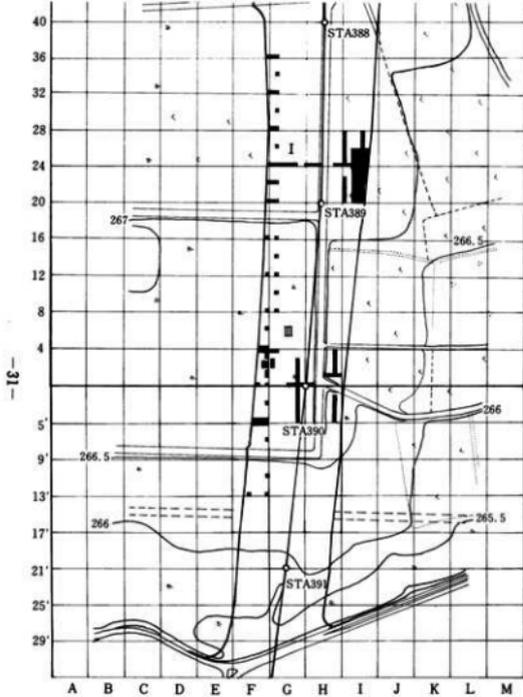
西 免 遺 跡  
栢 場 遺 跡  
山 神 遺 跡  
曲 迫 遺 跡



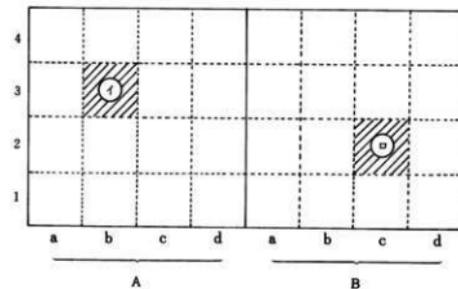


[免照面積]

I	第1地点	西免遺跡	1,500㎡
II	第2地点		
III	第3地点		
IV	第4地点	榎塚遺跡	2,550㎡
V	第5地点		
VI	第7地点	曲道遺跡	4,300㎡
VII	第6地点	山神遺跡	6,900㎡
VIII	第8地点		
IX	第9地点		
X	第10地点		



グリッドの呼称



例：① A-3-b-Ⅲ (A-3-b 区の第Ⅲ層)

② B-2-c-Ⅱ (B-2-c 区の第Ⅱ層)

第4図 西免・枳場・山神・曲迫遺跡発掘区域全体図

## 西 免 遺 跡

I 遺跡の位置	IV 遺 物
II 調査の経過	V まとめ
III 調査の概要	

### I 遺跡の位置

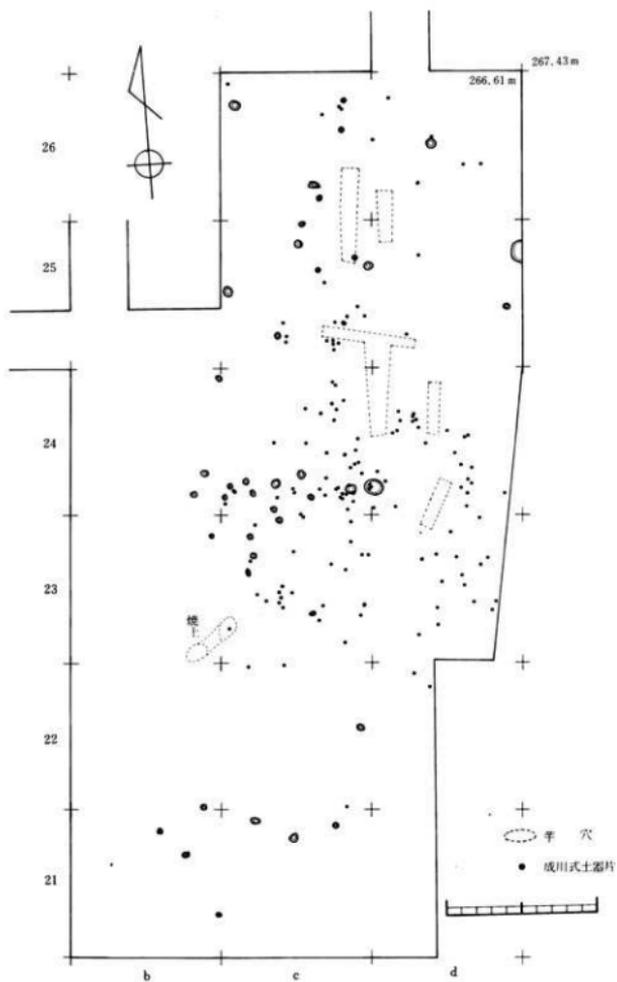
溝辺町と境を接する準人町西光寺字西免にあり、東方および東南方向に傾斜しはじめる台地の縁辺部にあたる。最も近い集落は糸走で、西免は糸走部落からみればうしろの山の上の平坦部と云うことになり、そこに茶畑しかも集団茶園化されたものがひろびろと展開する。北は溝辺インターチェンジがつくられた柗場遺跡に隣接し、西免の南端から中尾遺跡を見おろし、以下入道・南十三塚・東原・桑之丸遺跡の方向に向って傾斜が続いている。

高速道のステーション番号で云うとSTA 385\*\* からSTA 390までの部分に当たり、加治木インターチェンジから長い坂道をのぼりつめてようやく空港がみえる台地上の平坦面にたどりつき、溝辺インターチェンジにさしかかゝる一帯が西免遺跡である。

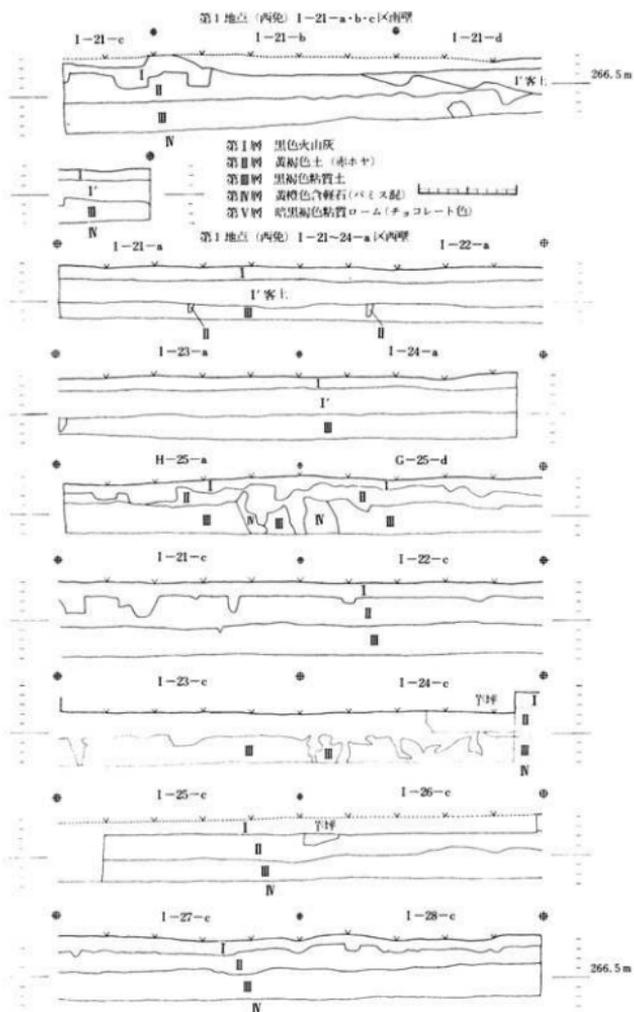
### II 調査の経過

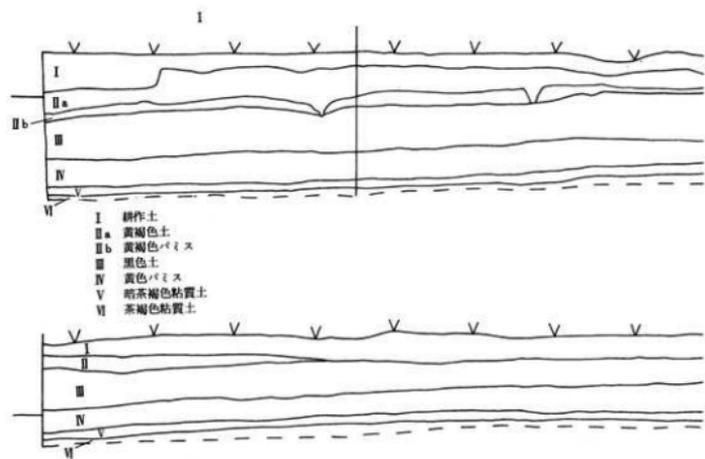
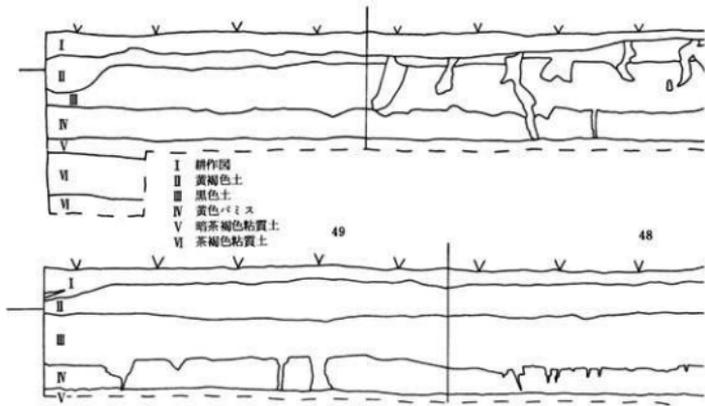
幅50～60m・長さ約400mの南北方向に一直線の高速道敷地を三区分する農道二本により便宜上三地点に分けて調査を進めることにした。STA 390とSTA 385のセンター杭を結ぶ直線を基準線とし、STA 390を基点として5m単位のグリッドを組んだ(図4)。測量会社に打たせたピッチ杭が間に合わぬことと、工事用道路からまず調査するとの方針に従い、この地区で最も表面散布の多い畑の西側で路線内遺跡の再確認の時に石鏝(図版21-1、図41-1)を表面採集した畑を第1地点として昭和49年5月25日発掘調査を開始した。これが縦貫道溝辺工区発掘調査の継入れになった。最初のトレンチはF-21-d-G-21-a区の2m×10mの東西トレンチで、STA 389の地点である。調査着手の順にしたがい北側を第2地点、南側を第3地点とよんだ。第1地点は地表散布が多くみられたところ、第2地点は若干の散布がみられたところ、第3地点は南向きの緩傾斜面の肩部分にあたるため地表散布は確認できなかったが地形的にみて確認を必要とすると判断した。なお調査経過の時間的流れについては37ページに記載しておいたのでここでは各地点における調査期間と担当者をおけるにとどめる。

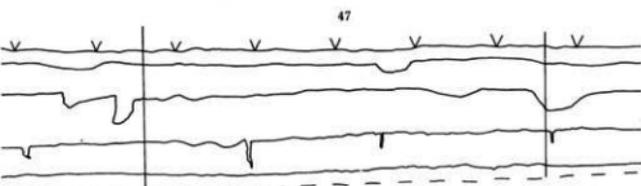
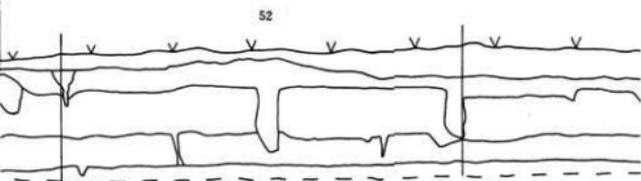
第1地点	工事用道路	昭和49年5月25日～6月13日	(平田・出口)
	本道部分	昭和50年1月22日～2月8日	(平田・牛ノ浜)
第2地点	工事用道路	昭和49年5月28日～6月5日	(平田・出口)
	ボックス部分	昭和49年11月8日～12月14日	(出口・吉永)



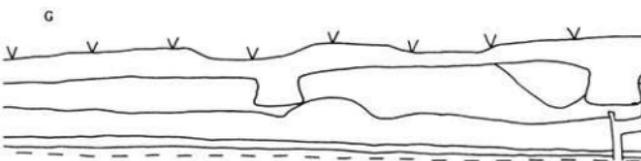
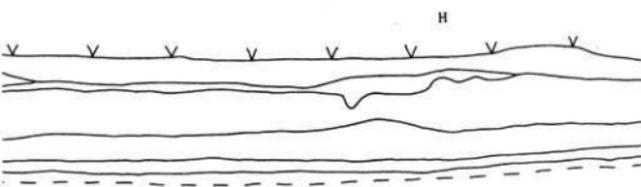
第5図 西免遺跡第1地点の第Ⅱ層遺物出土状況





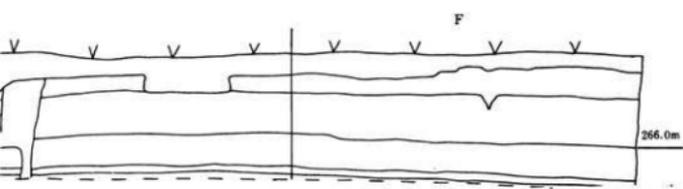
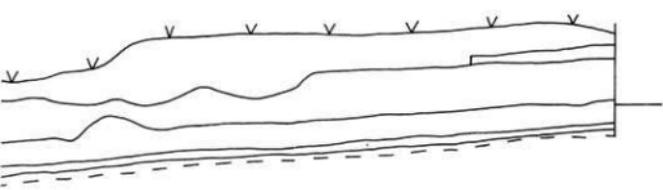
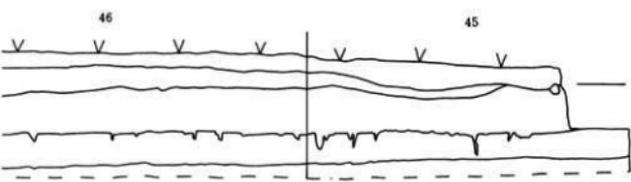
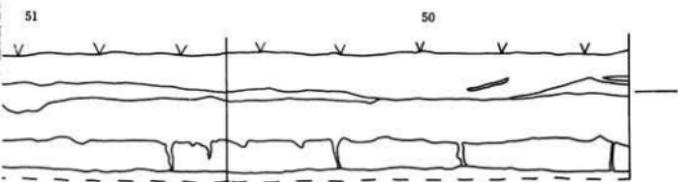


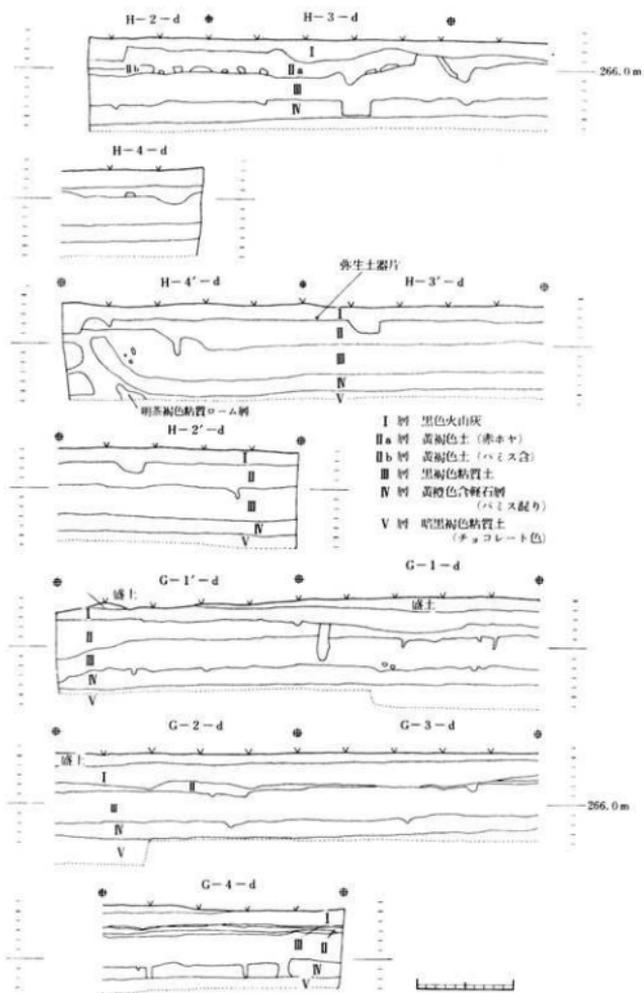
1 G-45-54区 東壁土層図



2 F-1-55区 南壁土層図

第7図 西免遺跡第2地点の土層図





第8図 西免遺跡第3地点の土層図

第3地点	工事用道路	昭和49年6月3日～6月13日	(平田・出口)
	本道部分	昭和50年1月13日～2月8日	(平田・牛ノ浜)

### III 調査の概要

掘ってみなければ判らないと云う不確定要素が伴うものの、現実にはトレンチを入れた結果、地表散布とは裏腹に遺構はおろか遺物さえほとんど出土せず、遺物も表面採集の方が多くではないかと云うような状態であった。それまでの通念として、地表散布がみられるところを発掘すれば必ず遺物なりなんらかの遺構を見出すことができるとばかり考えていたが、その常識が完全にくつがえされた。一ヶ月・二ヶ月と何も見出せず、こんなところが遺跡ですかと問われたり、この土器のかけらひとつが何十万円もしますなど云われたりする苦しい調査を続けるうちに、機械力による農地整備事業などの面的な開発工事が与える破壊は埋蔵文化財にとっては致命的な打撃であることを切実に感じるようになった。ブルドーザーその他の機械力でかきまわされ、弥生以降のものはとばされていても、その下に縄文・旧石器の層が生きているとの信念・意地が心の支えになって調査を続けた結果、地表散布はなかったが地形的にみてもあやしいと考えた第3地点において、F-3・4-d区のV層で加工および使用痕のみられない玉髓片を見出し、その周辺をひろげて黒曜石片を5点探しだした。出土数および出土状況からみて、旧石器の包蔵地が高連道西側のそんなに遠くないところにある可能性を知りえた。このこと、この層を探せば旧石器を探しうる可能性を知ったことが特筆すべき収穫であった。

最も地表散布の多かった第1地点本道部分の調査で成川式土器片が若干包蔵されている地点を探しだし若干のピット群を発見した(図版2・図5)。しかし、説明しうる遺構的なものを発見することができなかった。なお層位は山神・折場と同じであるので重複をさけるため、山神遺跡の項において一括してのべることにして、こゝでは各地点の土層図を掲載するにとどめる。

### IV 遺物

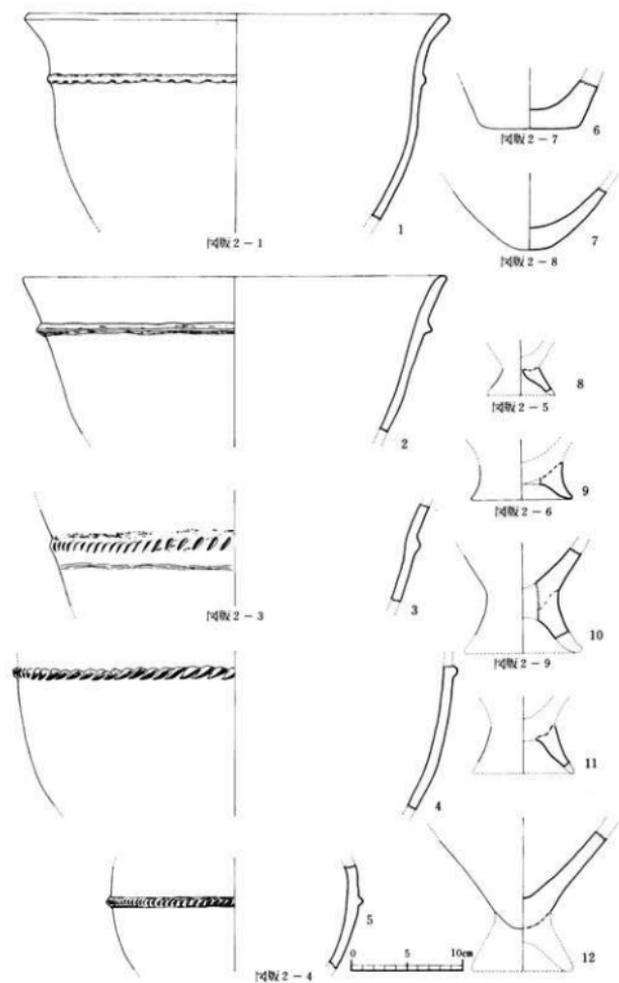
#### (1) 土器

##### 1. 成川式土器(図版2・図9)

出土した土器はすべて南九州の弥生後期に編年されている成川式土器である。微小破片ばかりで完形品は皆無であるが資料化するものはすべて図示をこころみた。第9図では1・3が第2地点出土のものであり、他はすべて第1地点出土である。いずれも、第2層の黄褐色土(赤ホヤ)の上部に出土し、この層がわずかに残存している地域でのみ出土した。

##### ● 壺形土器(図9-1・3)

第2地点出土のもので、頸部で若干しまり1縁部がゆるやかに外反する型のもので、「くの字」形のくびれ部分に絡繩凸帯と刻み凸帯をもつものがある。前者は内外とも茶褐色、後者は内面茶褐色・外面黒褐色を呈し、どちらも1縁部には横なで調整がみられる。底部は中空のあげ底で第9図8～11のような貼り付け脚とみなされる。



第 9 図 西免遺跡出土の成川式土器

◦ 壺形土器 (図9-2・4)

前者のように口縁部が外反しない(口型のものである。刻み目のない三角凸帯と刻み目凸帯とがあるが、いずれも貼り付けで頸部のつなぎめにほどこしてある。これは製作時もういところをかバーするにあたり、美観と実用をかねたものであろう。

◦ 壺形土器 (図9-5)

胴部の中央、最大径をもつところに刻目凸帯をほどこしたものである。内面は茶褐色、外面は黒褐色で斜方向の刷毛目調整がほどこされている。底部は第9図-7のような卵の先端のような形になるのであろう。

(2) 石器

第3地点F-3-d区のチョコレート色をした第V層(暗黒褐色粘質土)に3cm大の玉髓(珪岩)片1点、その周辺を拡張して黒曜石5片を見出したが、いずれも原石片とみなされた。また、表面採集および耕作土中より石鏃が3点出土している。山神遺跡の遺物の項で一括して記述する。

V まとめ

遺構はおろか遺物もほとんどないと云ってよい程の遺跡であったが、機械力による大規模な農地整理は遺跡・埋蔵文化財にとっていかに残酷なものであるかを思い知らされたことは、文化財担当者にとってこれほどの良薬はなかったと云える。また、従来地山ではないかと考えられていた層をつき破ったところ、その下に旧石器のローム層があることを確認し、この層まで掘り下げる必要があることを調査員一同が認識したことが、後日報告されることになる旧石器の大遺跡を昭和50年・51年度にそれぞれ発見するいとぐちとなった。これらの意味において、西免遺跡が与えた教訓は大であったと云える。

## 柵場遺跡

I 遺跡の位置	IV 遺物
II 調査の経過	V まとめ
III 調査の概要	

### I 遺跡の位置

西免遺跡の北側・山神遺跡の南側で、ともに同一台地上の遺跡であり、柵場が台地中央部のやや小高いところを占める。県道論地・糸走線の南側に位置し、高速道溝辺インターチェンジが建設される部分にあたる。発掘調査前は「中免遺跡」の名称が与えられていたが、これは俗称であったので正式の小字名を採用し、遺跡名を改めることにした。

### II 調査の経過

山神遺跡の項で一括してまとめるので、こゝでは各地点の調査期間と調査担当を記載するにとどめる。

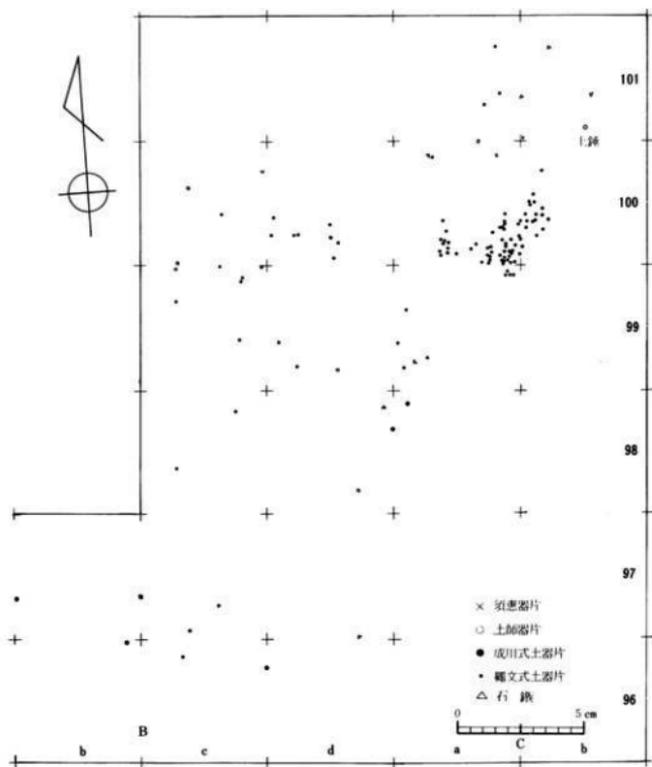
第4地点	工事用道路部分	昭和49年6月6日～6月19日	(平田・出口)
		昭和49年7月17日～8月27日	(平田・立神)
	本道部分	昭和50年1月9日～3月14日	(平田・牛ノ浜)
第5地点	工事用道路部分	昭和49年6月10日～6月12日	(平田・出口)
		昭和49年7月5日～8月27日	(平田・立神)
	本道部分	昭和50年3月1日～3月27日	(平田・牛ノ浜)

### III 調査の概要

昭和47年度に実施された分布調査で、縄文晩期と弥生前期の散布となっている。インターチェンジ用の敷地を南北に分ける農道があり、調査の便宜上農道より南側を第4地点、北側を第5地点とした。順位も西免・山神と同一なので、重複を避けるためこゝでは土層図のみを掲載し、順位については山神遺跡の項で記述する。

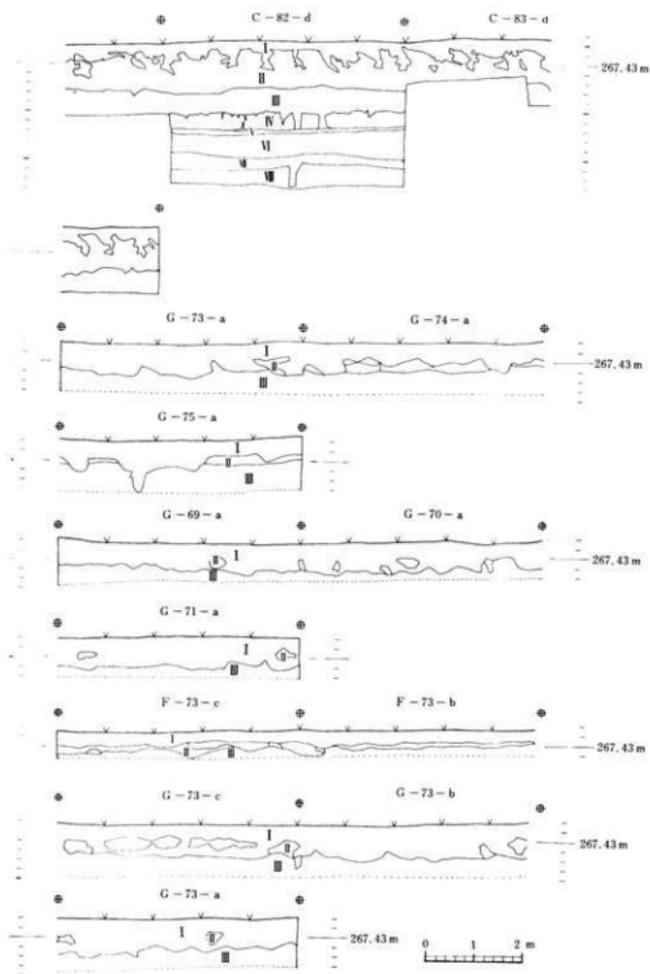
第4地点は西免と同様トレンチャーおよびブルドーザーによる破壊がはげしく、主たる遺物包含層は平面・断面とも竊模様となっており(図版3, 図11・12)、遺構についてはほとんど期待できなかった。H-73-c 区のII層下部より岩崎下層式が3片出土したので拡張してみたが、他になにもでなかった。また第4地点北半の各トレンチは攪乱されていたが石器類の出土が若干みられた。

第5地点においては地表散布の多いB-96~101区を400㎡の広さで全面発掘を行なった。

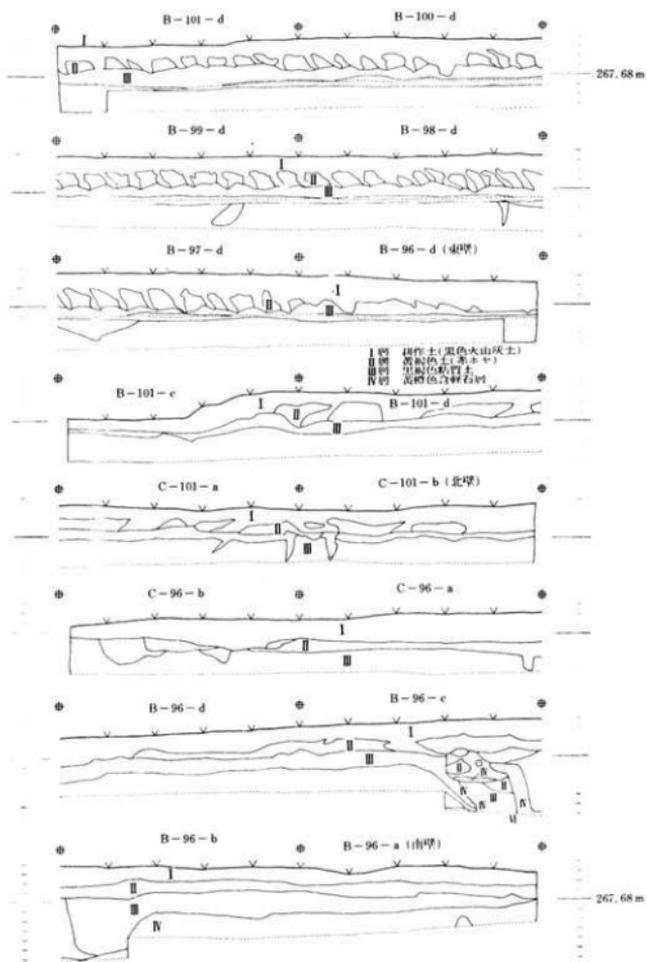


第10図 伊場遺跡第5地点の第Ⅱ層の遺物散布状況

荒されてはいたが（図版3）、第Ⅱ層上部で成川式土器の甕形土器の完形品と壺の略完形品が各1ヶ、土鍾が5ヶ出土した。完形品といっても一ヶ所にまとまって出土したのではなく、土器の個数体が少なかったことが幸いして20m四方にばらばらに散らばっていたものでも容易に接合を探し出すことができた。長年の耕作の間にこのように散乱したのであろう。また、第Ⅱ層上部に縄文前期の寒之神式土器片が出土した。



第11図 枳場遺跡第4地点の土層図



第12図 杵場遺跡第5地点の土層図

#### IV 遺物

##### (1) 土器

##### 1 縄文式土器 (図版4・5, 図13-15)

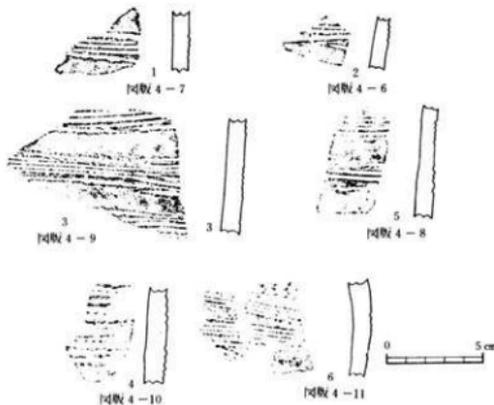
出土遺物は第Ⅱ層上部の岩崎下層式・凹線文土器・指宿式と第Ⅱ層下部の寒ノ神B式に分けられる。

##### I類 (寒ノ神B式土器) (第13図1～6, 図版4-b-11)

第5地点から出土したものである。第13図1～5は胴部片で、貝殻腹縁による条痕文を、ヘラ描きによる平行枠内に施したものである。枠外はヘラで調整されている。6は頸部から胴部にかけての土器片である。頸部には、貝殻腹縁による刺突文を連続して施した後、ヘラで枠を設けている。条痕文は1～5と同様である。1～6共に無文の所はヘラでよく調整されている。又内面もヘラで調整されている。胎土には細砂粒を含み、焼成は良い。色調は内外共に淡褐色を呈するが、6の外面の黒褐色を呈している。

##### II類 (岩崎下層式土器) (第14図1・2, 図版5-1・2)

第4地点から出土したものである。1・2共にI縁から胴部にかけての土器片である。I縁部に凹線を斜めに連続して施し、その下部に2～4条の凹線文をヘラ様のもので施している。I縁部は1はやや直行しており、2はやや外反している。頸部からI縁部にかけての内面には、指の圧痕が残る。胎土はあまり砂粒を含まないが、焼成は良い。色調は内外共に赤褐色を呈する。



第13図 杵場遺跡第5地点出土の縄文式土器

Ⅲ類（凹線文土器）（第14図3，図版5-3）

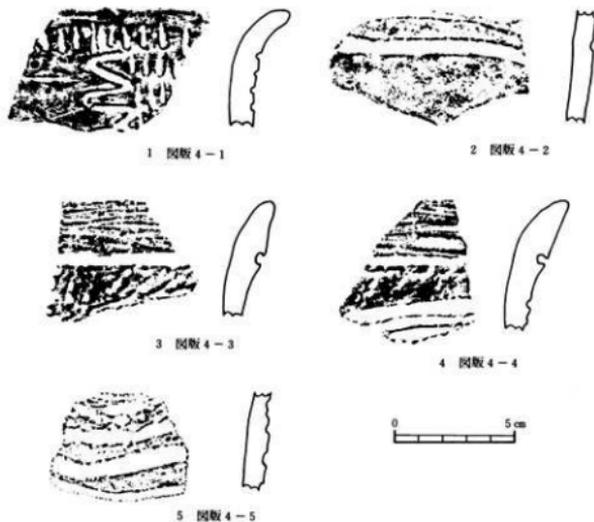
第4地点から出土したもので、胴部から底部近くへかけての破片である。外面には波状の浅い凹線文を斜位に施している。調整は雑で擦痕が明瞭である。内面は指の圧痕が見られる。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。色調は外面で赤褐色、内面で茶褐色を呈する。



第14図 枳場遺跡第4地点出土の縄文式土器

IV類（指宿式土器）（第15図1～5、図版4-1～5）

第5地点より出土したものである。1は外反する口縁部片である。口唇部は波状を呈する。外面はへうでよく調整されているが、指の圧痕文を所々残している。施文はへう状のもので、短い沈線と縦位の波状文を、組み合わせたものである。内面は貝殻腹縁により調整されている。胎土に細砂粒を含み、焼成は良い。色調は内外共に茶褐色を呈する。2は胴部片である。内外共にへうでよく調整されており、先の丸いへう状の施文具による沈線を横位に旋している。胎土に砂粒を多く含み、焼成はあまり良くない。色調は内外共に黒褐色を呈する。3・4は共に口縁部片である。内外面共に貝殻腹縁による条痕を地文としているが、沈線の施されたあとのもので、胎土が沈線の上にかぶさってきているのがわかる。沈線間には貝殻腹縁による刺突文を施して、擬縄文的手法を取り入れている。3・4は同一個体の破片と思われる。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。色調は内外共に黒褐色を呈する。



第15図 杵場遺跡第5地点出土の縄文式土器

2 成川式土器

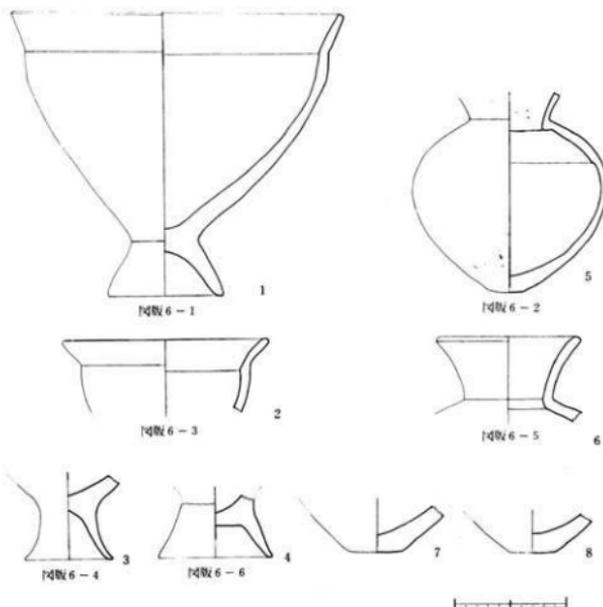
① 甕形土器 (図版6-1, 図16-1)

口径29.8cm、高さ26cm。内外とも明褐色で、器壁は薄手につくられ、胎土は微細なものを用いている。焼きはあまりよくない。口縁部が外反して内側に稜線をつくり肩のところでわずかにくびれるが、胴ははることなく、直線的に底部に向かう。中空のあげ底貼付け脚をもつ。口縁部は横なで、胴の上部は縦なで調整。胴の下部および脚は縦にへら調整が行われている。

土師器のようだと云う意見もあったが、古式土師の編年は南九州ではおこなわれているので今後の研究課題としておく。

② 甕形土器 (図版6-3, 図16-2)

復元口径18.5cm。胎土は細かいものを用いており、器壁はうすい。内外とも明褐色を呈する



第16図 伊場遺跡第5地点出土の成川式土器

が、胴部外面にはすすが付着している。

③壺形土器(図版6-2、図16-5)

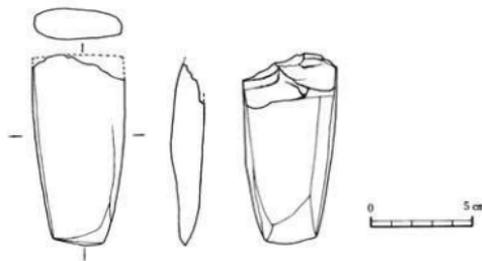
胴部外径17.5cm・胴部高15.7cm・頸部外径7.2cm。胴部最大径が中央部より高い位置にある。底は丸底に近く、さへになるものがなければ直立不能である。内外とも赤褐色を呈し、若干砂粒混りで焼成は良好。口唇部を欠き、あとわずかの1片で完形品とならなかったものである。外面は刷毛目調整が口縁部については横に、胴部は縦方向に行われている。内面は輪積み痕が顕著である。

(3) 石器

①磨製石斧(図版23-5、図17)

第4地点の第1層より出土したものである。緑泥変岩を使った全面磨製の石斧である。長さ9.5cm、最大巾4.6cm、最大厚み1.6cmある。刃部の片面は使用のためか、剥落している。刃は蛤刃状を呈していたと思われる。

この他に土錘・石鎌が出土しているが、山神遺跡の項で述べる。



第17図 榎場遺跡出土の磨製石斧

V まとめにかえて

こゝは出土する遺物からみて、たしかに以前は古代の人々が生活した場のひとつであったと云える。しかし機械の爪跡はその場を大きくかきむしっており、遺跡は遺言も云えないような頓死の状態であったと云ってよい。その死水をとったような気持である。この遺跡がわれわれにふい現したかったことは遺物を通して考えるしか途はない。しかし、いろいろな時代の遺物が出ており、あまりにも断片的であるので、どんな遺跡であったのか遺言を聞けなかっただけに、いまだに判りかねている。

## 山神遺跡

I 遺跡の位置	V 遺構
II 調査の経過	VI 遺物
III 層位	VII まとめ
IV 調査の概要	

### I 遺跡の位置

鹿児島空港が所在する十三塚原台地の西端部に近く、海拔 256m～258mの平坦な台地上の茶畑地帯である。西南から東北方向に走る県道加治木～溝辺間バイパスとそれとほぼ直交する西北から東南に向かう県道論地～糸走線とに区画された東側の畑地が山神遺跡になる。全国遺跡地図、鹿児島10-42(註1)の西側 200m～300mにあるこの畑地を、幅約50mの九州高速道の敷地がほぼ南北に貫通している。九州高速道のステーション番号で云えば、STA 380+20からSTA 384+20の400mの区間、完成後の高速道で云うと、県道加治木～溝辺間バイパスの空港ホテルそばのボックスと溝辺インターチェンジ北端との間が調査対象となった地域である。

北側は県道加治木～溝辺間バイパスによって木屋原と接する。発掘調査の結果判明したことであったが、このバイパス部分は本来心もち小高い地形であったと考えられる。いつの時代か判断しかねるが、削平して平坦にしたところで、本来南側の緩傾斜面が山神、北側の緩傾斜面が木屋原と区分されていたと推定された。東は迫を隔てて曲迫遺跡に相対し、南はこの一帯では最も小高い枳場・西免遺跡に連なる。

山神第8地点の路線外、西側約50mの畑地に、古老の話ではその昔「山神」を祀った祠があったとのことである。現在は使用されていない古井戸のみが残存するだけであり、また「山神講」などの伝統行事についてもこの地区の人々は全然記憶にないとのことである。

なお、古井戸のことが話題になった時、どれ程の深さだったかを尋ねると、論地岡(山神一帯の通称)では23尋、桑ノ丸では8尋、また論地岡には泉が二、三箇所あったが、現在は涸渇してしまったとのことであった。

- (註1) 九州高速道加治木～吉松間埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書(1973年、鹿児島県教育委員会)およびそれにもとづく全国遺跡地図には「木屋原遺跡」と記されているが、この地点は本報告書でとりあつかう「曲迫遺跡」の地点であり、宇絵図表記の「木屋原」は山神遺跡の北側に連なる地域である。山神・木屋原・曲迫はそれぞれ道路、農道によって相互に隣接しており、恐らく小字境の路

上において土地の人に尋ねた地名によつたために、このような混同を生じたものと推定される。

第1表 山神・榎場・西免遺跡の調査面積一覧

月	調査者	調査日数	山 神	榎 場	西 免	特 記 事 項
			調査面積	調査面積	調査面積	
5	平田 出口	5	m <sup>2</sup> m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup> m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup> m <sup>2</sup>	5.21 ベースキャンプ設置 25 西免の工事用道路より裏側開始
6	〃	22	165 176.6		638 595.5	6.13 西免・榎場の工事用道路調査完了
7	〃	26	曲道 (386) (357.85)	200 197.5		7.4 第1インター橋部分の調査完了
8	平田 立神永	22.5		364.5 318		8.22 山神地区調査開始
9	〃	21	1580.25 815.65			
10	〃	23	2633.5 1111.1			
11	平田 立牛ノ浜	21.5	896.75 1112.3		448 576.74	11.12 西免ボックス部分調査開始(担当、出口、吉永)
12	平田 立牛ノ浜	17	1174.5 882.9			12.14 西免ボックス部分あけ渡し
1	〃	17.5	273.5		171 307.8	
2	〃	16	299.7	1046 717.5	243 202.75	2.8 西免地区調査完了 19 山神地区工事用道路あけ渡し
3	〃	22	260.5	939.5 1199		3.27 榎場地区調査完了
4	平田 弥栄	17	450 810			4.28 山神地区調査完了
総計		230.5	6900 5743.25	2550 2431.55	1500 1682.79	

## II 調査の経過

溝辺インターチェンジのどまんなかにはベースキャンプを設営し、半径 500m の三方向約 7ヘクタールの縦貫道敷地の範囲を担当したが、工事用道路とかインター橋やボックス部分など工事を急ぐ部分の調査を早く済ますように要請されたため、この月は西免、つきは山神、また西免と、あちらに行きこちらに行きの調査であったため一遺跡にどっしり腰を据えた調査ではなかった。したがって山神・榎場・西免はこゝに一括して記載する。なお曲道は第 2 インター橋の確認調査を行なったが、サービスエリア部分には手がまわりかねて諏訪・弥栄パーティーにたのまざるをえなかった。

以下、11ヶ月におよぶ調査の日誌抄を掲載して調査経過の説明にかえる。

### 調査日誌抄

西免遺跡 調査期間 昭和49年5月25日～昭和50年2月8日

- 5月21日 朝、課に立寄り用具を積み、溝辺へ向かって出発。たまたま朝刊の三面トップに、縦貫道溝辺工事おくれる——長くかかる発掘調査——と掲載されていた。変なタイミング。長期間遅れぬことを覚悟して鹿児島をはなれる。
- 22～24日 ベースキャンプの設営ならびに器材・用具の点検。対象遺跡の地権者・耕作者宅を軒並みに訪問し、耕作時の状況について聞きこむ。
- 25日 作業員へのオリエンテーション。STA389より発掘開始（担当、平田・出口）。地表下30cmで赤ハヤ層出現。地表散布の状態とは異なり、遺物・遺構をみとめることができず。
- 27日 道路公団茂野所長来訪。
- 28日 G-21-a区をシラス層まで振り下げ、層位を確認。
- 29日 第2地点工事用道路部分の確認調査開始。ごぼう作りにより赤ハヤ以上はかく乱されていた。
- 6月3日 第3地点工事用道路部分の確認調査開始。埴田文化課長の現場視察。
- 6日 第3地点F-3-d区のチョコレート色をした第Ⅴ層（暗黒褐色粘質土）に3cm大の玉髓（珪岩）片が出土。旧石器の包含層になるのではないかと以後この層を注意する。徳重教育次長・塚田総務課長の現場視察。有村文化課長補佐同行。
- 13日 西免地区工事用道路部分の調査完了。
- 11月8日 第2地点ボックス部分の杭打ちおよびトレンチ設定。
- 12日 ボックス部分の掘り下げ開始（担当、出口・吉永）。耕作によるかく乱甚だし。
- 15日 II層掘り下げに入る。——遺物の出土なし。
- 19日 III層掘り下げに入る。
- 26日 河野専門員の現場視察。
- 29日 埴田文化課長の現場視察。

- 12月3日 土層実測用水系設定。G-54-d区Ⅲ層より戦争中のアメリカ軍の機関砲弾とみなされる不発弾出土。山嶽でふちあてたおぼさんたちはびっくり顔。吉永、気軽にふらさげて警察へ届ける。戦争を知らない若者たちは、不発弾とはいえそのこわさを知らない。
- 11日 土層実測を終了し、ボックス部分の調査完了。
- 14日 西免ボックス部分のあけ渡し。
- 1月9日 第1地点・第3地点本道部分の杭打ちおよびトレンチ設定。
- 13日 第3地点本道部分の調査開始（担当、平田・牛ノ浜）
- 18日 大雪のため作業不能。クレーン車で作業小屋を山神から伊場に移す。
- 22日 第1地点本道部分の調査開始。有村文化課長補佐の現場視察。溝辺町教育長および文化財審議委員、見学に訪訪。
- 1月25日 成川式土器の出土が若干みられるので、I-23-26-b・c・d区を10m×20mに拡張。そのため山神第8地点より第1地点にベルトコンベアを移す。
- 31日 I-21-23-a・b区を拡張して全面発掘。
- 2月7日 ビット群の実測、遺物のとりあげ、土層実測完了。
- 8日 西免地区の調査を終了して道路公団へあけ渡す。

**伊場遺跡 調査期間 昭和49年6月5日～昭和50年3月27日**

- 6月5日 発掘地点の杭打ちおよびトレンチ設定。
- 6日 第4地点工事用道路部分より発掘開始（担当、平田・出口）。遺物皆無。
- 10日 第5地点工事用道路部分の発掘開始。B-101-d区Ⅱ層においてはじめて土錐が1ヶ出土。これが溝辺で接したはじめての遺物らしい遺物。しかし、残念ながら攪乱層中より出土。こんな山の中からと首をひねったり驚いたり。
- 12日 第1・第2インター橋部分の調査を早くと要請されて、伊場地区の確認調査を一時中断。
- 7月5日 第5地点工事用道路の調査再開。（担当、平田・立神）
- 8日 第二次募集を行ない作業員増加。
- 10日 A-97-d区Ⅲ層直上に塞之神式土器片出土。これによって、当地区においては第Ⅰ層下部が土師・須恵、第Ⅱ層上部に弥生、中部に縄文後・中期、第Ⅲ層上部に縄文前期、第Ⅴ層が旧石器の包含層であることがはっきりしてきた。
- 12日 鹿島建設の大型ブルドーザーがベースキャンプ前に居坐る。いよいよまわりに工事の騒音を聞きながらの調査となる。
- 17日 第4地点工事用道路の調査再開。トレンチャーもしくはブルドーザーによる第Ⅱ層以上の破壊が顕著。しかし遺物の出土はわりと多い。農業基盤整備事業で遺跡は全く破壊されてしまっていることが判る。

7月18日 鹿児島大学石川秀雄教授の土層調査。

第Ⅰ層 黒色火山灰層

第Ⅱ層 上部ローム 2,000年～5,000年

第Ⅲ・Ⅳ層 中部ローム 5,000年～8・9,000年

第Ⅴ層以下 下部ローム

とのご教示をうく。

8月1日 センターラインのグリッド杭に番号をつけおとしたものが1本あることに気付く。すでに南北両端から調査が進められているため、全体を変更するよりもダッシュ区として修正する。

7月27日 工事用道路部分の各トレンチの実測完了。

1月9日 第4地点本道部分の杭打ちおよびトレンチ設定。

27日 第4地点本道部分の調査開始(担当、平田・牛ノ浜)

30日 H-73-C区Ⅱ層下部より縄文片(岩崎下層)3片出土。拡張してみたが他に遺物なし。

2月8日 各トレンチⅢ層以下の掘り下げ開始。

3月1日 第5地点本道部分の調査開始。第5地点は機械耕作が第Ⅱ層中程にまでおよびⅠ・Ⅱ層が横模様となってあらわれるが、出土遺物はわりと多い(とくにB-100-d区)。しかし、かく乱層のため断片的なものばかり。

6日 第5地点北半のC・D-103-108区に10mピッチでトレンチを設定。第Ⅱ層にも機械耕作がおよんでおり、また東部は第Ⅱ層も残存しておらず遺物および遺物検出の可能性なし。

14日 第4地点、土層実測が終了調査完了。

17日 河口貞徳・石川秀雄両文化財専門員の調査指導。縄文式土器について形式の、石器類について岩石のご教示をうく。

20日 第5地点、第Ⅲ層以下の掘り下げに入る。

27日 土層実測を終えて枡場地区の調査を完了。

山神遺跡 調査期間 昭和49年6月13日～昭和50年4月28日

6月13日 第6地点、第1インター橋部分の確認調査開始(担当、平田・出口)

17日 F-111-b区Ⅲ層に大形長脚石礫が1点出土。

24日 F-109-b、F-110-bにおいて旧道跡を確認。これば小字「山神」と小字「枡場」との字境であったものとみなされる。他に遺物・遺構なし。

26日 曲迫の第2インター橋部分の確認調査開始(担当、平田・出口・立神・中村)。

7月1日 中村着任。上村俊雄氏来訪。ウイスキーの差入れをうける。

2日 第1インター橋部分の調査終了。

- 7月3日 STA 405より縦貫道溝辺工区の道路建設工事はじまる。
- 4日 立神着任。
- 16日 出口・中村パーティー、南十三塚の調査に入る。
- 17日 第2インター橋部分の調査完了。
- 8月3日 第8地点工事用道路部分の杭打ちおよびトレンチ設定(20%方式)。
- 10日 吉永着任。第8地点において文化財研修講座現地研修会を実施。
- 22日 第8地点工事用道路の発掘開始(担当、平田・立神・吉永)。今までの各地点とも異なり、第1層から土師・須恵の小片が数多く出土しはじめ、作業員も活気が出て来た。第II層上部に溝状遺構が出現し、これの追跡にとりかゝる。
- 8月24日 3ヶ月を記念して、午後、レクリエーション大会。博物館友の会員、遺跡見学に来訪(盛岡尚孝博物館次長引率)。
- 26日 第9地点工事用道路部分の杭打ちトレンチ設定(28%方式)。午後掘り下げを開始。あまりにも出ないところばかりを掘っていたためトレンチ設定を実験的にいろんなやり方で試み、28%方式ならまず遺構を洩らすことはないといふ机上では考えたが、現実には排土の処理に難点があった。台風14号通過後、溝辺台地では足早な秋の訪れを肌を感じる。こおろぎが一斉に鳴きはじめた。
- 28日 第8地点、D-181-c区II層上部より墨書土器片出土。第8地点にベルトコンベアを導入。
- 9月2日 D-180-b区II層上部より土師杯の完形品3ヶ出土。180~184区は全面発掘と方針を決める。
- 3日 第10地点の杭打ち、せまい工事用道路ばかりをやっているのはロスが大きいいことがよく判ったので、全域にトレンチを設定。第8地点は溝状遺構の掘り下げに入る。流線形状の溝でわりと浅く、深さ15~20cm。C・D-180~184区に $\frac{1}{10}$ 平面図用の水糸を設定。
- 7日 排土捨場の事前調査のためE-189~194区の杭打ち。台風18号に備えてテントをはずす。
- 9日 C-181~184区II層上面の遺物とりあげ。道路公団浅野所長来訪。
- 10日 溝状遺構の自然乾燥・ひゞ割れを防ぐため、草を刈って全面拡張区全域に敷く。想像以上に効果あり。
- 11日 排土捨場予定地の掘り下げ。第III層の残りも少なく、遺物包蔵の可能性なし。鹿島建設の事務所を訪れ、機械力による排土除去を依頼。
- 17日 犀川文化課長の現場視察。遺跡調査らしくなってきたのを喜ばれる。
- 20日 第9地点より第10地点にテントを移動。第10地点の発掘調査開始。
- 24日 ベースキャンプに電話設置さる(09955-8-2555)。
- 25日 第10地点E-130・131-C区を拡張発掘。縄文後期(指宿系)の破片出土地周辺

の確認にとりかかる。

- 30日 第10地点のコンター計測。
- 10月1日 第9地点本道部分の確認調査開始。
- 3日 第8地点本道部分の確認調査に入る。5m×5mグリッド単位の発掘(25%方式)に切替える。C-186-b区で、幅1.5mの東西方向の旧道跡を検出。しかし、C-186-b、C-188-d区は地表下30~35cmで第IV層があらわれ、遺物包蔵の可能性はうすくなった。第10地点E-125~132区の溝状遺構の掘り下げ。
- 9日 第10地点F-136-b・c区のピット(杉板と思われる礎板が残っており柱穴とみなされた)の対を探したが見つからず、建物遺構にはなりえなかった。
- 10月11日 松山教育次長・森田専門員・有村課長補佐の現場視察。
- 14日 F-140-d、F-141-c・d区を拡張。成川式土器出土の周辺を確認。なにも出土せず。
- 15日 第8地点の全面発掘区第II層掘り下げ開始。
- 19日 第8地点C・D-182-d~C・D-184-b区は、径15mほどの円形の凹地の各所に炉址的な焼土が散在し、それをとりかこんでピット群が存在することが判る。
- 22日 雨の中を独行して作業を続ける。第8地点本道部分の未発掘地域に20mピッチでトレンチを設けて掘り下げる(D・E・F-173~177区)。東半分はトレンチャーにより第II層までかく乱。かりに遺跡が存在していたとしても完全に破壊されている。かく乱部分については、一気にIV層まで掘り下げることにする。E-177-b区IIで完全土師器の環2ヶ出土。土手茶(畑境の茶園列を土地では土手茶とよぶ)の直下だったために破壊をまぬがれて残っていたのであろう。
- 23日 青銅製仏像(D-180-b-II)、穴あき環の底部(C-182-c-II)、墨書土器片「廣」(C-182-e-II)など出土。
- 25日 河口貞徳先生来訪。
- 28日 第8地点の全面拡張区の $\frac{1}{10}$ 実測開始。吉永に代わり牛ノ浜が山神遺跡の担当となる。(担当、平田・立神・牛ノ浜)
- 31日 E-177-b-IIの完全土器出土状態の実測。うち一個は墨書土器「奠」とわかる。D-182-d-IIより鉄鏝出土。全面発掘区第II層上部のコンター計測。岡川文化課長の現場視察。
- 11月1日 第10地点、第II層の掘り下げ開始。E-131-c-IIIで石匙出土。
- 6日 第9地点ボックス部分(E・F-141~149区)の調査開始。
- 8日 E-143-C-II(第9地点)より底部に「井」の刻子がある土師器の環が出土。
- 21日 I-129-b-II(第10地点)より「吉」の墨書がある土師器の環(完形)が出土する。
- 25日 墨書土器出土のI-129-b区周辺を拡張。他に遺物なく、全くの単独出土。

- 11月28日 G-133-c'-IIIよりえたいの知れぬ集石遺構が出現。
- 12月3日 第9・第10地点のG-a区の南北トレンチすべてについてIII層以下の掘り下げ。
- 6日 E-129・130-c-II（第10地点）に検出された焼土周辺のピットを追求。遺跡の主体は道路敷地外にあるとみなされた。
- 13日 集石遺構の周辺を拡張してみたが、なにもなし。
- 14日 第9地点ボックス部分と第10地点の工用道路を公団に明け渡す。
- 25日 第8地点の全面発掘区第II層の遺物とりあげ。第10地点集石遺構の実測。作業員は冬休みとする。
- 26・27日 出土遺物の整理。以後は正月休み。
- 1月8日 調査再開。第9地点本道部分トレンチの第III層以下の掘り下げ開始。河野専門員の現場視察。
- 13日 第8地点全面発掘区についてIII層掘り下げ開始。
- 27日 全面発掘区第IV層上部のコンター計測。
- 2月10日 C-184-a-IIの2号建物遺構の実測。
- 12日 D-181-182-a-IIの1号建物遺構の実測。
- 13日 1号建物遺構の断ち割り。断ち割りトレンチより磨製石礫出土。
- 22日 大雪。2月は18日間稼働可能のうち7日間は雨・雪にたづられて作業不能。
- 24日 E-178・179・180-IIIに縄文片（条痕文土器）十数片出土。
- 3月4日 E-178-180-IIIの縄文片出土状況の実測。
- 8日 E-178-180-IIIの遺物とりあげ。以後しばらく柵場の調査に集中。
- 24日 E-181-184区第II層の掘り下げ開始。
- 29日 ベースキャンプを木屋原に移す。その間作業休止。
- 4月7日 昭和50年度調査開始（木屋原遺跡）。山神遺跡は残務整理要員のみを残す。
- 8日 山神第8地点全面拡張区の第III層・第IV層の掘り下げと土層実測開始。
- 28日 E-179-b区土層実測を最後に、山神遺跡の調査終了。

### III 層位

第1層（耕作土）は黒色火山灰土で、その下部に通称黒ニガと呼ばれる真黒な土があり、この黒ニガが土師器・須恵器の包含層とみなされるがそのほとんどが耕作その他によってかく乱されており、山神第8地点・第10地点で若干の地域に残存していたにすぎない。残っていると、この地区では厚さ5～10cm程度のものである。考古学上の層位表現では、この黒ニガを第II層としてとりあつかうところであるが、地学的見地との対比において層位の呼称に差異があっては混乱をまねきやすいので、層位呼称はあえて一致させることにした。

この黒ニガは次の記録と対比することができる。

「延暦七年…秋七月己酉、太宰府言。去三月四日戌時、当大隅國贈於郡曾之峯上、火炎大

熾。響如雷動。及亥時、火光稍止、唯見黑烟。然後雨沙。峯下五六里、沙石委積可二尺。其色黑焉。」(続日本紀卷三十九)

要約すると「延暦7年(A. D. 788)、曾之峯(霧島山)が爆発して沙(火山灰)をふらせた。山麓の5-6里(3-4km)は、火山灰が2尺(約60cm)ばかりつもった。その火山灰の色は黒い」となる。溝辺台地でこの黒ニガに伴う遺物は奈良時代および平安時代初期のものであり、史料と遺物が年代的に一致する例と云えよう。なおまた後述するが、山神第8地点・第10地点にみられた溝状遺構の覆土はこの黒ニガである。

第II層の黄褐色土(俗称赤ホヤまたは赤ボッコ)は、よく残っているところで厚さ40-50cm、その最上部に弥生後期とされる成川式土器、中程に縄文後期の市来式・指宿式・岩崎上層式が出土する。しかしながら、当地区において耕作その他によるかく乱が、第II層下部まで及んでいるところが大半であり、よく残存しているところは、遺物の出土が多くみられ、この層が残存しているか否かが遺跡範囲確認の主目標となった。

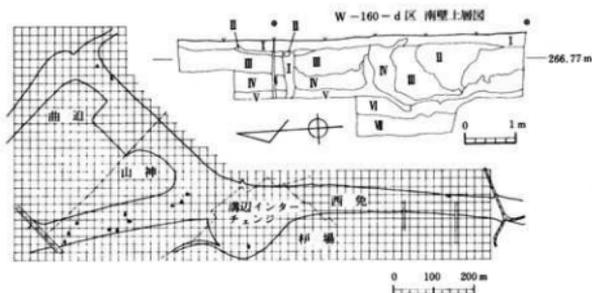
第III層の黒褐色粘質土は、その上部に縄文前期の貝殻条痕文土器が出土した。

第IV層の黄褐色含軽石層(バミス泥り)は無遺物層で、調査担当者間の判りやすい呼称として、現場では「第2オレンジ」とか「第2バミス」と呼んでいた。上部は非常に固い粘質土、下部は水分を多量に含んだ軽石である。

第V層の暗黒色粘質土は、現場での呼称を「チョコレート」または「チョコ」と云った。細石器・旧石器の包含層とみなされるが、山神遺跡ではその包蔵を確認しえなかった。またこの層以下も掘り下げたが、無遺物層であった。

#### 土層の横断(図版9)

最初、第7地点曲迫の第2インター橋部分の調査で、Y-167-a区の第II層赤ホヤを掘りこんだような円形の黒い落込みがみられ、遺構かと調査員1人がはりついて慎重に対処したが



第18図 山神遺跡の土層横断面

その落込みは掘り下げても掘り下げても容易に底は出なかった。そのうちW-160-d区の壁面で層位が90度横転していることに気が付き、その後は平面的にも理解することが可能となった。

十三塚原の台地は始良カルデラの北壁に連なる部分でもあり、霧島火山とは指呼の地域にあるところから、火山地帯の自然現象として極小局地的な断層が随所に発生したのであろう。赤ホヤ形成後の時期、すなわち弥生後期から奈良時代までの間に、いわゆる地が裂けるような現象がこの台地上のあちこちに生じたのであろう。東に霧島山を仰ぎみる土地で、いにしえの人々が大地の裂ける恐怖を山に向かって拝み、「山神」の気持をなだめようとしたのであろうか——これは単なる憶測にすぎぬものであるが。

#### IV 調査の概要

道路工事推進の緊急によって最も調査を急ぐように要請された第1インター橋部分を第6地点として、枳場の工事用道路の確認調査を中断し、まずこれに着手した。その後、山神地区を三分する農道二本を便宜的な区分線として、北から第8・第9・第10点と呼称を与えて地点単位に調査を実施した。

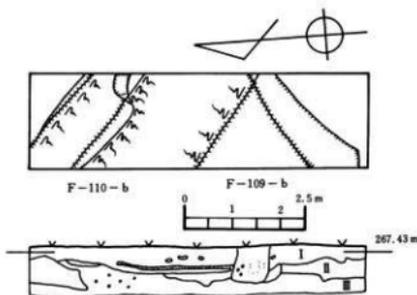
##### 第6地点

調査期間 昭和49年6月13日～7月2日(担当、平田・出口)

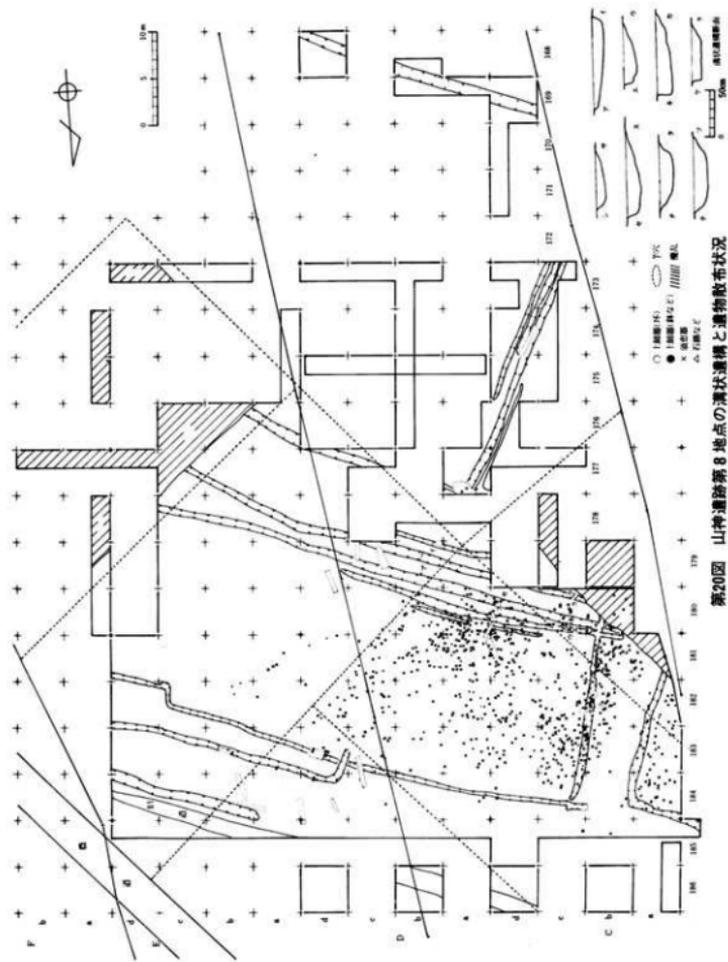
主たる遺物包含層である第II層が芋穴などのためかなり掘られ乱れていた。G-112-d-IIでは固いブロックが積みかさなった状態のところのみられ、その間にやわらかいところがあり柱穴かと勇んで調査したが、樹根によるものであった。F-116-c区には養蚕の地下倉庫の一部のみられ、聞きとり調査を裏付けることができた。昭和9年、養蚕のための家屋が8軒ほど建てられたということで、そのためと思われる瓦・釘・ガラス瓶・茶碗など現代のものがI層とII層の上部から多く出て来た。

F-109・110-b-IIには大正3年の桜島の噴出物と考えられる火山灰層がうすく堆積しており、終戦前まで論地・糸走間の旧道跡であったことと、この旧道が山神・枳場の小字境であったことを確認した。

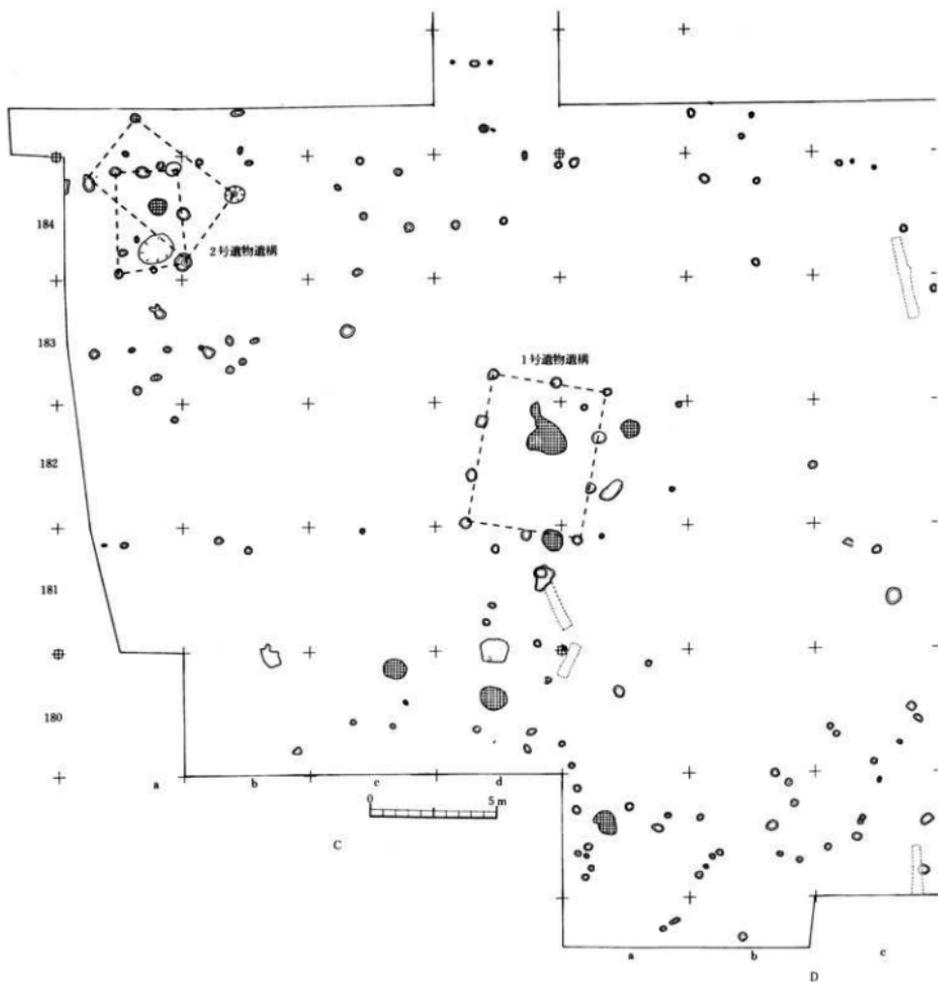
遺物は第I層から成川式土器・土師器の小破片が少量出土した。F-116-b-IIIの上部、地表下60cmで縄文後期タイプとみられるチャート製の双脚石織が出土した(図版22-14、図-14)。若干拡張して周辺を確認したが、他に遺物をもとめるこ



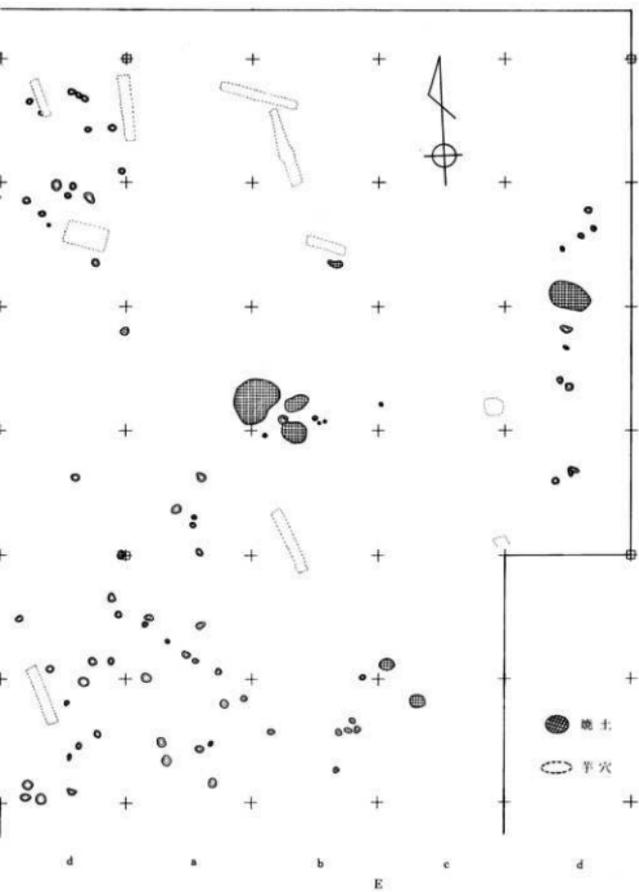
第19図 山神遺跡第6地点の旧道跡

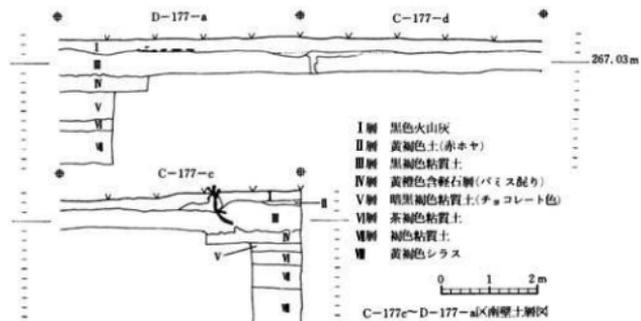
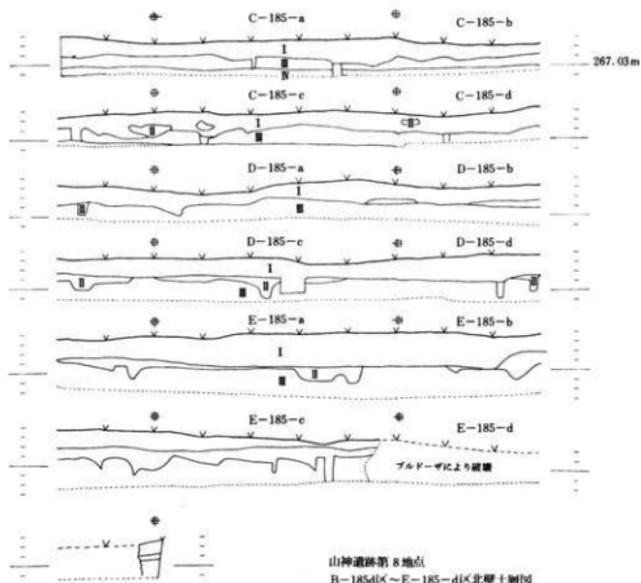


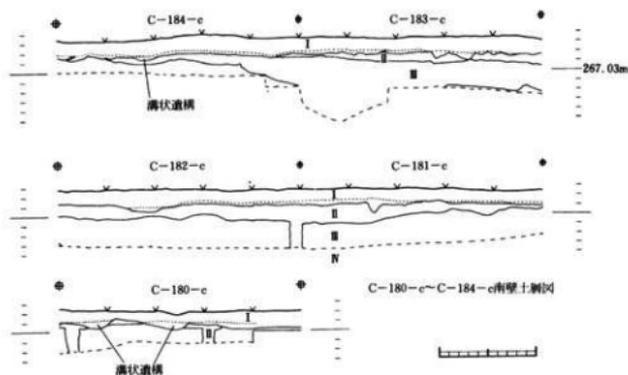
第20図 山神遺跡第6地点の溝状遺構と遺物散布状況



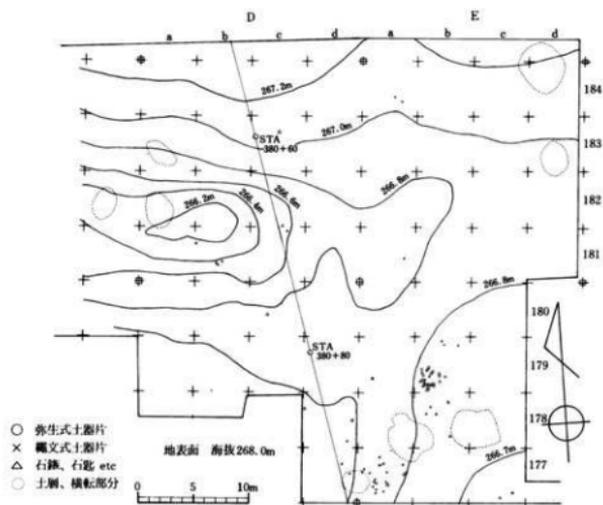
第21図 山神遺跡第8地点の焼土とピット群







第23図 山神遺跡第8地点の土層図2)



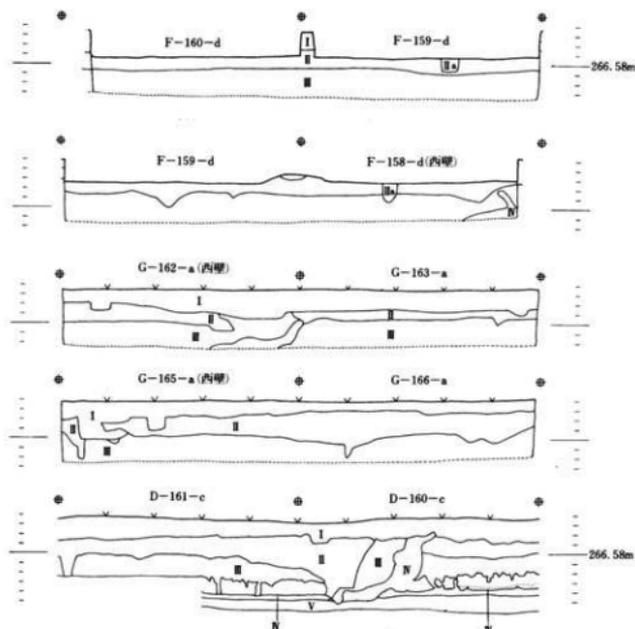
第24図 山神遺跡第8地点の第Ⅲ層上部での遺物散布状況

とができなかった。

第8地点 (図版7, 9, 10, 12, 13, 18, 19)

調査期間 昭和49年8月22日～昭和50年4月28日。(担当、平田・立神・吉永・牛ノ浜)

地表に土器片の散布が多くみられた地域約1200㎡を全面発掘した。したがってこの地域では最も長期間にわたり調査がおこなわれた地点である。主たる包含層のI層下部とII層上部が約600㎡残っており、多量の土師器坏、須恵器片が出土した。墨書土器の完形品1点をはじめ墨書土器の小片15、像高2.4cmの青銅製小仏像や竊などの出土は特筆に値しよう。第II層中程より磨製石鏃、第II層下部に入ったところから縄文後期の、第III層上部から縄文前期の土器片が出土した。遺構的なものとして13にのぼる焼土とそれをとりまく数多くのピット群、そのうち建物遺構として確認できたものが2、時代不明の浅い溝状遺構が検出された。

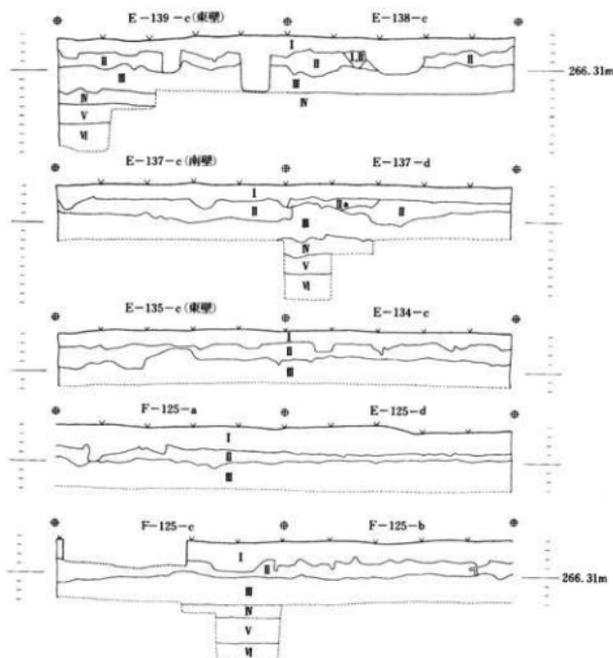


第25図 山神遺跡第9地点の土層図

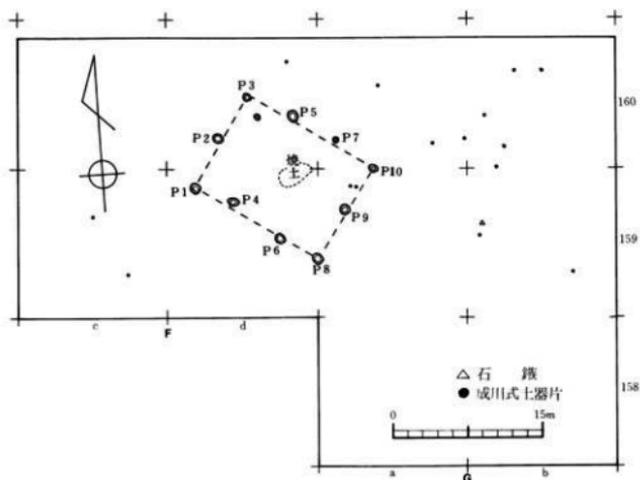
第9地点 (図版9, 10)

調査期間	工事用道路	昭和49年8月26日～昭和50年4月28日	担当、平田・吉永・牛ノ浜
	本道部分	昭和49年10月1日～昭和50年4月28日	
	ボックス部分	昭和49年11月6日～昭和49年12月14日	

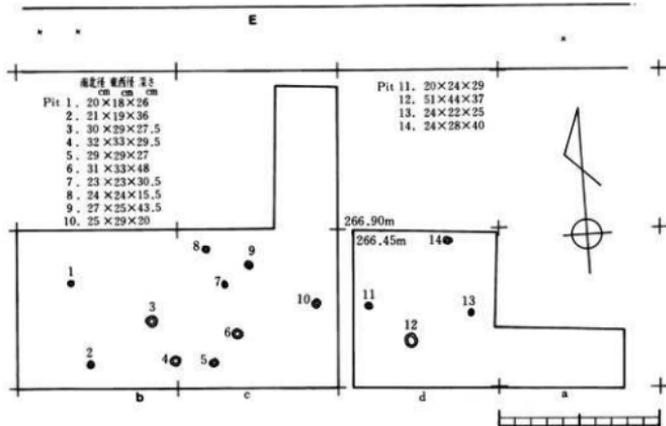
この地域も荒されていた部分がかなりみられ、ようやく中央部のF-159・160・d区の第II層上部で建物遺構1を検出した。また西南部で第III層に掘りこんだビット列がみられたがまとまりのあるものではなかった。遺物には縄文前期・後期の土器片、「井」の刻字のある土師環などがある。



第26図 山神遺跡第10地点の土層図



第27図 山神遺跡第9地点の焼土とピット列（3号建物遺構）

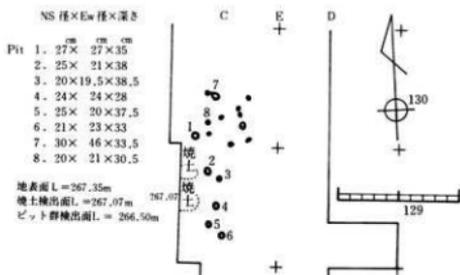


第28図 山神遺跡第9地点E-145b・c・d-Ⅲのピット群

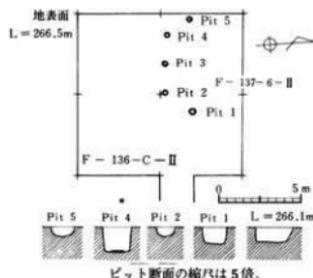
第10地点 (図版 8, 11, 13)

この地域も広範囲に削平、地ならしをうけたり、機械耕作で荒されていた。中央部の西側に時代および正体不明の溝状遺構を検出した。その下部に焼土とピット列が検出されたが、遺跡の主体は道路敷地外になるものとみなされた。しかしそこも街路樹など大木の苗圃となっており、遺構残存の可能性はうすい。中央部のG-133-c区の第Ⅲ層上部で集石遺構がみられ、その周辺を調べたがなにもなく、その性格は判らなかつた。また杉材と思われる礎材をもったピットが検出され追求したが、対を発見することができなかった。終戦当時、第9地点から第10地点にかけては兵舎となっており、北海道出身の兵隊が馬小屋を作る時、北海道のならわしとして掘立柱の基礎に板を敷いたらしいとの話を聞かされたが、真偽のほどは判りかねる。

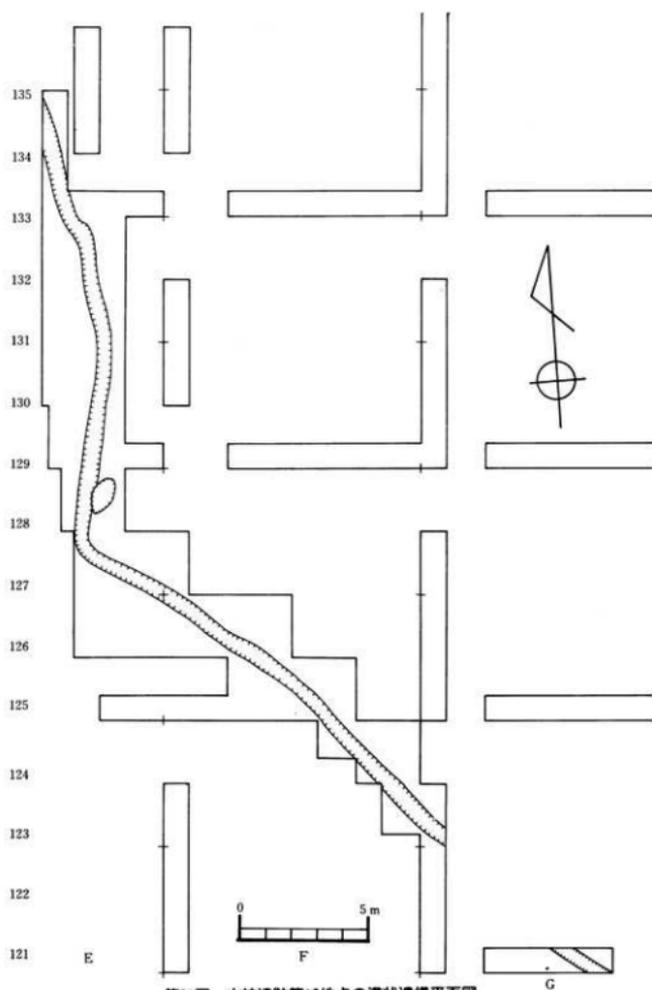
主な遺物としては「吉」の墨書がある土師器環がある。この他に縄文後期の指宿式土器片・成川式土器片・青磁片などが若干出土した。



第29図 山神遺跡第10地点の溝状遺構下の焼土とピット群



第30図 山神遺跡第10地点の礎板をもったピット群



第31図 山神遺跡第10地点の溝状遺構平面図

## V 遺構

### (1) 溝状遺構

#### 1. 第8地点の溝状遺構(図版7, 図20)

第1層を掘り上げてやがて赤土があらわれる地表よりの深さ約40cmのところには槽状になってあらわれる。幅60-100cm・深さ15-20cmの深皿状の断面をもつもので、覆土は前述した8世紀末の露島の噴出物黒土である。多いところで5条も密集して並行しているが、発掘区全体をみると、その方位はおおよそN22-25°Eで、互に直交して方形もしくは長方形の区画を構成する。溝の中およびその周辺から、土師器・須恵器の小片が数多く出土する。とくにC-181-184-c区からD-181-184-dにかけての20m×30mの方形の中に密集している。この区域内に後述する1号建物遺構も存在する。覆土および遺物から考えて奈良時代から平安時代初期にかけての土地区画を意味したものでなかろうか。数条に密集した地域は土地の境界のもめごとでもあって、たびたび変動したのであろうか。山神一帯の総括的地名は論地でもある。——なんらの史料的裏付けをもたぬので深入りはしない。

#### 2. 第10地点溝状遺構およびそれより出土した遺物(図版8, 図51)

第10地点の西側において、巾80-120cmで、深さ30-40cmの断面が流線形状になっている溝が、「く」の字状に走っているのが検出された。溝の性格は、出土遺物が縄文式・弥生式・須恵・青磁・鉄銭・近世陶器の多時期にわたって混在していたため把握することができなかった。

##### ①縄文式土器(指宿式)(図版8-1, 図51-1)

1は口縁部片で、口唇部は平らである。口縁上部に横位の沈線を施し、その下にはジグザグ状に沈線を施している。内外面共にヘラでよく調整され、なめらかである。胎土に砂粒を含み焼成は良い。色調は内外共に赤褐色を呈する。口縁部近くにはススが付着している。

2・3は共に胴部片である。施文はヘラによる沈線を施している。内外面共にヘラで調整されているが、雑である。共に同一個体と思われる。胎土に石英砂粒を含み、焼成は良い。色調は内外共に赤褐色を呈する。

##### ②須恵器(図版8-2, 図51-2)

頸部から肩にかけての壺の破片である。頸の径は10.8cmで、一部に自然軸がかかっている。肩の部分に貼り付けの三角突帯をもっている。胎土は良好で、灰色の焼成である。

##### ③青磁(図版8-3, 図51-5)

直線的に開く口縁部片で、復元径は15.2cmである。施文はみられない。色調は灰緑色を呈しており、越州窯産のものと思われる。

##### ④葎石(図51-6)

安山岩製のもので、両端に使用痕がみられる、長さ9.0cm、幅8.1cm、最大厚み3.6cm。

##### ⑤鉄銭(図51-8)

径2.5cm、厚さ3.0mmのもので、中に四角の穴をもつ鉄製のものである。腐蝕が進んでいるため両面とも文字は判読できない。

(2) 焼土とピット群 (建物遺構)

土師器・須恵器の散布をとまう溝状遺構以上の面をとりはらうと、径80～100cm程度の灰を主体とし、炭の小片も入っている焼土が出現し、その焼土をとりまくようにピット群が検出された。

第8地点が最も多く、焼土14を検出した(第18図)。第9地点で焼土1(第24図)、第10地点では、焼土3を検出した(第29図)。

焼土とピット群の組み合わせの中で、なんらかの遺構として形になるものが3組発見されたので、1号、2号、3号建物とした。

1号建物 (図版9, 第32図)

山神第8地点、全面拡張区のはゞ中央に位置する3間×2間の掘立柱の建物跡で、梁間間227.5cm、桁行間461.25cmである。桁行方位は、N14°Eを指し、梁間、桁行間の占有面積は28.4㎡である。中央部からやゝ北寄りに、灰を主体とし、炭の小片も検出される焼土がみられたが、これは3ヶ所で火をたいたものが重なりあった形となっている。

3号建物と3間×2間、中央に焼土という点で類似し、平面プランも梁間間:桁行間=3:4と相似形になっている。

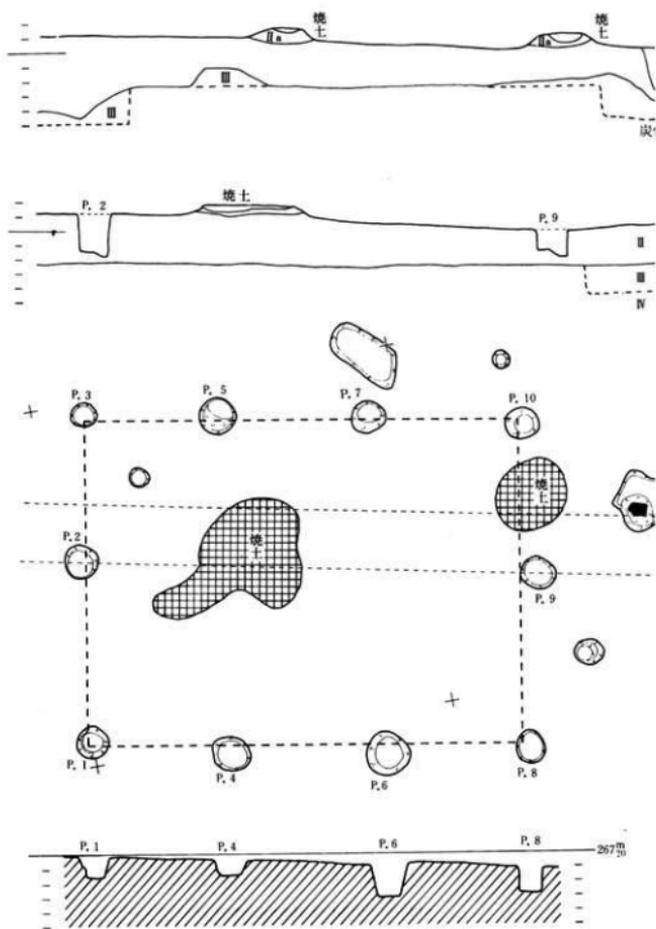
なお、1号建物の南側1.5mのところに、径40cm深さ90cmのピットがあり、焼けて炭化した柱の残部と思われるものが、検出された(図版12)。すべて炭化してもろく、ただの一例だけであるため、焼け残りの柱と断定することはできなかった。

第2表 1号建物計測表

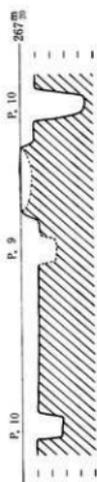
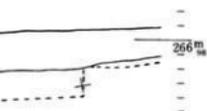
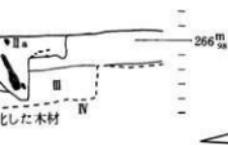
3間×2間	梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	
P 1 / P 2	250	455	P 1 / P 4	195	610	1	44.5	48	43
P 2 / P 3			210	P 4 / P 6		218	2	54	49
P 8 / P 9	240	450	P 6 / P 8	200	610	3	17	35	32
P 9 / P 10			210	P 3 / P 5		175	4	23	52
P 4 / P 5	470	470	P 5 / P 7	210	625	5	41	56	51
P 6 / P 7			470	P 7 / P 10		210	6	51	54
			P 2 / P 9			7	22.5	48	39
平 均	227.5	461.25	平 均	210.33	615	8	35.5	44	42
						9	28.5	43	42
						10	62.5	43	42
						平均	37.95	47.2	43.8

(単位cm)

焼土: 長径 240cm 短径 150cm



第32図 山神遺跡の1号建物



## 2号建物 (第33区)

山神第8地点発掘区域の西北隅にある、2間×2間の掘立柱の建物跡で、梁間263.33cm、桁行間398.33cmとみなされる。P1～P3の南側梁間は東に振れ、両桁行も平行ではない。(ただし、桁を柱の内・外に違わせて通したとしたら平行プランになる)。また、P5にあたる位置に柱穴を確認できなかった。

桁行方位は、N2°Eで、梁間、桁行間の占有面積は10.5㎡である。

中央部に径80cmの灰を主体とした焼土、南にかたよったところに長径140cm、短径110cm、深さ15～17cmの楕円形の掘りこみがみられ、その覆土は、灰が主で炭の小片もみられた。こちらが2号建物(1)に伴うと考えられる。同じ位置に重複して検出された桁行方位、N42°Wの2間×1間の建物遺構は、P12にあたる位置に柱穴を確認することはできなかった。

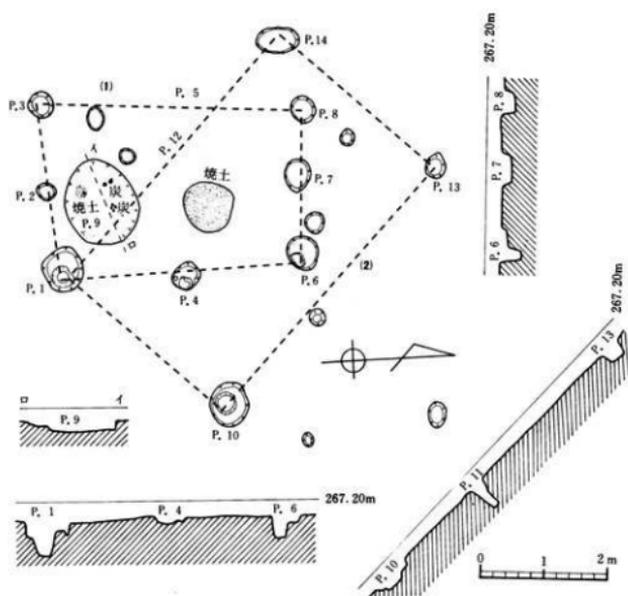
これはP4・P7を棟持柱とする寄棟型の掘立柱建物と推定されるが、この方面の専門家に踏問していないので断定はしない。梁間、桁行間の占有面積は16.5㎡である。平面プランも梁間間：桁行間＝2：3 (あるいは5：8)と考えられる。こちらを2号建物(2)とした。

第3表 2号建物 (1) 計測表

2間×2間	梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	
P1 P2	140	280	P1 P4	195	500	1	55	72	68
P2 P3	140		P4 P6	180		2	14	34	26
P6 P7	135	240	P3 (P5)	225	500	3	50	43	40
P7 P8	110		(P5) P8	190		4	12	45	44
P4 (P5)		270	P2 P7		5	—	—	—	
平均	131.25	263.33	平均	197.5	500	6	35	56	48
(単位cm)									
P9 長径140cm、短径110cm、深さ17cm									
						7	15	55	40
						8	25	42	37
						平均	29.4	49.6	43.3

2号建物 (2) 計測表

2間×1間	梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	
P1 P10	330	340	P10 P11	198	500	1	55	72	68
P11 P12	340		P11 P13	305		10	20	72	62
P13 P14	320	300	P1 P12	200	500	11	47	27	25
			P12 P14	300		12	—	—	—
平均	330	平均	250.75	500	13	26	26	32	
(単位cm)									
焼土 径80cm									
						14	32	32	40
						平均	36.0	53.0	45.4



第33図 山神遺跡の2号建物遺構

3号建物 (図版9、図-27・25)

山神第9地点中央部東側で検出された3間×2間の掘立柱の建物遺構で、梁間間：桁行間の比率は3：4で、平面プランは1号建物と相似形をなす。

梁間間361.25cm、桁行間481.66cmであり、桁行方位は、N52°Wを指し、梁間・桁行間の占有面積は、17.4㎡である。

第4表 3号建物計測表

3間×2間	梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	
P 1、P 2	185	355	P 1、P 4	135	475	1	14.5	28	25
P 2、P 3	170		P 4、P 6	200		2	17.5	32	31
P 8、P 9	190	360	P 6、P 8	140	485	3	17.5	27	26
P 9、P 10	170		P 3、P 5	165		4	27.5	27	25
P 4、P 5	350	380	P 5、P 7	165	485	5	29.5	34	30
P 6、P 7	380		P 7、P 10	160		6	25.0	28	28
			P 2、P 9	160	485	7	10.0	16	13
平均	178.75	361.25		160.83	481.66	8	23.0	39	35
						(単位 cm)			
						9	24.0	34	33
						10	22.5	29	25
						平均	21.1	27.4	27.1

焼土 長径 118cm、短径65cm

建物遺構は、1号・2号・3号とも、次の点で共通している。

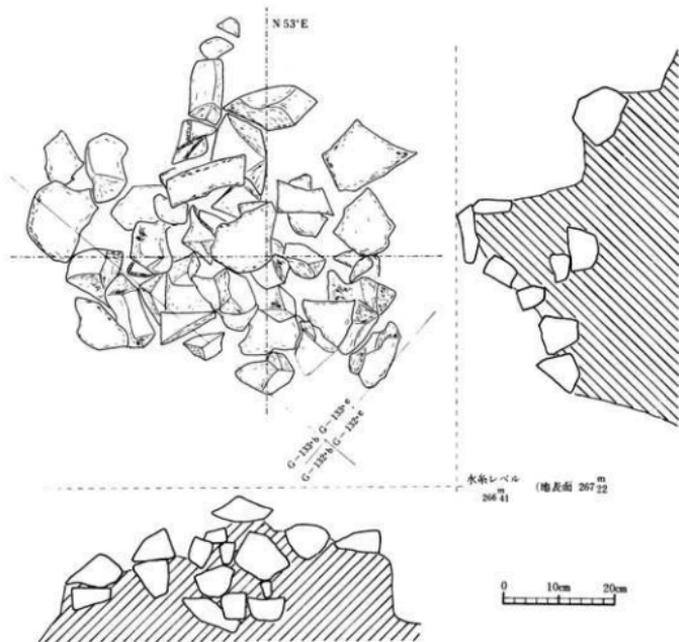
- ① 掘立柱である。
- ② 炉とみなされる焼土を中央部にとまなう。
- ③ 梁または桁を柱にしぼりつける位置が、内側・外側になるかによって柱穴の位置が内寄りまたは外寄りになったと考えられる。そのため柱穴列は一直線に並ばないものがある。
- ④ 奈良末・平安初期の土器片をとりあげたあと、掘り下げを進めた時はじめて柱穴が検出される。
- ⑤ 使用尺は、曲尺と同じ長さの1尺=30.3cmのものとみなされる。出土遺物から考え、奈良時代の使用尺としては天平尺を想定するのが常識的であるが、山神遺跡の場合は天平尺よりやや長大なものと考えられる。櫛国男氏は関東の鬼高期住居址の使用尺として約24cmの晋尺をあげておられるが(註1)、この30.3cmの尺は晋尺の $\frac{5}{4}$ の尺であり、大尺・小尺の関係にあったものであろうか。この使用尺がなにものであるかは、今後の研究課題である。

なお、1号建物と3号建物は全く相似の形で、その大きさを比較すると梁間・桁行ともに5：4の違いになっている。(1号建物× $\frac{4}{5}$ =3号建物)

註1 櫛国男「古墳の設計」築地書館、1975。

### (3) 石相遺構 (図版11)

山神遺跡第10地点、G-133-c区の3層上部で55cm×60cmのほぼ円形を成した集石が確認された。10cm内外の礫を含めて約50個の安山岩質の角礫が用いられている。断面からみると、少々盛り上ったような場所に配したようにみられるが掘り方は認められない。礫自体に焼けた痕跡はなくまた、周辺においても遺物の出土をみず集石の性格はつかめなかったが、今後の検討の意味でここに記載する。



第34図 山神遺跡第10地点の第三層上部の石相遺構

## VI 遺物

### (1) 縄文式土器

出土遺物は、第Ⅱ層中の凹線文・岩崎下層式・市来式・貝殻条痕文・燃糸文と、第Ⅲ層中のヘラ沈線文・底部に分けられる。

#### I 第Ⅱ層中の土器

##### 1類（凹線文土器）（第35図-1、図版5-1）

第8地点より出土したもので、頸部片である。外面はヘラでよく調整され、浅い凹線文を横位に施していて、ススの付着がみられる。内面もヘラでよく調整されている。胎土に雲母を含み、焼成は良い。色調は外面が黒褐色、内面が茶褐色を呈する。

##### 2類（岩崎下層式土器）（第35図2・3、図版-2・3）

第8地点より出土したものである。2は胴部、3は胴部から頸部にかけての土器片で、同一個体のもと思われる。外面はヘラでよく調整されており、数条の浅い凹線文を横位に施している。内面もヘラでよく調整されているが、貝殻腹縁による調整ないしは整形のあとと思われる条痕が認められる部分がある。胎土に雲母を含み、焼成は良い、色調は内外面共に淡茶褐色を呈する。

##### 3類（市来式土器）（第35図4、図版4-4）

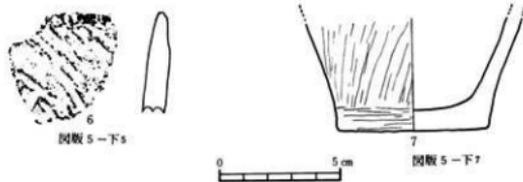
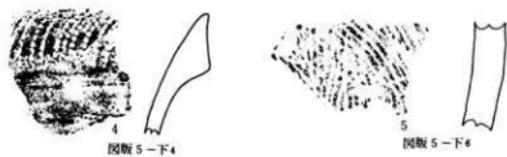
第9地点より出土したもので、口縁部片である。口縁部は断面が三角形を呈する。その上部に貝殻腹縁による刺突文を斜位に施している。内外面はヘラで調整されているが、貝殻腹縁により形整されたと思われる条痕が認められる。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。色調は内外共に赤褐色を呈する。

##### 4類（貝殻条痕文土器）（第35図5・6、図版4-5、6）

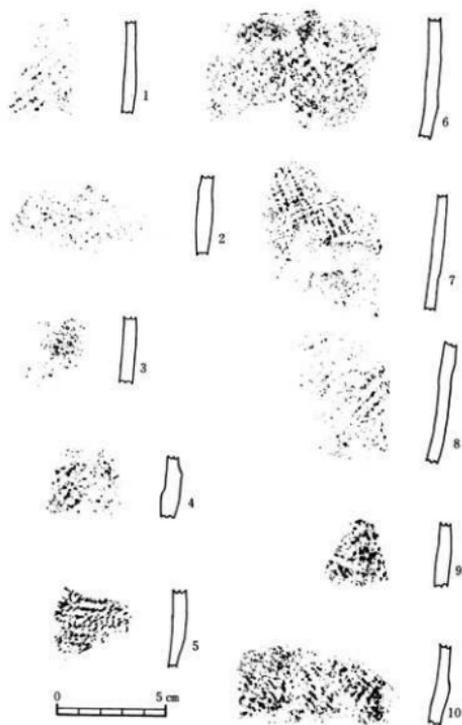
第8地点より出土したものである。5は胴部片、6は口縁部片である。5は厚手のもので、外面には貝殻腹縁による条痕を被杉状に施しているが、雑である。内面はヘラにより調整されている。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。内外淡茶褐色を呈する。6は口唇部外側に刻みを施し、口縁部より下は貝殻腹縁により条痕を斜位に施しているが、浅く雑である。内面はヘラによりよく調整されている。又外面にはススの付着がみられる。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。色調は褐色を呈する。

##### 5類（燃糸文土器）（第36図1-10、図版15-1-10）

第9地点より出土したものであり、1-10全て胴部片で小片である。1・2と6-9は右上がりの斜行燃糸文を施すが、3-5は左上がりの斜行燃糸文を施している。10は左右の斜行燃糸文の接する部分である。又文様構成に施文帯と無文帯とを交互にもっている。施文は雑に施されているが、内面はヘラでよく調整されている。1は外面にススの付着がみられる。器壁はうすいが、胎土に黒雲母を含み、焼成は良い。色調に外面が黒褐色ないしは褐色を呈するが、内面は1・6-10が茶褐色を、2-5が灰褐色を呈している。一は内面に於いて、輪積の手法を残している。



第35図 山神遺跡出土の縄文式土器

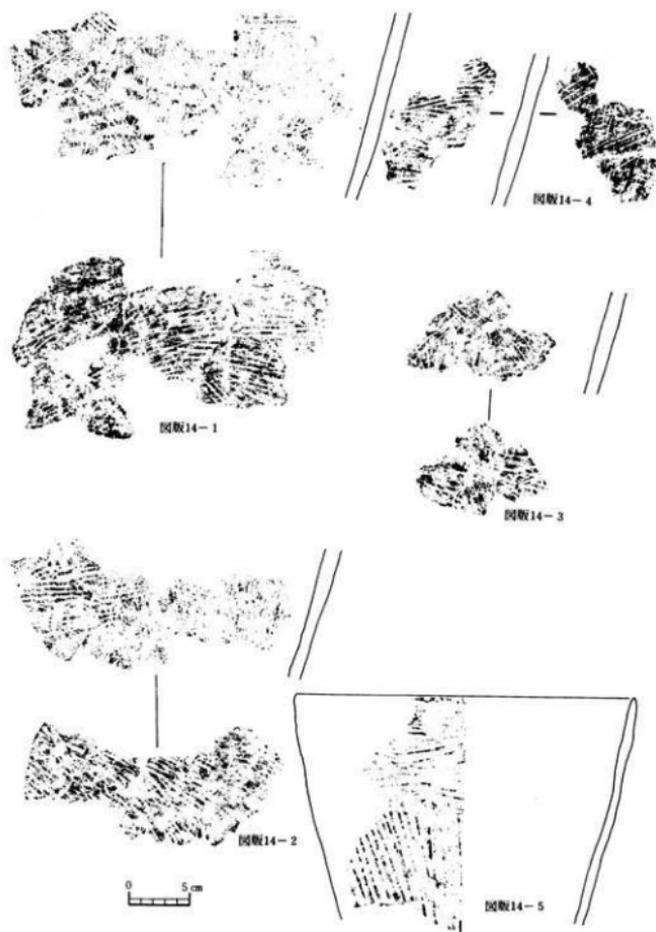


第36図 山神遺跡出土の燃糸文土器

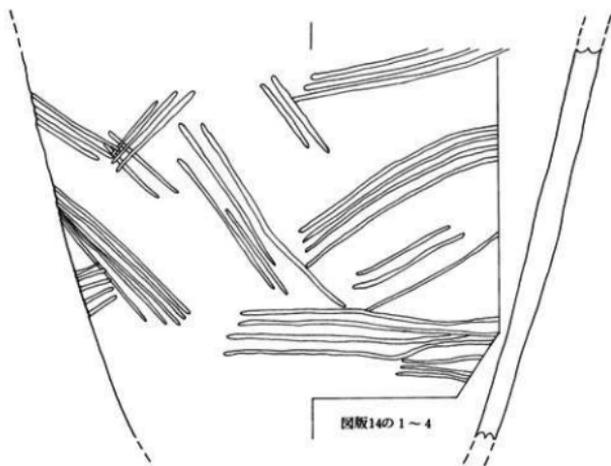
II 第3層中の土器

6類 底部 (第35図7, 図版5~7)

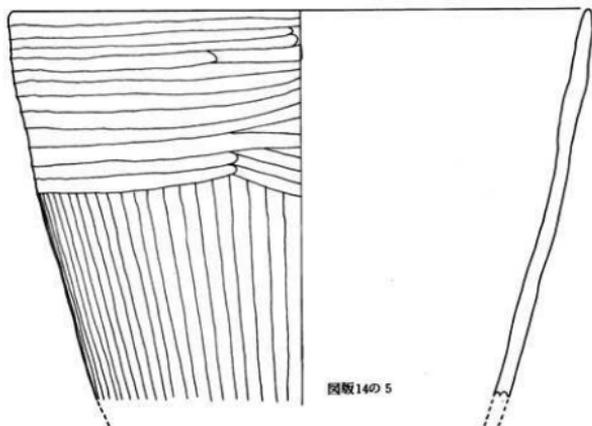
第8地点より出土したものである。外面はやや斜めに雑なへら調整を、底近くでは横位のへら調整を施していて、擦痕が明瞭である。底面もへら調整されている。内面では壁部分は縦位にへらでよく調整されている。底部内面は指によると思われる圧痕がみられるが、なめらかで



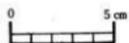
第37図 山神遺跡出土の縄文式土器



図版14の1~4



図版14の5



第38図 山神遺跡出土の縄文式土器

ある。胎土に細砂粉を含み、焼成は良い。色調は内外共に茶褐色を呈する。

7類 (図37-1~4, 図38-1, 図版14-1~4)

第8地点より出土したもので、胴部片である。器壁は厚く、直線的である。調整は貝殻線によるもので、外面では縦位に上部では、はっきり条痕を残している。下部では浅く、条痕を残さなくなる。内面では深い条痕を横位に施している。文様は先の細い施文具で、2ないし数条の沈線を斜格子状に乱れて施している。下部では横位の沈線を施しており、文様帯の区切りを示すと思われる。胎土に石英砂粒を含み、焼成はあまり良くない、部分的に剝離がみられる。色調は外面の上部で黒褐色、下部で茶褐色を呈し、内面は灰褐色を呈している。

8類 (図37-5, 図38-2, 図版14-5)

第8地点より出土したもので、口縁部から胴部のものである。口縁径は27.8cmを測り、口縁部が直行する円筒形をなす。文様は先の丸いへう状の施文具を使い、口縁部では横位の、胴部では縦位の条痕となっている。調整痕がそのまま文様効果を出している。内面は横位のへう調整が施されている。胎土に石英砂粒を含み、焼成はやや良い。色調は内外面共に灰褐色を呈する。

## (2) 石器

山神地区より出土した石器には、フレーク1、石匙3、すり石1、凹み石2の4種がある。出土した層位は石匙(図版12)が第Ⅲ層より出土したもので、他は第Ⅱ層より出土したものである。それぞれの属する時代ははっきりつかめられなかったが、第Ⅱ層は中期から後期の土器が出ているので、その時代と比較できよう。

### フレーク (図39-3)

玄武岩製の剥片を使用したものである。刃部を周辺につくり出してはいるが、風化により、鋭さを失っている。第8地点より出土したものである。

### 石匙 (図版12・20, 図39-1・2・4)

1は玄武岩製で横長の完全なものである。巾は6.7cm、長さ2.6cm、厚さ6.5cmである。つまみの部分には自然面を残す。刃部はよく仕上げられている。第8地点より出土したものである。2も玄武岩製で、破片である。両面に自然面を残す。刃部はよく仕上げられている。1同様第8地点で出土。4は玄武岩製の剥片を使用したもので、一部が欠けている。厚さが2.3cmとやや厚い。第10地点出土のものである。

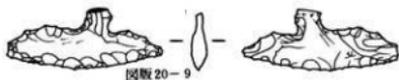
### すり石 (図版16-1, 図40-1)

第8地点より出土したものである。輝石安山岩製のもので、約角が欠損している。両面は平らで、断面はほぼ平行をなす。巾9.4cm、長さ5.4cmである。

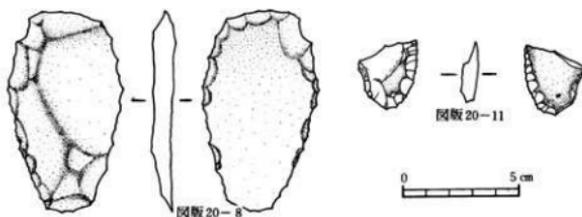
### 凹み石 (図版16-2・3, 図40-2・3)

2は砂岩製のもので、長さ4.5cm、巾8cmである。周辺には敲石として使われた痕を残しており、欠損後凹み石として再利用したものである。凹みは片面だけであるが、現存のほぼ中央に位置している。器面は全体によくみがかれている。第8地点出土のものである。3は安山岩

製で、長さ10.0cm、巾6cmのもので、第8地点出土のものである。岩質は軟弱で風化がはげしい。凹みは両面にある。両端は敲痕のように見えるが、風化で判然としない。

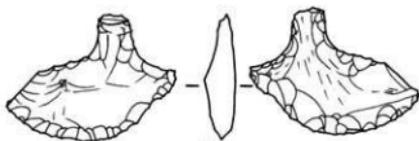


図版20-9



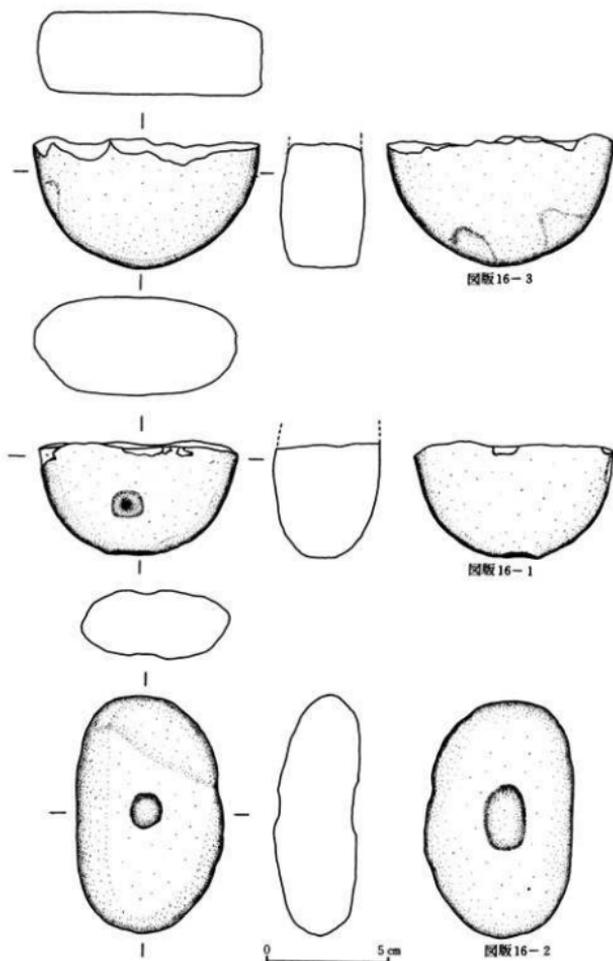
図版20-8

図版20-11



図版20-10

第39図 山神遺跡出土の石器



第40図 山神遺跡出土の石器

(3) 石鏃 (図版21～図23、図41～43)

西免・柗場・山神遺跡の総数は37点である

西免遺跡 (1～3)

各地点 (第1・2・3地点) のI層より1点ずつの出土をみている。3本とも凹基式で、石材は黒曜石・チャート・珪岩となっている。

柗場遺跡 (4～12)

第4・5地点あわせて9本の石鏃を検出している。そのうちの1本は磨製石鏃である (12) この磨製石鏃は、扁平無茎のもので基部にえぐりがみられ完形品である。鏃が先端部付近で両方にわかれ基部まで続く。石材は泥灰岩である。他はすべて無茎打製石鏃で石材は珪岩・黒曜石・玄武岩である。形態的には、平基式 (4・10) と凹基式 (5・6・7・8・9・11) とに大きく分けられる。サメ歯鏃あるいは鋸歯鏃とよばれる細かい調整痕のみられるもの (11) も出土した。

山神遺跡 (13～37)

第6・8・9・10地点あわせて25点の石鏃を検出している。そのうち、第8地点のII層より千枚岩製の磨製石鏃が出土している (13)。この磨製石鏃は、柗場遺跡出土のものとはほぼ同じ形態をもっている。その他のものはすべて無茎打製石鏃である。石材は珪岩、黒曜石・玄武岩・チャートである。形態的に、平基式 (27) と凹基式とにわけられ、凹基式には、鋸歯鏃 (16・24・26・29・34) や基部のえぐり部分が円形あるいは梯形をした鏃形鏃 (17・19・33) もみられる。山神遺跡に於いては、第8地点のII層に石鏃が44%集中をみた。I層から出土もいれてみると約半分近くが検出されたことになる。

(4) 土鏃 (図版23、図43)

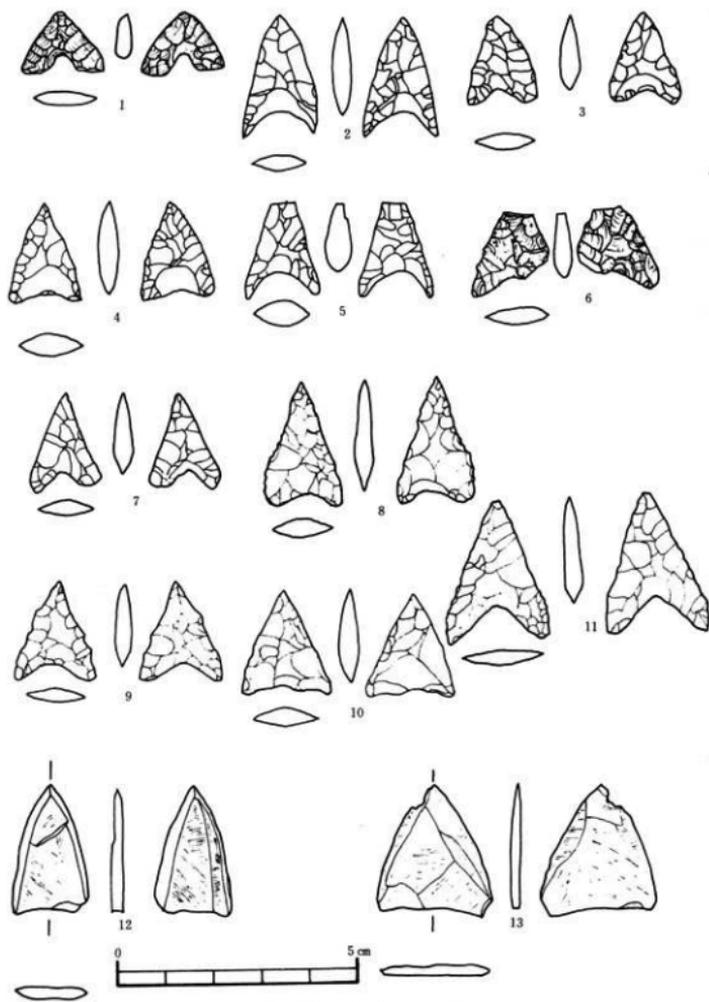
柗場・山神遺跡より5点出土している。

柗場遺跡第5地点から4点の出土をみている。1はB-97-d区II層から出土し長さ4.2cm、直径1.8cm、重さ9.6gの赤褐色の完形品である。2はB-96-c区I層より出土の長さ4.0cm、直径1.9cm、重さ11.2gの黄灰色をしたものである。約3分の1が欠損している。3はB-101-d区I層下部より出土している。長さ4.5cm、直径1.8cm、重さ10gの暗灰色の両面より穿孔したものである。4はC-101-b区I層より出土で長さ4.0cm、直径1.7cm重さ10.5gの赤褐色をしたよく整正された完形品である。5は先端部が欠けている。黄褐色をした現在長さ4.5cm、直径1.4cm、重さ6.7gのものでC-100-a区I層より出土している。

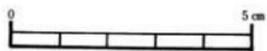
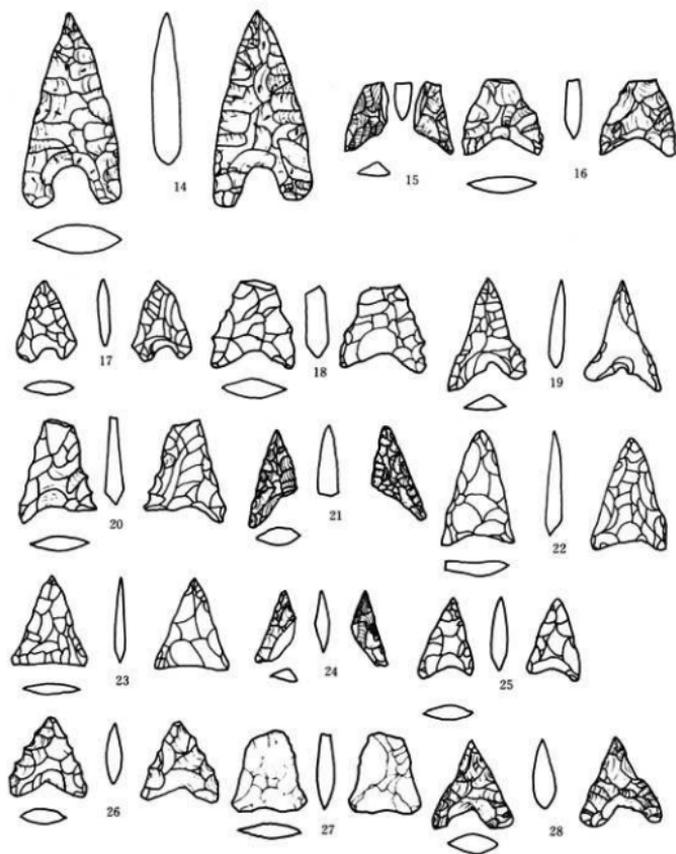
山神遺跡からは第8地点のC-185-d区I層から1点出土している。現在長さ4.2cm、直径1.8cm、重さ9.1gの黄褐色をした土鏃である。柗場・山神遺跡より約600m北西のところに以前魚釣道と呼ばれた場所があり、土鏃との関連がでてくるのではなかろうか。また5点とも長さ・直径・重さが一定しており同時期のものと思われる。

第5表 石畿分類表

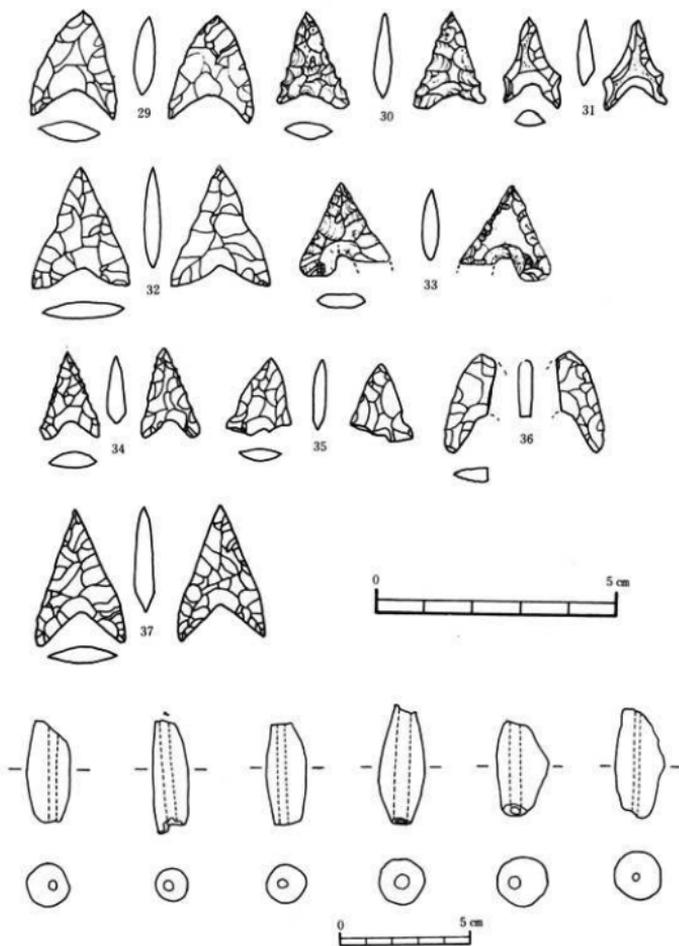
No	遺跡	地点	区	層	石質	長さ	巾	厚さ	重さ	タイプ及び備考
1	西免	1	表 採		黒曜石	1.3	1.75	0.35	0.45	
2	"	2	I-50-c	I	チャート	2.5	1.6	0.35	1.0	凹基式
3	"	3	F-3-d	I	珪岩	2.0	1.5	0.35	0.75	凹基式
4	栢場	4	C-83-b	I	珪岩	2.0	1.5	0.35	1.0	平基式
5	"	"	H-72-b	I	珪岩	2.1	1.6	0.5	1.15	凹基式 先端部欠損
6	"	"	C-79-d	Ⅲ上	黒曜石 (1.8)	(1.5)	0.3	0.75		凹基式 先端部片脚欠損
7	"	5	C-101-b	I	玄武岩	2.1	1.5	0.4	0.75	凹基式
8	"	"	C-101-b	I	珪岩	2.6	1.5	0.35	1.1	凹基式
9	"	"	B-96-d	Ⅱ	玄武岩	2.2	1.7	0.3	0.75	凹基式
10	"	"	B-96-d	Ⅱ	珪岩	2.0	1.8	0.4	1.05	平基式
11	"	"	C-99-a	Ⅱ	珪岩	3.1	2.1	0.35	1.35	鋸歯縁
12	"	"	C-100-a	I	泥灰岩	2.7	1.6	0.2	1.2	磨製石畿
13	山神	8	C-181-d	Ⅱ	千枚岩	2.6	2.4	0.2	1.7	磨製石畿
14	"	6	F-111-b	Ⅲ上	黒曜石	4.1	2.0	0.55	3.5	二等刃三角形の大型石畿
15	"	8	C-174-c	I	黒曜石 (1.4)	(0.8)	0.4	0.45		凹基式 先端部片脚欠損
16	"	"	D-175-d	I	黒曜石 (1.6)	1.65	0.3	0.7		鋸歯縁 先端部欠損
17	"	"	D-181-c	Ⅱ	珪岩	1.7	1.3	0.2	0.4	鋸形縁
18	"	"	D-179-b	Ⅱ	珪岩 (1.9)	1.8	0.4	1.3		先端部欠損
19	"	"	D-182-a	Ⅱ	玄武岩	2.4	1.7	0.25	0.6	鋸形縁
20	"	"	C-181-c	Ⅱ	珪岩	2.2	1.7	0.3	1.05	先端部欠損
21	"	"	D-182-b	Ⅱ	黒曜石	2.1	(1.0)	0.4	0.6	長脚縁
22	"	"	D-181-b	Ⅱ	珪岩	2.4	1.6	0.4	1.1	
23	"	"	D-182-a	Ⅱ	チャート	2.0	1.5	0.2	0.45	
24	"	"	D-175-d	Ⅱ	黒曜石 (1.6)	(0.6)	0.3	0.2		鋸歯縁
25	"	"	D-174-c	Ⅱ	珪岩	1.7	1.2	0.3	0.5	小型
26	"	"	D-181-d	Ⅱ	チャート	1.8	1.5	0.25	0.6	鋸歯縁
27	"	"	D-183-c	Ⅱ	チャート	1.7	1.6	0.3	0.9	平基式
28	"	"	E-179-a	Ⅲ	黒曜石	1.9	1.7	0.45	0.75	凹基式
29	"	9	G-159-a	I下	珪岩	2.3	1.8	0.4	1.1	
30	"	"	G-159-b	I	黒曜石	2.1	1.5	0.35	0.65	鋸歯縁
31	"	"	H-133-d	Ⅱ	珪岩	2.0	1.3	0.3	0.5	
32	"	"	D-157-c	Ⅱ	黒曜石	2.6	2.1	0.3	1.05	
33	"	"	E-143-c	Ⅲ	黒曜石	2.0	1.8	0.3	0.7	鋸形縁 片脚欠損
34	"	10	F-136-c	I下	珪岩	1.9	1.3	0.4	0.6	鋸歯縁
35	"	"	G-133-a	I	玄武岩 (1.6)	(1.35)	0.25	0.4		脚欠損
36	"	"	J-125-a	I	珪岩 (2.1)	(0.8)	0.3	0.6		凹基式 片脚欠損
37	"	"	G-139-a	Ⅱ	珪岩	2.9	1.9	0.35	1.3	



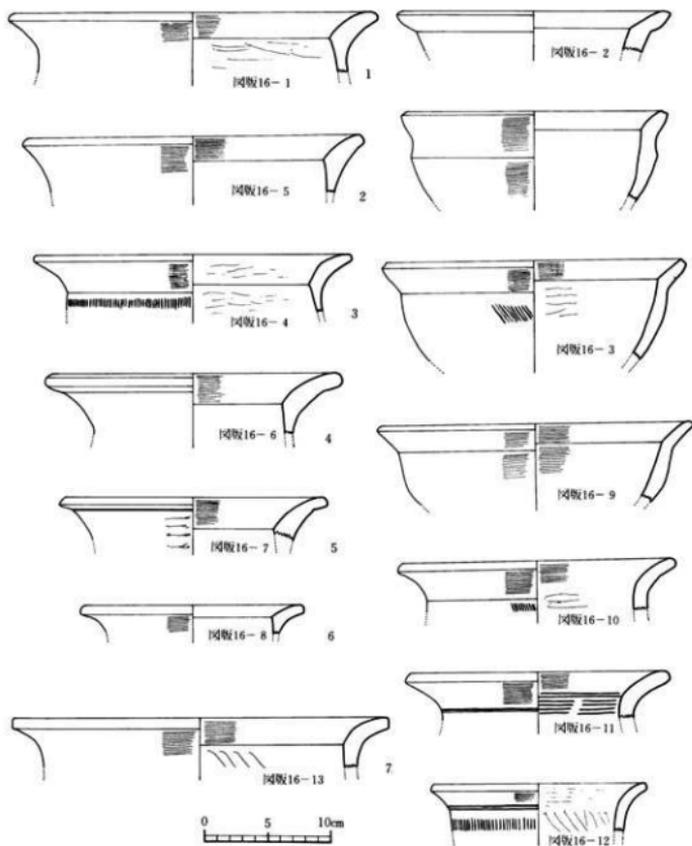
第41図 西免・柙場遺跡出土の石鏃



第42図 山神遺跡出土の石鏃



第43図 山神遺跡出土の石鏃および坪場遺跡出土の土器



第44図 山神遺跡第8地点出土の甕形土器・鉢形土器

## 5) 土師器

山神遺跡調査当時は、胎土焼成からみて、成川式土器で処理していた。また出土が土師器、須恵器に続いて連続的に出土し、はっきりした区分はつけられなかった。土師器は、坏、碗のみでその他の器種がみあたらず、須恵器は甕形土器がその大半というような状態で、第8地点における土器の出土には器種、器形にかたよりがみられた。器種および共伴に近い状態から考えて弥生後期として処理するのではなく、古式土師とした方がよいと考える。また、ここで述べる甕形土器・鉢形土器は、その底部らしいものがほとんど見あたらなかった。鍋・羽釜状の底で、胴部の破片と区別がつけられない形状のものであるのかも知れない。

### ①甕形土器 (図版16, 図42-1~6)

胴部の器壁は内外とも赤褐色で胎土に細かい砂が混り、焼成良好な土器である。薄い器壁に対して、部厚く「く」の字形に外反する口縁をもち、内側はヘラで調整しているため、稜線を形成する。口縁部には、内外ともよこなで調整がみられる。胴部は垂直に下るものと、いくぶん、外ふくらみ気味になるものとみなされる。底部は鍋底、あるいは丸底状のものになるであろうか。底部をとらえていないので推定の域を出ない。

### ②甕形土器 (図版16, 図42-12~14)

小形の甕形土器で、胎土焼成は、1と同様である。部厚い口縁でなく、口縁部から胴部にかけて、同じ厚さで続く。13は内面に横の、14は外面に縦の刷毛目がほどこされている。

### ③鉢形土器 (図版16, 図42-8~11)

胎土焼成は1、2と同様である「く」の字形の口縁をもち、内面に稜線をもつ。器壁は胴部中程で厚く、以下底に向かってうすくなる傾向がみられる。

### ④坏および墨書土器

山神第8地点において、土師器の坏が数多く出土している。完形品を実測し、底部を実測しているうちに、底部径が約6cmのものと約7cmのものに大別できることに気付いた。6cmは天平尺の2寸、7cmは高麗尺の2寸になるから、土器の寸法を論じたものはないかと、気をつけたところ、田中琢氏が「瓦器は、寸法をきめて製作されたものらしく、古くは径五寸、鎌倉時代には四寸を意図していたのではないかと述べられておられることに気付いた(註1)。これと們国男代が鬼高期の土器を計測して使用尺を論じておられる(註2)ことから考えて、当然、奈良、平安の土師器には意図的な数値があるものと判断した。

延喜式には各種の器があげられている。たとえば

(銀器) 御飯筒……径6寸、深1寸7分

(漆器) 窪杯……径5寸、深1寸5分

(銀器) 酒台……高6寸3分、広6寸

(朱塗器) 蓋……径5寸

蓋……径4寸5分

(瓷器) 蓋……径4寸7分

- 蓋………径4寸  
 鉢壺………周1尺9寸 高6寸  
 (朱塗器) 盤………8寸、7寸、6寸、5寸  
 (甕器) 花形塩環………3寸  
     小椀………6寸  
 (添器) 大椀………径8寸6分、深3寸  
 (甕器) 茶椀………径5寸  
     中椀………径7寸8分、深2寸

など、まだいくらかもあるが、寸法を記入してある。これらを要約すると、口径と深さ、高さを記入している。そこで、杯の計測箇所として、5箇所を選定し、まず完形品から法則性を見出した。つぎに口縁部がかけていても、極端に外反または内湾しないかぎり実測図で、外側・内側の立ちあがりぐあいを眺めると、ほぼ落着く点がきまってくる。

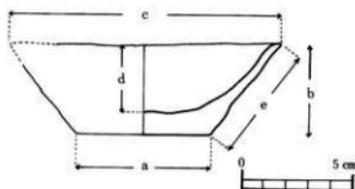
多くの実測図をあたっているうちに、第45図のような計測箇所を設定しえた。やはり古代の人々も人の子、どこかで寸法を合わせようとしたことがうかがえる。

山神遺跡の場合、第6表でみるとおり、椀形が圧倒的に多い。「薩摩国府国分寺発掘調査報告書」掲載の実測図をあたると、 $a = c \times \frac{1}{2}$ 型が数少ない図の中に、5、6ヶすぐ探しだせる。なお、延喜式によると杯には、いろいろな種類がある。器形で分類していけば、ひとつずつでも判ってくるのであるまいか。

山神出土の底部について、実測可能な大きめのものは、ほとんど手をつけたが、小さな破片は実測した数よりはるかに多い。底部はヘラ切りがほとんどで、回転糸切は皆無だったのが、特徴的である。

註1 「日本の考古学」Ⅵ, 河出書房, P 210, 田中琢氏執筆。

2 櫻岡男「古墳の設計」築地書館, 1975。



遺物は、鹿児島県姶良郡姶良町西ノ麦より耕作中に出土した杯。  $a = 6.0 \sim 6.1$   $b = 4.1 \sim 4.2$   $c = 12.2$   
 $d = 3.0$   $c = 5.2$   $a = c \times \frac{1}{2} = d \times 2$

第45図 土師器杯の計測

#### 墨書土器 (図版18・19, 図47)

墨書土器片の出土がわりと多いので驚いた。薩摩国府・国分寺の調査でも、こんなには見つからない。「燹」にせよ「廣」にせよ、このような達筆な墨書土器の出土は寡聞のためか知らない。完全な墨書土器にかかれている文字があまりにも達筆なので、なんと読むかについていろいろと論がわかれた。「燹」・「奥」・「西天」の三通りとなった。「奥」には「かまど」の意があり、焼土が附近に多いことから好都合との意見もあつたが、「燹」と読むのがすなおな読み方だと考える。また、達筆すぎる文字であることから、大隅国府の官人と関連があるのかも知れない。この問題は今後の大きな研究課題である。なおまた、第8地点・第10地点ともに完成品がすぐ近くに他に遺物を見出せない全く単独の形で出土したことも特徴的であり、それが何故であるのか今のところ判らない。

#### (6) その他

##### 1 ふいごの羽口 (図版17-3, 図49-1)

ふいごの羽口の出土は、焼土の検出が数ヶ所みられたことと関連して、タタラとの関係を探ることが今後の課題である。

##### 2 鉄鏃 (図版24)

長さ 4.5cm・幅 3cm重さ10.1gまったくきびでしまっている。

##### 3 青銅製小仏像 (図版24)

高さ 4cm、重さ 9.2gのものである。その大きさから考えて護持仏的なものであろう。

##### 4 「へら」きずあとの残る土器 (図49-2)

長さ 1.3cm、幅 0.1cm・深さ 0.1cmの「へら」きず。ネジ廻しの先端のようなへら先が器面に対して垂直にあたったような後が残っている。偶然のものであろうが、焼成前にできた傷である。

##### 5 高環の脚 (図49-3)

底径径11.2cm、脚高 5.5cm。D-169-b-IIの溝状遺構中より出土。赤褐色を呈し、なで調整。細砂混りで焼成良好。1年間近いこの地区の調査で高環が出土したのはこれが1点のみで、しかも出土地点のすぐ近くでは他に出土遺物がないのも理解に苦しむ。

第6表 土師器環・楕の計測

①  $a = c \times \frac{1}{2}$ 型

図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 法	a	b	c	d	e	備 考
1	4	D-184-d-II	楕 黄白色	付け高台	8.5	8.3	<b>17.0</b>	<b>6.0</b>	9.3	図46-17
2	30	D-181-b-II	〃 明褐色	〃	<b>8.4</b>	6.5	16.8	5.1	7.8	
3	183	C-182-c-II	〃 褐色		8.4	7.0	<b>16.8</b>	5.4	8.1	内黒
4	181	D-181-b-I	〃 明褐色		8.4	6.0	<b>16.8</b>	5.1	7.4	〃
5	145	C-181-b-II	〃 黄白色	付け高台	<b>8.4</b>	6.0	16.8	4.5	7.3	〃
6	166	C-183-b-I	〃 褐色	〃	<b>8.4</b>	6.0	16.8	4.5	7.3	〃
7	29	C-181-b-II	〃 明褐色	〃	<b>7.8</b>	6.0	15.6	4.7	7.2	
8	126	D-182-d-I	〃 〃	〃	<b>7.8</b>	6.0	15.6	4.5	7.2	内黒
9	108	C-182-c-II	〃 黄白色	〃	<b>7.6</b>	6.0	15.2	4.5	7.1	〃
10	182	D-181-a-I	環 褐色	へら切り	7.0	6.0	<b>14.0</b>	4.5	6.9	〃
11	43	C-181-d-II	〃 明褐色		<b>7.0</b>	<b>5.1</b>	<b>14.2</b>	<b>4.5</b>	<b>6.2</b>	図46-11
12	238	C-182-c-II	〃 明褐色	〃	<b>7.0</b>	5.1	14.0	4.5	6.1	
13	217	C-181-b-I	〃 褐色	〃	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.5	6.1	
14	220	D-181-b-II	〃 黄白色	〃	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.5	6.1	
15	252	D-182-b-II	〃 明褐色	〃	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.5	6.1	
16	256	D-181-d-II	〃 赤褐色	まきあげ	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.5	6.1	
17	258	D-182-a-II	〃 〃	削り出し	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.5	6.1	
18	64	D-182-c-II	〃 〃	へら切り	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.5	6.1	
19	140	E-129-c-I	〃 褐色	糸 切	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.5	6.1	内黒
20	221	D-182-b-II	〃 黄白色	へら切り	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.4	6.1	
21	63	C-183-d-II	〃 赤褐色	〃	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.4	6.1	
22	171	C-184-a-II	〃 黄白色	削り出し	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.3	6.1	内黒
23	174	C-182-d-II	〃 〃	付け高台	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.3	6.1	〃
24	236	C-181-b-II	〃 赤褐色	へら切り	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.3	6.1	
25	242	C-182-b-II	〃 〃	まきあげ	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.3	6.1	
26	195	B-101-c-I	〃 褐色	削り出し	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.2	6.1	榎場出土
27	91	D-182-c-II	〃 赤褐色	へら切り	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.2	6.1	
28	93	D-183-a-II	〃 〃	〃	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.2	6.1	
29	94	D-181-a-II	〃 〃	〃	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.2	6.1	
30	96	D-180-a-II	〃 〃	〃	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.2	6.1	
31	98	D-183-a-II	〃 〃	〃	<b>7.0</b>	5.0	14.0	4.2	6.1	

	図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製作法	a	b	c	d	e	備 考
32	234	D-183-a-II	坏	赤褐色	へら切り	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
33	243	C-182-a-II	〃	〃	〃	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
34	259	D-183-a-II	〃	〃	削り出し	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
35	260	C-182-c-II	〃	明褐色	〃	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
36	101	C-181-d-II	〃	赤褐色	へら切り	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
37	158	C-182-b-II	〃	黄白色	付け高台	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	内黒高台棕色
38	60	D-181-a-II	〃	赤褐色	へら切り	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
39	67	D-182-a-II	〃	黄白色	〃	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
40	68	C-182-d-II	〃	〃	〃	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
41	83	D-182-c-II	〃	〃	〃	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
42	178	D-182-b-II	〃	〃	〃	7.0	5.0	13.8	4.2	6.1	内黒
43	5	E-143-c-II	〃	赤褐色	へら切り	7.0	5.0	13.7	4.2	5.9	井の軒字(敷)17 -1、図46-12
44	229	B-181-b-I	〃	明褐色	〃	7.0	4.8	14.0	4.2	5.9	
45	100	C-182-d-II	〃	褐色	〃	7.0	5.0	14.0	4.0	6.1	
46	237	C-181-d-II	〃	〃	〃	7.0	5.0	14.0	4.0	6.1	
47	184	C-181-c-II	〃	明褐色	〃	7.0	5.0	14.0	3.9	6.1	内黒
48	223	E-176-b-I	〃	〃	へら切り	7.0	5.0	14.0	3.9	6.1	
49	176	D-183-b-I	〃	黄白色	付け高台	7.0	5.0	14.0	3.9	6.1	内黒
50	32	E-182-c-II	碗	〃	〃	6.8	5.6	13.6	4.2	6.5	焼土内
51	15	D-182-b-II	〃	赤褐色	へら切り	6.8	5.1	13.6	4.1	6.2	
52	13	D-183-c-II	〃	〃	〃	6.8	5.0	13.6	4.1	6.0	
53	116	D-181-b-II	〃	黄白色	付け高台	6.6	7.1	13.2	4.5	7.8	内黒
54	227	C-182-d-II	〃	赤褐色	へら切り	6.6	5.0	13.2	4.4	6.1	
55	89	C-181-b-II	〃	〃	〃	6.6	5.0	13.2	4.4	6.0	
56	87	C-183-d-II	〃	〃	〃	6.6	5.2	13.2	4.2	6.0	
57	11	C-172-c-II	〃	〃	〃	6.6	5.0	13.2	4.2	6.0	穴あき、図46-17 -7、図46-6
58	121	D-182-b-II	坏	褐色	付け高台	6.6	5.0	13.2	4.0	6.0	内黒
59	123	C-182-d-II	〃	黄白色	〃	6.6	5.0	13.2	3.6	6.0	〃
60	261	C-180-d-II	〃	明褐色	へら切り	6.5	4.5	13.0	3.6	5.6	
61	14	C-181-a-II	〃	黄白色	〃	6.4	5.0	12.8	4.0	6.0	
62	86	D-180-a-II	〃	赤褐色	〃	6.0	5.0	12.0	4.2	5.8	
63	74	C-183-d-II	〃	明褐色	〃	6.0	4.2	12.0	3.6	5.2	
64	76	D-181-b-II	〃	黄白色	〃	6.0	4.2	12.0	3.5	5.2	

図面番号	出土地点	器種	色調	製作法	a	b	c	d	e	備考	
65	187	C-183-c-I	坏	明褐色		6.0	4.0	<b>12.0</b>	3.6	4.9	内黒
66	12	C-181-b-II	碗	黄白色	へら切り	<b>5.8</b>	5.8	11.6	4.8	6.5	
67	143	C-182-d-II	坏	褐色	付け高台	<b>6.6</b>	4.0	13.2	2.1	5.1	
68	136	C-181-b-II	"	"	"	<b>6.0</b>	3.6	12.0	2.1	4.6	内黒

- 削り出しと表現したのは、「削り出し高台」と言い切ることはできぬが、若干底部をえぐったものを指す。
- 「まきあげ」はまきあげ履の明瞭なもの。
- 「高台着色」は高台を意図的に着色に着色したもの。
- ゴチックの数値は実測値および復元値・他は推定数値。

②  $a = d \times 2 = c \times \frac{1}{2}$  型

図面番号	出土地点	器種	色調	製作法	a	b	c	d	e	備考	
1	8	I-129-b-II	坏	褐色	付け高台	<b>7.0</b>	<b>5.0</b>	<b>13.8</b>	<b>3.7</b>	<b>6.0</b>	墨書「古」印 17, 19, 46, 47
2	160	D-182-c-II	"	"	"	<b>7.0</b>	5.0	14.0	3.7	6.1	内黒
3	134	C-183-b-II	"	"	削り出し	<b>7.0</b>	5.0	14.0	3.6	6.1	"
4	197	B-99-d-I	"	黄白色	付け高台	<b>7.0</b>	5.0	14.0	3.5	6.1	" 柘場出土
5	146	C-182-b-II	"	"	"	<b>7.0</b>	5.0	14.0	3.3	6.1	"
6	105	C-180-d-II	"	明褐色	"	<b>7.0</b>	5.0	14.0	3.0	6.1	
7	48	D-181-c-II	"	赤褐色	へら切り	<b>6.0</b>	4.2	12.0	3.0	5.2	

③  $a = e = c \times \frac{1}{2}$  型

図面番号	出土地点	器種	色調	製作法	a	b	c	d	e	備考	
1	179	C-185-b-II	碗	褐色		8.4	7.5	<b>16.8</b>	6.6	8.4	内黒
2	31	D-183-c-II	"	明褐色	付け高台	<b>8.4</b>	7.5	16.8	6.3	8.4	
3	207	C-183-e-II	"	黄白色	"	<b>8.4</b>	7.2	16.8	6.2	8.4	
4	212	C-182-b-II	"	"	"	<b>8.4</b>	7.2	16.8	5.9	8.4	
5	104	C-183-c-II	"	赤褐色	"	<b>8.4</b>	7.2	16.8	5.9	8.4	
6	162	C-183-d-II	"	"	"	<b>8.4</b>	7.3	16.8	5.4	8.4	内黒
7	107	D-181-a-II	"	褐色	削り出し	<b>8.4</b>	6.6	16.8	5.3	8.4	
8	115	C-182-c-II	"	明褐色	付け高台	<b>8.0</b>	7.0	16.0	5.6	8.0	内黒

図面 番号	出土地点	器 種	色調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考
9 114	C-183-b-II	碗	黄白色	付け高台	8.0	7.0	16.0	5.4	8.0	内黒
10 128	E-129-c-II	"	"	"	7.8	6.6	15.6	4.8	7.8	"
11 19	D-180-b-II	"	明褐色	"	7.6	7.0	15.2	5.1	7.6	
12 190	D-180-a-I	"	褐色	付け高台?	7.5	6.6	15.0	5.4	7.5	内黒
13 204	D-183-b-II	"	赤褐色	へら切り	7.5	6.5	15.0	5.9	7.5	
14 189	C-180-d-II	"	褐色	付け高台?	7.5	6.5	15.0	4.8	7.5	内黒
15 111	D-182-d-II	"	黄白色	付け高台	7.2	6.4	14.4	4.9	7.2	"
16 103	C-180-b-II	"	赤褐色	"	7.2	6.2	14.4	4.8	7.2	
17 10	C-181-b-II	"	"	削り出し	7.2	6.1	14.4	4.5	7.1	
18 120	D-181-b-II	"	褐色	付け高台	7.2	6.0	14.4	4.2	7.0	内黒
19 254	D-182-a-II	"	赤褐色	巻きあげ	7.0	6.1	14.0	5.7	7.0	
20 231	D-182-b-II	"	"	へら切り	7.0	6.1	14.0	5.6	7.0	
21 249	C-181-d-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.5	7.0	
22 157	C-182-d-II	"	"	付け高台	7.0	6.1	14.0	5.5	7.0	内黒高台着色
23 232	C-181-b-I	"	明褐色	へら切り	7.0	6.0	14.0	5.5	7.0	
24 218	D-182-a-II	"	"	"	7.0	6.0	14.0	5.4	7.0	
25 219	C-181-a-II	"	"	"	7.0	6.0	14.0	5.4	7.0	
26 180	C-182-c-II	"	褐色	"	7.0	6.0	14.0	5.4	7.0	内黒
27 210	C-183-b-II	"	黄白色	"	7.0	6.0	14.0	5.4	7.0	
28 203	C-182-c-II	"	赤褐色	"	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
29 216	C-181-c-II	"	明褐色	"	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
30 225	D-182-a-II	"	赤褐色	"	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
31 246	C-183-b-II	"	"	削り出し	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
32 247	D-182-a-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
33 255	D-182-a-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
34 50	D-183-b-II	"	明褐色	へら切り	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
35 53	C-183-d-II	"	赤褐色	"	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
36 55	C-182-d-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.3	7.0	
37 88	D-182-c-II	"	"	"	7.0	6.2	14.0	5.3	7.0	図46-10
38 226	D-182-a-II	"	"	"	7.0	6.0	14.0	5.3	7.0	
39 196	B-101-c-I	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.3	7.0	榫端出土
40 159	D-180-b-I	"	"	付け高台	7.0	6.1	14.0	5.3	7.0	内黒高台着色
41 132	C-181-b-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.2	7.0	"

図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考	
43	248	D-182-a-II	椀	赤褐色	へら切り	7.0	6.1	14.0	5.2	7.0	
44	250	C-181-d-II	"	"	削り出し	7.0	6.1	14.0	5.2	7.0	
45	44	D-181-b-II	"	"	へら切り	7.0	6.1	14.0	5.2	7.0	
46	58	D-183-a-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.2	7.0	
47	59	D-182-c-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.1	7.0	
48	77	C-180-b-II	"	黄白色	"	7.0	6.1	14.0	5.1	7.0	
49	78	D-181-b-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.1	7.0	
50	79	C-184-c-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.1	7.0	
51	92	C-183-a-II	"	赤褐色	"	7.0	6.0	14.0	5.1	7.0	
52	224	D-182-b-II	"	"	"	7.0	6.0	14.0	5.1	7.0	
53	240	D-181-d-I	"	暗褐色	巻きあげ	7.0	6.0	14.0	5.1	7.0	
54	155	E-129-b-I	"	褐色	削り出し	7.0	6.1	14.0	5.1	7.0	内黒
55	230	D-183-b-II	"	赤褐色	へら切り	7.0	6.1	14.0	5.1	7.0	
56	213	C-182-c-II	"	黄白色	付け高台	7.0	6.1	14.0	5.0	7.0	
57	125	D-180-a-I	"	"	"	7.0	6.2	14.0	5.0	7.0	内黒
58	169	D-181-a-II	"	明褐色	"	7.0	6.2	14.0	5.0	7.0	内黒高台褐色
59	200	C-182-c-II	"	赤褐色	へら切り	7.0	6.1	14.0	5.0	7.0	
60	38	D-182-c-II	"	"	削り出し	7.0	6.1	14.0	5.0	7.0	図46-23
61	168	C-180-c-I	"	褐色	付け高台	7.0	6.2	14.0	5.0	7.0	内黒高台褐色
62	130	C-182-d-I	"	黄白色	"	7.0	6.2	14.0	4.9	7.0	内黒
63	175	D-181-a-II	"	褐色	"	7.0	6.1	14.0	4.9	7.0	"
64	205	C-182-c-II	"	赤褐色	"	7.0	6.1	14.0	4.9	7.0	
65	165	D-181-c-I	"	黄白色	"	7.0	6.1	14.0	4.9	7.0	内黒
66	40	C-182-d-II	"	"	削り出し	7.0	6.1	14.0	4.9	7.0	図46-22
67	39	C-182-d-II	"	赤褐色	"	7.0	6.1	14.0	4.8	7.0	
68	49	D-183-b-II	"	"	へら切り	7.0	6.1	14.0	4.8	7.0	
69	235	C-182-d-II	"	"	"	7.0	6.0	14.0	4.8	7.0	
70	208	C-182-b-I	"	褐色	付け高台	7.0	6.3	14.0	4.8	7.0	
71	129	C-183-d-I	"	"	"	7.0	6.1	14.0	4.8	7.0	内黒
72	164	C-182-d-II	"	"	"	7.0	6.0	14.0	4.8	7.0	"
73	151	C-183-d-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	4.8	7.0	"
74	154	C-182-b-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	4.8	7.0	"
75	137	C-185-a-II	"	赤褐色	"	7.0	6.1	14.0	4.7	7.0	"

図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考	
76	109	C-181-d-II	椀	黄白色	付け高台	7.0	6.2	14.0	4.7	7.0	内黒
77	167	C-180-b-I	〃	赤褐色	付け高台	7.0	6.2	14.0	4.7	7.0	〃
78	177	C-181-d-II	〃	褐色	へら切り	7.0	6.2	14.0	4.7	7.0	〃
79	209	E-180-a-I	〃	〃	〃	7.0	6.2	14.0	4.7	7.0	
80	142	D-183-a-II	〃	明褐色	付け高台	7.0	6.1	14.0	4.7	7.0	内黒
81	150	C-181-a-II	〃	黄白色	〃	7.0	6.1	14.0	4.7	7.0	〃
82	149	C-181-d-II	〃	〃	〃	7.0	6.1	14.0	4.6	7.0	〃
83	163	D-183-b-II	〃	褐色	〃	7.0	6.1	14.0	4.6	7.0	〃
84	112	C-180-d-II	〃	明褐色	〃	7.0	6.1	14.0	4.6	7.0	〃
85	127	C-181-d-II	〃	黄白色	〃	7.0	6.1	14.0	4.6	7.0	〃
86	161	D-182-b-II	〃	褐色	〃	7.0	6.1	14.0	4.5	7.0	内黒高台着色
87	206	C-185-b-II	〃	明褐色	〃	7.0	6.1	14.0	4.5	7.0	
88	131	C-182-a-II	〃	褐色	〃	7.0	6.1	14.0	4.5	7.0	内黒
89	133	D-182-a-II	〃	〃	〃	7.0	6.1	14.0	4.5	7.0	〃
90	156	D-180-a-I	〃	〃	〃	7.0	6.1	14.0	4.5	7.0	〃
91	186	D-184-a-II	〃	黄白色	へら切り	7.0	6.0	14.0	4.5	7.0	〃
92	202	C-181-b-II	〃	赤褐色	付け高台	7.0	6.0	14.0	4.4	7.0	
93	18	D-184-a-II	〃	明褐色	〃	7.0	6.1	14.0	4.4	7.0	
94	144	D-182-d-II	〃	褐色	〃	7.0	6.1	14.0	4.3	7.0	内黒
95	211	D-180-a-I	〃	明褐色	〃	7.0	6.1	14.0	4.2	7.0	
96	148	D-181-b-II	〃	黄白色	〃	7.0	6.1	14.0	4.0	7.0	内黒
97	33	D-181-b-II	〃	明褐色	付け高台	7.0	6.1	14.0	4.0	7.0	
98	23	C-181-b-II	〃	〃	〃	7.0	6.1	14.0	3.7	7.0	
99	199	C-182-c-II	〃	〃	へら切り	6.6	6.0	13.2	5.5	6.6	
100	194	B-100-c-I	〃	黄白色	〃	6.6	6.0	13.2	5.0	6.6	柙場出土
101	99	D-182-a-II	〃	赤褐色	〃	6.6	5.7	13.2	4.9	6.6	
102	241	C-181-b-I	〃	暗褐色	〃	6.6	5.5	3.2	4.9	6.6	
103	110	D-183-d-II	〃	黄白色	付け高台	6.6	5.8	13.2	4.7	6.6	内黒
104	222	E-180-a-I	〃	赤褐色	へら切り	6.6	5.8	13.2	4.6	6.6	
105	135	D-181-b-I	〃	黄白色	付け高台	6.6	5.8	13.2	4.4	6.6	内黒
106	119	D-181-b-I	〃	赤褐色	〃	6.6	5.6	13.2	4.2	6.6	〃
107	57	C-182-b-II	〃	〃	へら切り	6.6	5.2	13.2	4.2	6.6	
108	90	D-183-a-II	〃	〃	〃	6.1	5.3	3.2	4.5	6.1	

図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考	
109	42	D-182-a-II	碗	赤褐色	へら切り	6.0	5.6	13.2	5.0	6.6	
110	72	C-181-b-II	〃	黄白色	まさあげ	6.0	5.3	12.0	4.8	6.0	
111	56	C-181-a-II	〃	赤褐色	へら切り	6.0	5.3	12.0	4.5	6.0	
112	82	D-182-b-II	〃	黄白色	〃	6.0	5.3	12.0	4.5	6.0	内黒
113	73	D-183-a-II	〃	明褐色	〃	6.0	5.2	12.0	4.5	6.0	
114	54	D-182-d-II	〃	赤褐色	〃	6.0	5.2	12.0	4.4	6.0	
115	61	D-182-a-II	〃	〃	〃	6.0	5.2	12.0	4.4	6.0	
116	41	D-180-b-II	〃	〃	〃	6.0	5.3	12.0	4.2	6.0	
117	2	D-182-d-II	〃	〃	へら切り	6.0	5.0	12.7	4.2	6.0	図17-4, 図18-13
118	80	D-182-d-II	〃	黄白色	〃	6.0	5.2	12.0	4.2	6.0	
119	124	C-182-b-II	〃	〃	付け高台	6.0	5.2	12.0	4.1	6.0	内黒
120	147	D-183-a-II	〃	〃	付け高台	6.0	5.2	12.0	4.1	6.0	内黒
121	81	E-176-a-I	〃	〃	へら切り	6.0	5.2	12.0	4.0	6.0	
122	113	D-182-a-II	〃	〃	付け高台	6.0	5.0	12.0	3.9	6.0	内黒
123	122	D-182-d-II	〃	〃	〃	6.0	5.0	12.0	3.6	5.9	内黒
124	16	C-182-d-II	〃	〃	へら切り	6.0	5.0	12.0	3.6	6.0	
125	66	C-183-c-II	〃	〃	〃	5.4	4.5	10.8	3.6	5.4	

③  $a = b = c \times \frac{1}{2}$  型

図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考	
1	191	D-182-a-II	碗	褐色	付け高台?	9.1	9.0	18.3	7.2	9.1	内黒
2	228	C-181-d-II	〃	赤褐色	削り出し	7.0	7.0	14.0	6.3	7.8	
3	257	C-181-b-I	〃	〃	へら切り	7.0	7.0	14.0	6.3	7.8	
4	85	C-183-d-II	〃	〃	〃	7.0	7.0	14.0	5.7	7.8	
5	34	C-183-d-II	〃	明褐色	付け高台	7.0	7.0	14.0	5.1	7.8	
6	215	B-96-d-I	〃	褐色	〃	7.0	7.0	14.0	4.9	7.8	榎場出土
7	37	C-180-d-II	〃	黄白色	〃	7.0	7.0	14.0	3.9	7.8	図46-21
8	24	C-182-d-II	〃	明褐色	〃	6.6	6.6	13.2	4.5	7.2	図46-19
9	28	C-181-b-II	〃	黄白色	〃	6.4	6.4	12.8	4.7	7.1	
10	45	D-182-c-II	〃	明褐色	へら切り	6.0	6.0	12.0	5.4	6.6	

図面 番号	出土地点	器 種	色調	製作法	a	b	c	d	e	備考	
11	75	D-182-b-II	碗	黄白色	へら切り	6.0	6.0	12.0	5.4	6.6	
12	95	D-182-a-II	"	赤褐色	"	6.0	6.0	12.0	5.4	6.6	
13	97	D-182-c-II	"	褐色	"	6.0	6.0	12.0	5.3	6.6	
14	46	C-182-d-II	"	明褐色	"	6.1	6.0	12.0	5.2	6.6	
15	25	D-183-a-II	"	赤褐色	"	6.0	6.0	12.0	5.1	6.6	図46-5
16	84	D-183-a-II	"	"	削り出し	6.0	6.0	12.0	5.1	6.6	
17	21	C-184-c-II	"	"	へら切り	6.0	6.0	12.0	5.0	6.6	資料(山)00010004-7
18	47	D-182-a-II	"	"	"	6.0	6.0	12.0	5.0	6.6	
19	170	D-182-b-II	"	黄白色	付け高台	6.0	6.0	12.0	4.8	6.6	内黒
20	152	C-182-b-I	"	褐色	"	6.0	6.0	12.0	4.5	6.6	"
21	153	D-183-c-II	"	黄白色	"	6.0	6.0	12.0	4.3	6.6	"
22	20	E-177-b-II	"	黄白色	へら切り	6.0	5.8	12.3	4.8	6.6	資料(山)00010004-47

④ a = b 型

図面 番号	出土地点	器 種	色調	製作法	a	b	c	d	e	備考	
1	106	C-182-d-II	碗	赤褐色	付け高台	8.0	8.0	14.0	6.5	8.5	
2	27	D-182-c-II	"	明褐色	"	7.0	7.0	12.4	5.8	7.5	
3	139	C-181-a-II	小鉢	赤褐色	糸切り	7.0	7.0	18.0	5.8	9.0	内黒
4	22	C-182-d-II	碗	黄白色	付け高台	6.6	6.6	15.7	4.4	8.1	図46-18
5	7	E-177-b-II	"	明褐色	へら切り	5.8	6.0	13.5	4.2	7.1	資料(山)00010004-17号, 21号
6	1	D-182-d-II	"	黄白色	"	5.0	5.0	12.7	4.4	6.3	図版17-10046-2
7	9	D-180-b-II	"	"	"	4.7	5.0	12.0	3.9	6.2	図版17-40046-3

⑤ a = b × 2 型

図面 番号	出土地点	器 種	色調	製作法	a	b	c	d	e	備考	
1	51	D-180-a-II	环	明褐色	へら切り	8.4	4.2	14.0	3.2	5.0	
2	251	D-181-a-II	"	"	付け高台	8.4	4.2	12.4	2.4	4.5	
3	239	C-183-d-II	"	"	へら切り	7.0	3.5	11.0	3.0	4.0	
4	244	C-182-d-II	"	"	巻きあげ	7.0	3.5	12.0	3.0	4.2	

図面 番号	出土地点	器 種	色調	製作法	a	b	c	d	e	備考
5	D-181-c-II	环	明褐色	巻きあげ	7.0	3.5	12.0	2.8	4.2	
6	D-183-a-II	"	"	へら切り	7.0	3.5	13.0	2.7	4.5	
7	C-182-b-II	"	"	付け高台	7.0	3.5	13.2	2.2	4.6	
8	C-182-a-II	"	"	へら切り	6.6	3.3	12.0	2.4	4.3	
9	D-183-a-II	"	黄白色	"	6.0	3.0	14.0	2.4	5.0	図46-9
10	C-181-b-II	"	"	"	6.0	3.0	13.0	1.8	4.6	図46-8

⑥  $a = c \times \frac{2}{3}$  型

図面 番号	出土地点	器 種	色調	製作法	a	b	c	d	e	備考
1	D-181-a-II	环	赤褐色	へら切り	7.5	4.2	10.4	3.5	4.8	図17-6194-16

⑦  $a = b \times \frac{3}{2}$  型

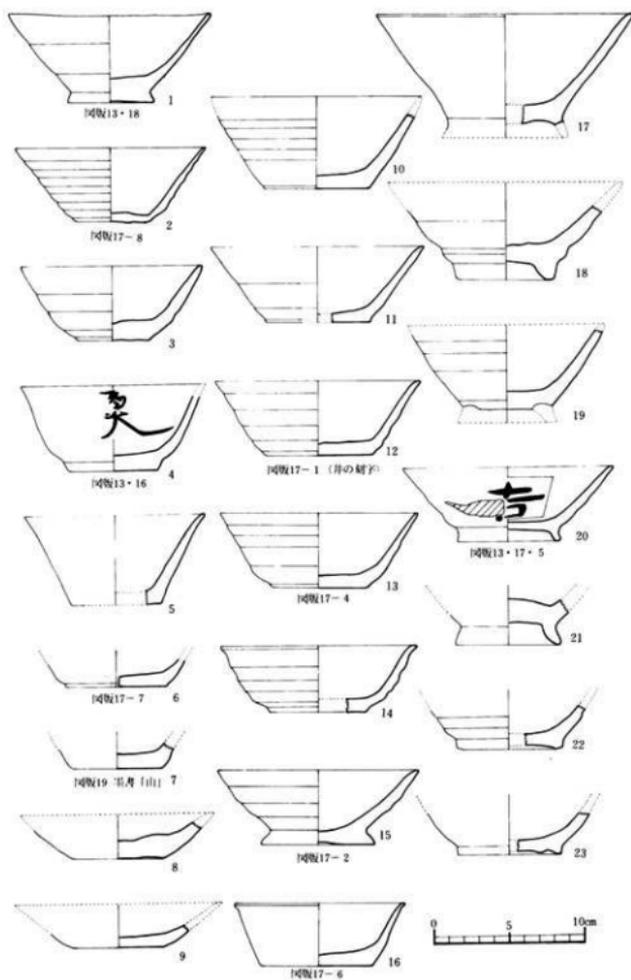
図面 番号	出土地点	器 種	色調	製作法	a	b	c	d	e	備考
1	D-181-c-II	环	黄白色	へら切り	7.6	5.0	13.5	4.2	5.7	図46-15

⑧  $a = b \times 2 = c \times \frac{1}{2}$  型

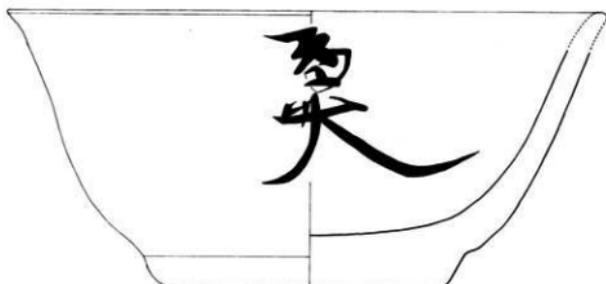
図面 番号	出土地点	器 種	色調	製作法	a	b	c	d	e	備考
1	D-183-a-II	环	赤褐色	へら切り	8.4	4.2	16.8	3.6	4.9	
2	C-181-d-II	"	"	"	8.3	4.1	16.6	3.3	4.8	
3	E-178-b-II	"	黄白色	付け高台	6.6	3.3	13.2	2.0	4.6	内黒
4	C-181-c-II	"	明褐色	"	6.6	3.3	13.2	1.8	4.6	"
5	C-183-c-II	"	褐色	糸切り	6.0	3.0	12.0	2.4	4.2	"
6	C-182-c-II	"	明褐色		6.0	3.0	12.0	2.4	4.2	"
7	C-183-d-I	"	"		6.0	3.0	12.0	2.4	4.2	"
8	C-181-b-II	"	黄白色	へら切り	6.0	3.0	12.0	2.1	4.2	
9	D-181-a-II	"	"	"	6.0	3.0	12.0	2.1	4.2	
10	D-181-c-II	"	"	"	6.0	3.0	12.0	2.1	4.2	内黒
11	D-182-a-II	"	褐色	付け高台	6.0	3.0	12.0	1.7	4.2	"

⑨ その他

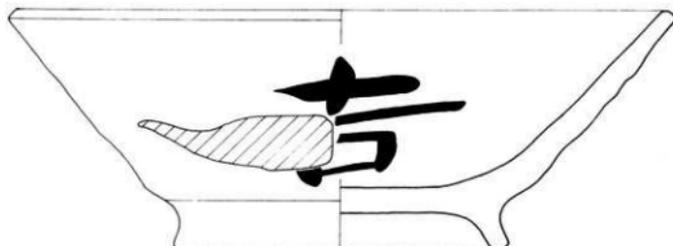
図面 番号	出土地点	器 種	色調	製作法	a	b	c	d	e	備考
180	192	D-182-d-II	鉢	褐色			21.0			内黒
181	193	D-183-d-II	鉢	黄白色			21.0			
182	17	F-160-d-I	鉢	赤褐色	糸切り?	8.4	11.4	16.8	10.4	12.2



第46図 山神遺跡出土の土師器



土師器・坏・E-177-b-II出土(図版13, 16)



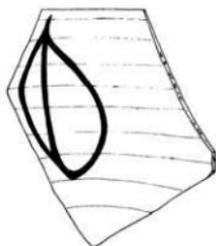
土師器・坏・I-129-b-II出土(図版13, 17~5)



土師器・坏・底部  
C-184-c-II出土(図版19)



土師器・坏・口縁部  
C-182-e-II出土(図版19)



土師器・坏・口縁部  
E-182-b-II・出土(図版19)

第47図 山神遺跡出土の墨書土器

#### (7) 須恵器

本道跡出土の須恵器は畑地造成・耕作などで層位的に考察することは困難である。出土遺物の器形のひとつが小片のみで全体を知り得るものはほとんどない。

##### 1 (図版20-3, 図48-1)

甕の口縁部で復元口径19.2cmを計る。口縁部わずかに外反し、上部外面に小さい凸帯をつくりだし、内外面ともに明瞭なる轆轤使用により調整され仕上げられている。色調は灰色で胎土・焼成ともに良好である。

##### 2 (図版20-3, 図48-2)

甕の口縁部で復元口径22.0cmを計る。口縁部は厚ぼったくわずかに外反し、口唇部断面はやや丸みを帯びており、内外面ともに轆轤使用により調整され仕上げられている。色調は灰白色で胎土・焼成ともに良好で、口縁部外面の一部に黒色の自然釉がみられる。

##### 3 (図48-3)

甕の口頸部で復元口径21.0cmを計る。口縁部外面は稜線を有し、内外面ともに轆轤使用により調整され、特に口縁部外面は明瞭な轆轤調整痕跡を残している。頸部内面はへう調整痕が横位に施されたあと縦位にも部分的に痕跡がみられる。色調は赤褐色であるが胎土は灰色で口縁内面・頸部外面に於いて自然釉がみられる。口縁部上端および内面に吹き出し釉が部分的にみられる。

##### 4 (図版20-3, 図48-4)

甕の口縁部で復元口径20.4cmを計る。口縁部はわずかに外反し、外側上端は稜線を有し、内外面ともに轆轤使用による調整が施されている。色調は灰白色で胎土・焼成ともに良好である。

##### 5 (図版20-3, 図48-5)

甕の口縁部で復元口径19.0cmを計る。口縁部はわずかに外反し、外面上端には稜線を有している。口縁部内面は浅い叩き目調整のあと轆轤使用により調整され仕上げられ、内面は明瞭な轆轤使用により調整されている。色調は黄灰色で胎土・焼成ともに良好である。

##### 6 (図版20-3, 図48-6)

甕の口縁部で復元口径28.4cmを計る。口縁部は外反し、内外面ともにへう調整により一条あるいは二条の稜線を有し、外面は再び立ちあがりながら外反し口唇部となり、さらに轆轤使用により調整され仕上げられている。色調は青灰色で胎土・焼成ともに良好である。

##### 7 (図版20-4, 図48-7)

深鉢の口縁部で復元口径36.0cmを計る。器面内外面ともに轆轤使用により調整され仕上げられている。色調は灰白色で胎土・焼成ともにあまり良くない。外面一部において自然釉がみられる。

##### 8 (図版20-4, 図48-8)

甕の口頸部で、頸部の復元径17.2cmを計る。口縁部上端は欠損しており不明であるが外反している。口縁内外面は轆轤使用により調整され仕上げられている。肩部内面は青海波分が

されている。色調は茶褐色で胎土・焼成ともに粗い。

9 (図版20-4, 図48-9)

甕の口縁部で復元口径10.6cmを計る。口縁部上端外側は欠損しているがわずかに外反し、内外面とも轆轤使用により調整され仕上げられている。頸部から胴部にかけて外面は轆轤使用により調整が施されているが風化により部分的に痕跡を残すのみであり、内面は指先による調整で仕上げられている。色調は灰白色で胎土・焼成ともに粗い。

10 (図版20-4, 図48-10)

胴部より上が欠損しているが壺の底部と思われる。内面ともに轆轤調整による痕跡がみられ、底部はへら調整で仕上げられた平底である。色調は外面で茶褐色、内面で黄灰色を呈し、胎土のしまりはよい。外面は自然釉がみられる。

11 (図版20-4, 図48-11)

胴部より上が欠損しているが壺の底部と思われる。内外面ともにへら調整により仕上げられている。底部縁辺はへら調整を施しているためわずかな稜をもって胴部につながる。色調は茶褐色で胎土・焼成ともに粗い。

12 (図版20-6, 図48-12)

表面は叩き目調整で仕上げられ、内面は青海波文が施されている。色調は表面で黄褐色を呈し、内面は青灰色である。

13 (図版20-6, 図48-13)

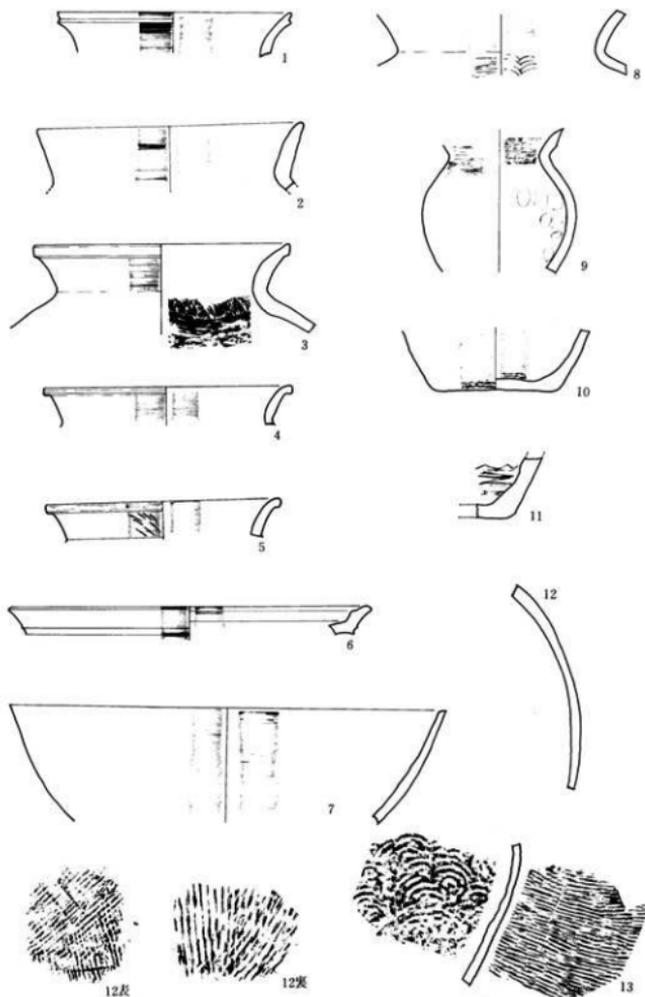
表面は格子目叩き調整で仕上げられ、内面は浅く叩き目調整が行なわれている。色調は内外面ともに黄褐色を呈している。

14 甕 (図版20-2・4, 図48-14)

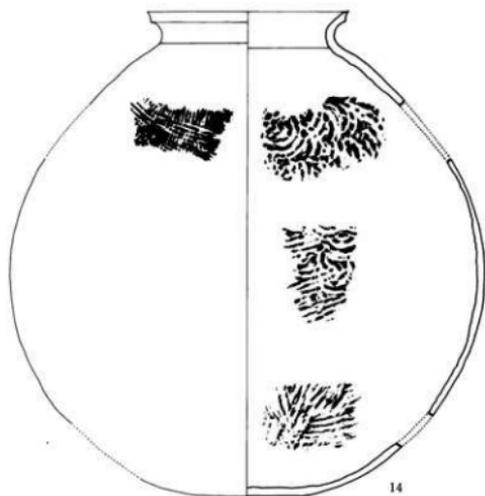
復元口径18.8cm・復元頸部外径15.1cm・胴部最大径42.5cm・器高46.3cm。山神第8地点全面発掘区西側の10m×20mの範囲に小破片となって全面的に散布していた。二次的熱をうけて赤レンガ色になっていたために目立った。整理段階で比較した時5通りの色になっていた。1片だけ本来の色が残っており、濃い灰色を呈していた。器壁は非常にうすく、外面は籠状の叩き、内面は上部が青海波、下部は平行条、胴部は中央部で青海波と平行条のタキキと重なった部分がある。

15 (図版20-1, 図48-15)

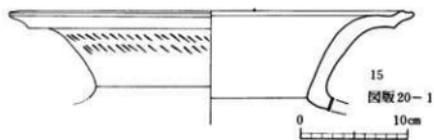
大型甕の口縁部で、復元口径38cm・復元頸部外径21.5cm・口は大きく外反し、上端部は稜線を形づくっている。轆轤使用の調整が施された後、へらで刻み目が連続的に斜につけられている。色調は灰色で、外面は茶褐色の自然釉がかかっている。



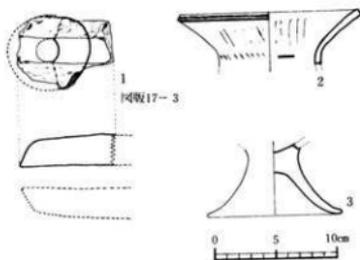
第48回 山神遺跡出土の須恵器



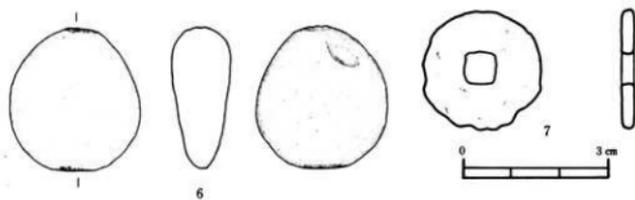
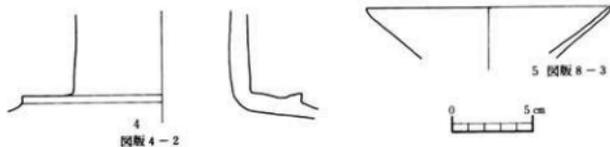
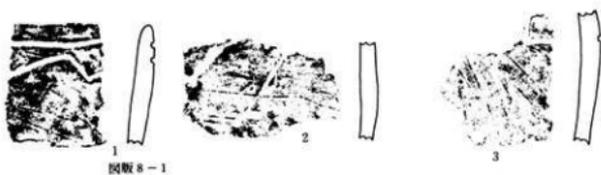
14  
图版 20-2、4



15  
图版 20-1



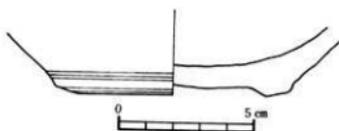
第49図 山神遺跡出土のふいごの羽口



第51図 山神遺跡第10地点溝内出土の遺物

(B) 青磁 (図版20-7, 図50)

高台青磁碗の底部の破片である。高台径 9.0cm。高台は外開きに張り出している。釉は高台内面までかけられ、色調は内外面共に青緑色で内面に、砂の付着がみられる。



第50図 山神遺跡第8地点出土の青磁片

Ⅶ まとめ

この地区の大半が海軍航空隊設営時の削平および茶園作りのための深耕などによって荒され  
てはいたものの、幸運にも保存状態のよい部分が残存しており、多くの好資料をえた。とくに  
8世紀後半という史料的に時代判定ができる黒ニガの最下部に、土師器・須恵器が出土した  
ことは、南九州における編年作業にとってひとつのものさしが得られたと考える。

文化課に着任してすでに満3年になろうとしているが、この3年間にあちらを掘りこちらを  
掘りと言う開発サイドに追いまくられどおしの状態で、調査結果について想をまとめるゆとり  
もない。この原稿も文章の大半は、現場でトレンチのかたわらに立ちながら、作業員に仕事を  
まかされる状態の時、書き綴った次第である。したがって、事実をあらあらかしこで述べるの  
がせい一杯である。事実のみを述べるのが調査報告書の使命であると言われるが、事実を調査  
者がどう理解するかと言うことも問題であり、事実そのものもそんなになまやさしい代物では  
ない。ようやく3年前に調査したものを、はじめて報告書として刊行する次第である。

多くの資料好をえたことは調査者にとってほっとした気持もある反面、課題を多く残してく  
れた遺跡でもあり、その意味からの重みを感じる遺跡であった。

## 曲 迫 遺 跡

- I 遺跡の位置および調査期間
- II 日誌抄
- III 地形
- IV 土層および拡張区の出土状況
- V 遺物
- VI まとめ

## I 遺跡の位置および調査期間

遺跡名は曲迫で所在地は鹿児島県姶良郡大宇籠字論地曲迫である。昭和49年6月28日～7月17日と昭和50年1月27日～3月31日と2回に分けて発掘調査を行なった。

## II 日誌抄

### 昭和49年

6月28日(金)29日(土)

Y・Z - 173～175区のトレンチ調査

7月1日(月)～7月6日(土)

W・Z・Y・Z - 169～172区のトレンチ調査 Y・Z - 170-a 区の拡張

7月8日(月)～7月13日(土)

W・X・Y - 164～171区のトレンチ調査 W・X - 163区の断面図作成

7月15日(月)～7月17日(水)

W・X - 159～163-a 区のトレンチ調査

### 昭和50年

1月27日(月)～2月1日(土)

R - 140、R・S・T - 148、P・R・S・T - 152区のトレンチ調査

2月3日(月)～2月8日(土)

S・T・U・V - 156区のトレンチ調査

2月10日(月)～2月15日(土)

O・P・Q・R - 156、P・Q・R - 160区のトレンチ調査

2月17日(月)～2月22日(土)

Q・R・S - 164、P・Q - 140、R - 136区のトレンチ調査

2月24日(月)～3月1日(土)

O・P・Q・R - 136、N・O・P・Q - 132、O・P - 128-a 区のトレンチ調査

3月3日(月)～3月8日(土)

O・P・Q・R - 133～135区の拡張区域調査

3月10日(月)～3月15日(土)

O・R - 133～135区の拡張区域調査 平板図作成

3月17日(月)～3月22日(土)

O・P・Q - 128～131、の拡張区域調査

3月24日(月)～3月29日(土)

P・R - 140～143-a 区の拡張区域調査

3月31日(月)

P・Q - 133-c トレンチの掘り下げ及び断面図作成。本日で終業。

### III 地形

遺跡は標高 267m のシラス台地に立地し、鹿児島空港の東南端から約 250m 南に位置する。溝辺台地の東側を流れる天降川にそそぐ小川の上流が遺跡近くまで登り谷を形成している。遺跡は谷頭が円弧状に巻きその中央の台地にあたる。ここは「ケンツケ山」（鷲鶏山）と呼ばれ小高い所であつたらしい。今でも微高地である。周囲は茶畑であり、谷にはスギ、ヒノキが植林されている。

### IV 土層及び拡張区の出土状況

#### (1) 土層

第 I 層は表土で耕作土である。第 II 層は黒色火山灰層で表土の下に若干残りがみられる。第 III 層は黄褐色火山灰土層で通称「アカホヤ」と呼ばれる。上部は軟質で下部は若干硬質である。第 IV 層は赤褐色軽石質火山灰土層でブロック状にみられる。第 V 層は灰褐色火山灰土層で下部に至っては黒褐色を帯びてくる。第 VI 層は黒褐色火山灰土層で上部は灰褐色を帯びる。第 VII 層は黄褐色軽石質火山灰土層で硬質である。第 VIII 層は茶褐色火山灰土層で粘質が強い。第 IX 層はシラスである。

#### (2) 拡張区の出土状況

北部は 2×2m の柄堀で中央より南部は 2×20m のトレンチ掘りで調査を行なった。各トレンチの状況は中央部が削平され S・T・U-144~160 区は第 I 層からすぐに第 VII 層になっている。W・X・Y・Z-160~176 区では第 I 層の下は第 III 層から始まっている。O・P・Q・R-129~144 区は部分的に第 I 層がみられる。O・P・Q・R-149~165 区は谷頭であるため第 II 層が厚く堆積している。

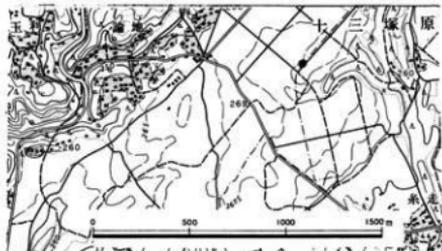
縄文式土器が Z-170-a トレンチの第 III 層に出土し 4×4m に拡張した。同一個体の破片が散布している状態である。近くには直径 3m の地層逆転現象が見られた。

X-173-b トレンチの第 III 層には黒曜石質の石鏃が出土している。

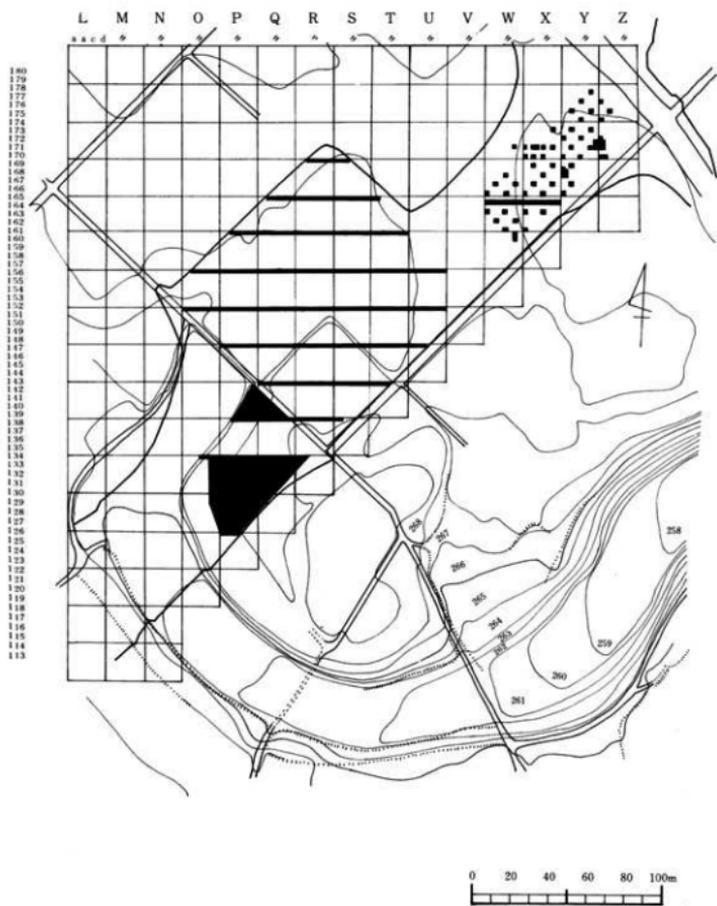
Q-139-c トレンチに第 III 層から石匙が出土したため北に 250m 拡張したが遺物の出土は 1 点もなかった。

Q-133-b ~ d a トレンチに成川式土器片・土器片・石鏃・手づくね土器が出土した。

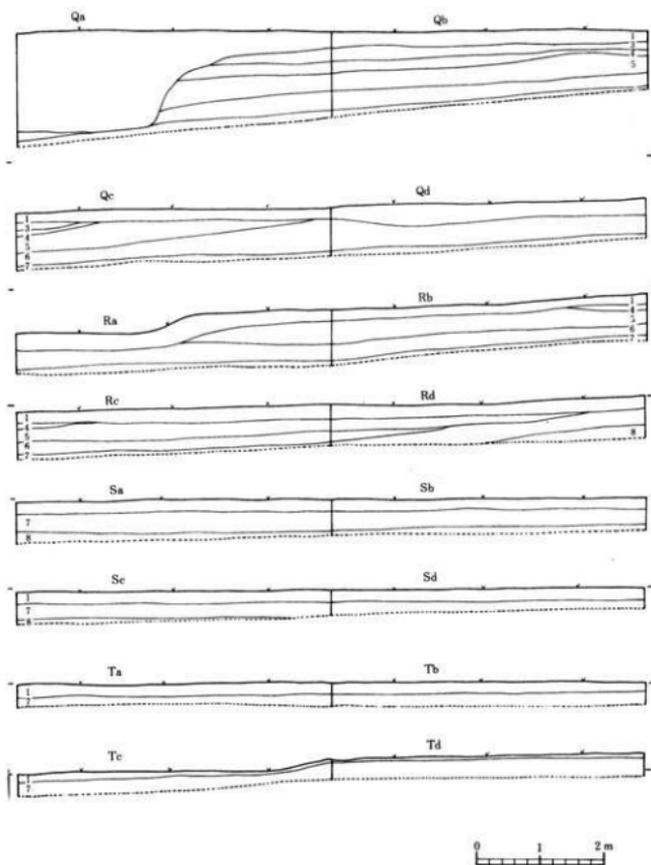
第 II 層が若干残っている状態であった。



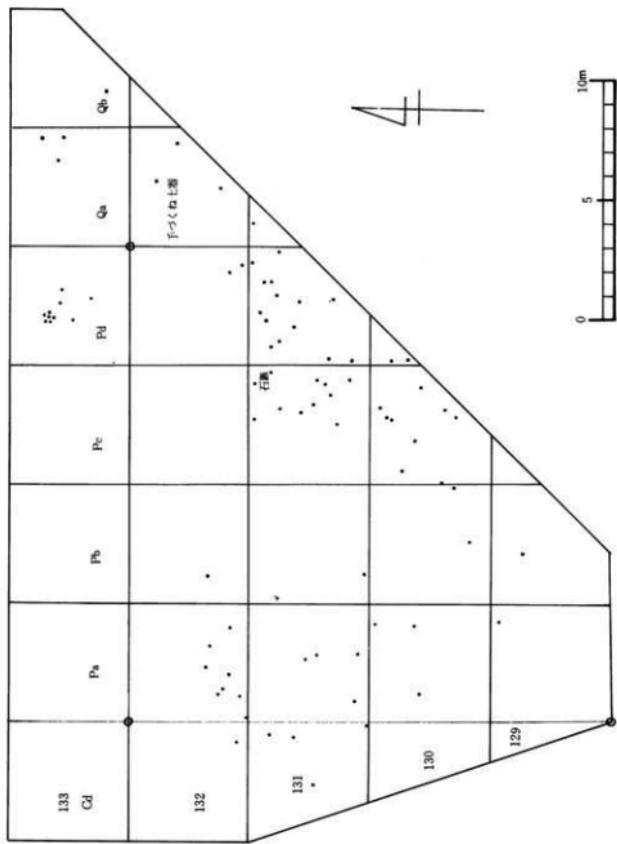
第52図 曲迫遺跡位置図



第53図 曲迫遺跡附近の地形図および調査区



第54図 曲迫遺跡Q-T-152区の北側断面図



第55図 曲迫遺跡O・P・Q-129-133区の出土状況

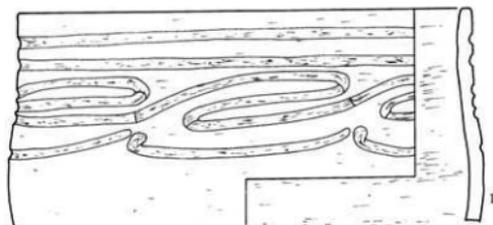
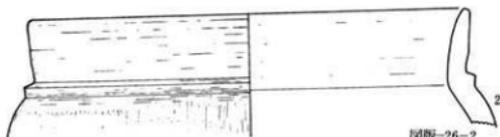


図-26-3



図版-26-2



第56図 曲迫遺跡出土の土器実測図

## V 遺物

### (1) 土器

#### 1 土師器

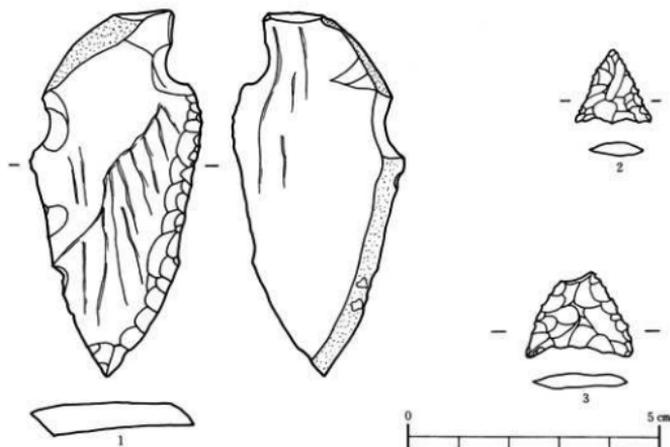
内黒土師器で器面外側は水引痕がみられる。1cmの高台が付き若干反する(第56図4)。他には糸切り底の土師器が出土している。

#### 2 成川式土器 (第56図2, 図版26-2)

小破片が多く器形のわかるものは少ない。甕形土器の口縁部や手づくね土器が出土している。甕形土器はく字状をなし頸部に三角突帯を付す。全面に刷毛目調整痕がある。

3 縄文式土器 (第53図1、図版26-3)

Z-170-a区第III層より出土、深鉢形の土器で若干胴が張る。施文は4本の沈線で構成され2本は平行沈線をなしているが3本目はS字状の連続文で4本目は節を付けながら連続波状文を施している。器面外側は撫調整がよく、内側は若干劣る。焼成は良い。器形、施文からみて後期初頭の岩崎上層式土器と思われる。



第57図 曲迫遺跡出土の石器実測図

(2)石器

1 石鏃

X-170-b区第III層より出土、底辺部が1.5cmで長さ1.5cmの二等辺三角形形状の石鏃である。石材は黒曜石である。透明度が強い。(第57図2、図版26-4)

P-131-c区第II層より出土、底辺部が1.3cmで0.2mmの挟りがある。頭部は欠損しているが弧状をした両縁部をなす。石材は安山岩である。(第57図3、図版26-5)

2 石匙

Q-130-c区第III層より出土、石材は玄武岩である。縦長剥片を利用した縦型石匙で長さ7.4cm、幅3.3cm、厚さ0.6cmである。背部と基部には自然面が残り、刃部は片面調整を行なっている。挟り部は簡単に調整している。(第57図1、図版26-6)

#### IV まとめ

土地の削平が行なわれていたため、遺跡の保存が悪く散布地程度であった。

縄文式土器片、成川式土器片、土師器片、石鏃等が出土しているが攪乱層に近いため層位的につかめない状態であった。石匙も第Ⅲ層中より出土しているが共伴遺物がないために時期不明である。

#### 文献

①賀川光夫 「日本の考古学」九州東南部 昭和40年

②河口貞徳 「鹿児島県考古学紀要」岩崎遺跡



山神遺跡遠景



西免遺跡第1地点Ⅱ層上部のピット群、



西免遺跡出土の成川式土器



柿場遺跡 第二層上面と断面



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11

杵場遺跡出土の縄文式土器



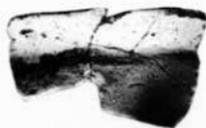
杵場遺跡出土の縄文式土器、山神遺跡出土の縄文式土器



1



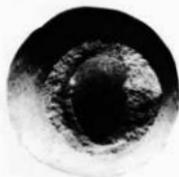
2



3



4



5



6

杉場遺跡出土の壘形土器・成川式土器



山神遺跡 第8地点の溝状遺構



1



2



3

山神遺跡 第10地点の溝状遺構と出土遺物



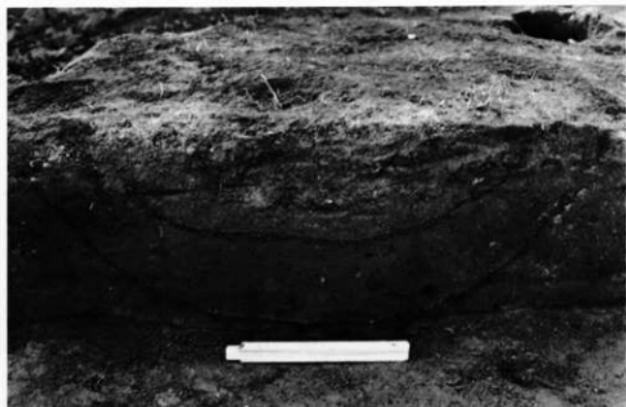
山神遺跡 第8地点の焼土とピット群 (第1号建物遺構)



山神遺跡 第9地点の焼土とピット群 (第3号建物遺構)



山神遺跡 第9地点の土層横断の状況



第8地点の焼土の断ち割り面



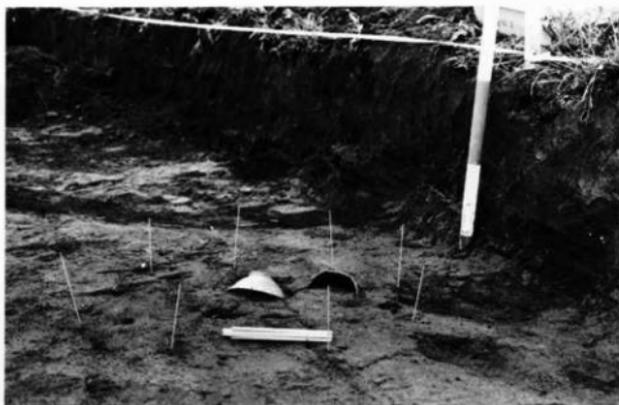
山神遺跡第10地点の石組遺構



炭化物出土のヒットの断面割り



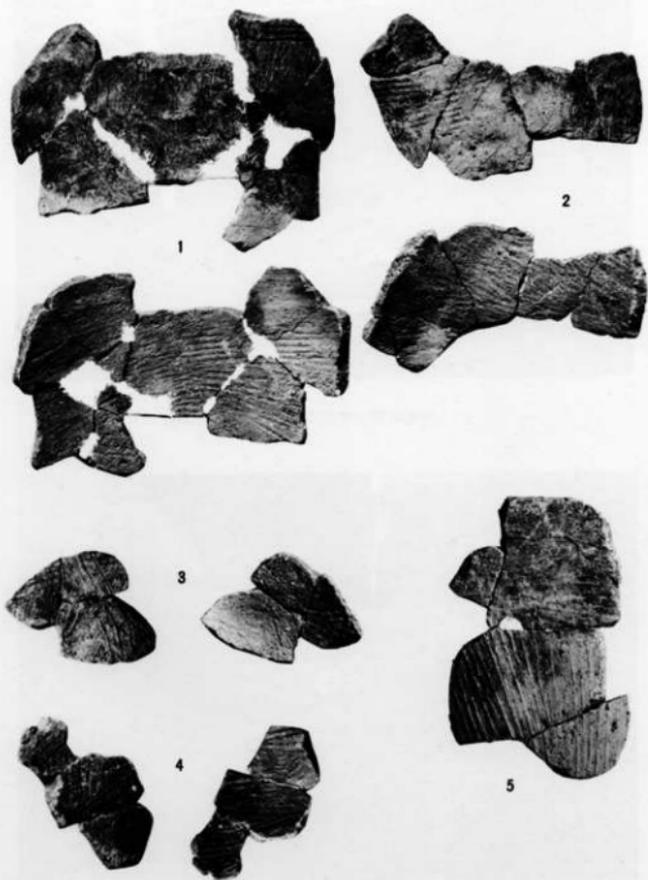
山神遺跡 第8地点の石彫の出土状況



山神遺跡 第8地点の屋舎土器の出土状況



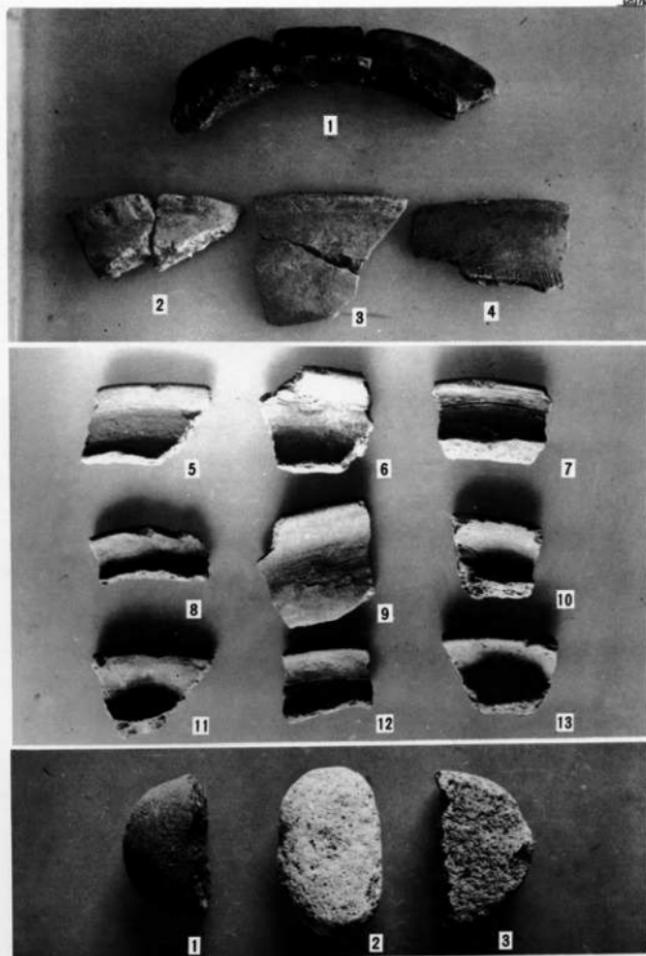
山神遺跡 第10地点の屋舎土器の出土状況



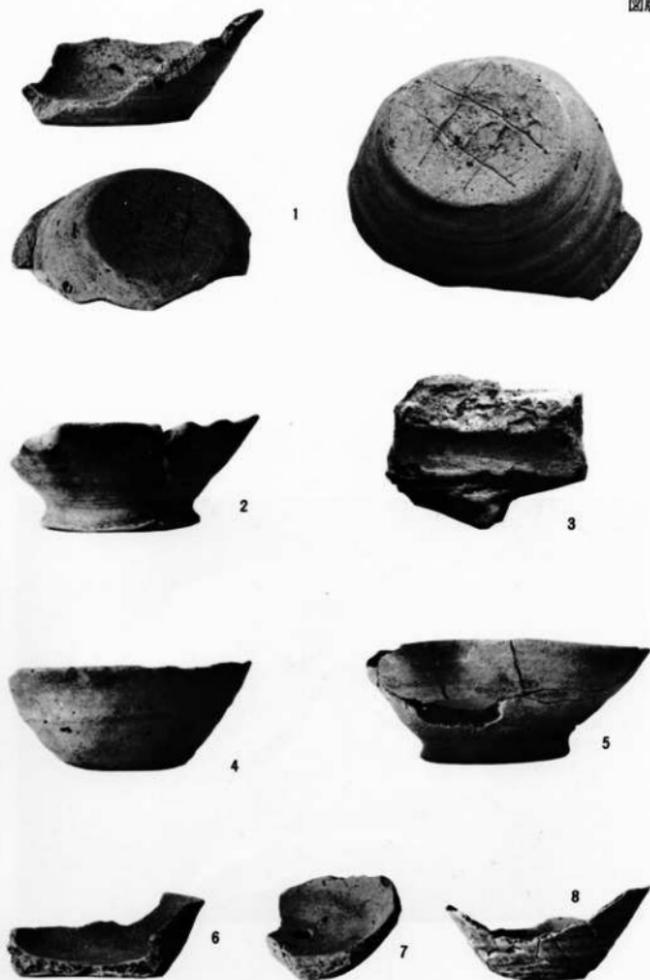
山神遺跡出土の条痕文土器



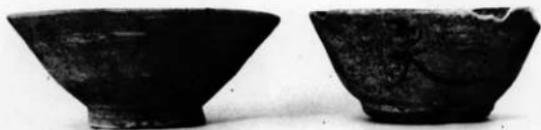
山神遺跡出土の燃系文土器



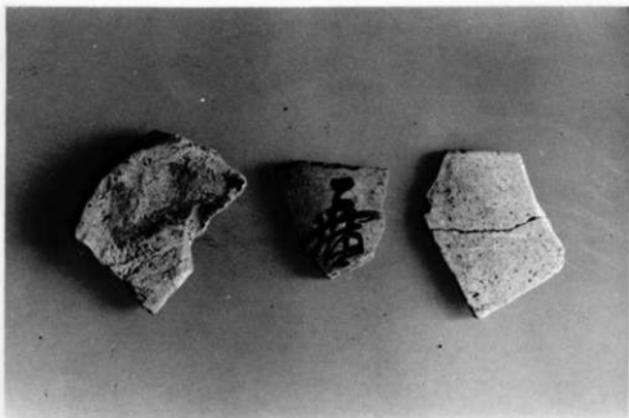
山神遺跡出土の壺形・鉢形土器



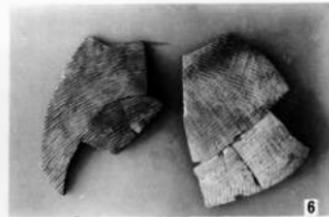
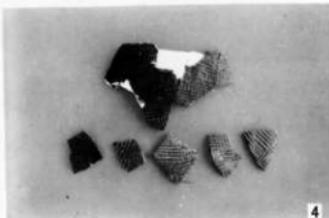
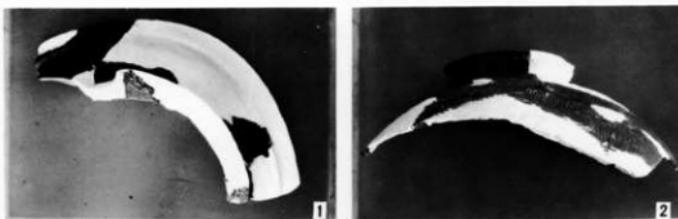
山神遺跡出土の土師器坏



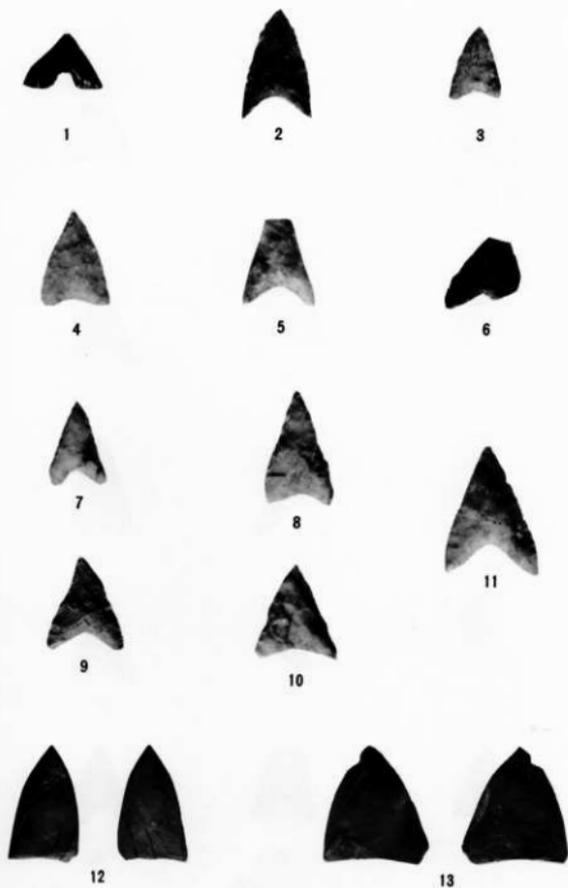
山神遺跡 第8地点出土の黒書土器 (SS撮影と赤外線フィルム撮影)



山神遺跡 第8地点出土の墨書土器片



山神遺跡出土の須恵器・石匙



西免・机場遺跡出土の石鏃



14



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27

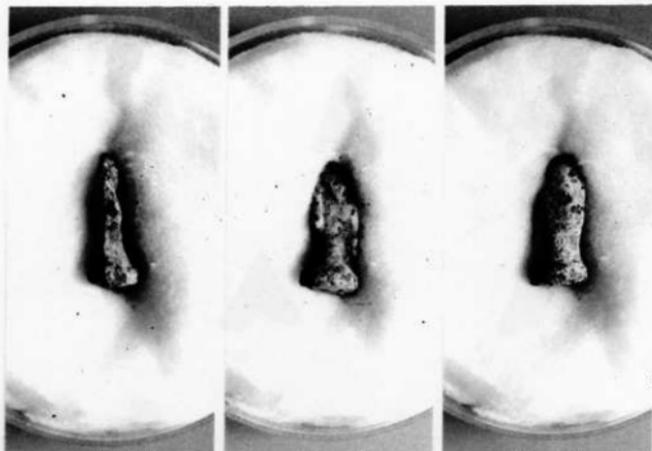


28

山神遺跡出土の石鏃



山神・杵場遺跡出土の石鏃・土鏃



(右側面)

(正面)

(背面)



山神遺跡出土の仏像・鉄鏝 (実物大)



曲迫遺跡近景及びトレンチ・出土状況



1



2



3



6



4



5

曲迫遺跡出土の手づくね土器・成川式土器・縄文式土器・石匙・石鏃



北東より望む



南西より望む

縦貫道完成後の遺跡周辺の全景写真

桑ノ丸遺跡

## 例 言

- 1 この報告書は、九州縦貫自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、昭和49年度に発掘した桑ノ丸遺跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団の受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆は、つぎのとおりである。  
I・II・III・IV-(1)・(2)-1・2-①・②・⑥・(3)-①  
③・(4)-①・(5)-①・②・V-(1)-①-⑨・⑬-⑭・V-(3)……………新東晃一  
IV-(2)-2-③・④・⑤・V-(1)-⑫・V-(3)……………中村耕二  
IV-(3)-②・V-(1)-⑩・⑪・V-(3)……………青崎和憲  
V-(2)・(3)……………牛ノ浜修
- 4 本書で用いたレベル数値はすべて海拔高である。
- 5 発掘調査にあたり鹿児島県文化財専門員河口貞徳氏の指導助言をえた。順序および石器の石材同定について鹿児島大学教育学部石川秀雄教授の助言をえた。陶磁器の鑑定は鹿児島県指定文化財（工芸技術）・竜門寺焼（三彩）技術保持者川原軍二氏の協力をえた。
- 6 図・写真は、執筆者が担当し、編集は、新東が担当した。

## 本文目次

I	遺跡の位置	159
II	調査の経過	161
III	調査・出土遺物の概要	165
IV	各地点の調査	167
	(1) 層位	167
	(2) 第1時点の調査	168
	① 調査の概要	
	② 遺構	
	③ 出土遺物と土器出土状況	
	(3) 第2地点の調査	181
	① 調査の概要	
	② 遺構	
	③ 出土土器	
	(4) 第3地点の調査	184
	① 調査の概要	
	(5) 第4地点の調査	185
	① 調査の概要	
	② 遺構	
V	出土遺物	188
	(1) 土器	188
	(2) 石器	226
	(3) まとめ	232

## 図 版 目 次

図版 1	桑ノ丸遺跡遠景（南から）……………	237
図版 2	第1地点遠景（東から）……………	237
図版 3	第1地点確認調査（東から）……………	238
図版 4	第1地点確認調査（南から）……………	238
図版 5	12類（成川式土器）出土状態……………	239
図版 6	12類（成川式土器）出土状態……………	239
図版 7	窯状遺構断面写真……………	240
図版 8	窯状遺構……………	240
図版 9	窯状遺構全景……………	241
図版 10	窯状遺構と断層断面……………	241
図版 11	円筒土器（2類）出土状態……………	242
図版 12	円筒土器（2類）出土状態……………	242
図版 13	第1地点遺物出土状態（Ⅲb層）……………	243
図版 14	角筒土器（2類）出土状態……………	243
図版 15	第1地点発掘風景……………	244
図版 16	遺物出土状態（Ⅲb層）……………	244
図版 17	地層横転No1 検出状態……………	245
図版 18	地層横転No1 掘り上げ状態……………	245
図版 19	地層横転（No3）断面……………	246
図版 20	地層横転（No3）掘り上げ状態……………	246
図版 21	第2地点遠景（東から）……………	247
図版 22	Ⅲa層の集石……………	247
図版 23	第3地点落ち込み……………	248
図版 24	第3地点全景（南から）……………	248
図版 25	落ち込み……………	249
図版 26	円筒土器（1類）出土状態……………	249
図版 27	近世墓検出状態……………	250
図版 28	近世墓群……………	250
図版 29	近世墓の供養祭……………	251
図版 30	近世墓出土の人骨……………	251
図版 31	1類（吉田式土器）・2類（前平式土器）……………	252
図版 32	2類（前平式土器）……………	253

図版 33	2類 (前平式土器)	254
図版 34	2類 (前平式土器)	255
図版 35	2類 (前平式土器)	256
図版 36	2類 (前平式土器) 口縁施文	257
図版 37	2類 (前平式土器) 口縁施文	258
図版 38	1類 (吉田式土器) ・ 2類 (前平式土器)	259
図版 39	3類	260
図版 40	3類	261
図版 41	3類	262
図版 42	3類	263
図版 43	4類 (押型文土器)	264
図版 44	4類 (押型文土器) ・ 5類 (平椀II式土器)	265
図版 45	6類 (塞ノ神A式土器)	266
図版 46	8類 (阿高式土器) ・ 9類 (轟式土器)	267
図版 47	10類 (指宿式系土器)	268
図版 48	11類 (西平式・三万田式土器)	269
図版 49	12類 (成川式土器)	270
図版 50	14類 (須恵器) ・ 15類 (近世磁器)	271
図版 51	15類 (近世陶器)	272
図版 52	石鏃	273
図版 53	石器	274

## 挿 図 目 次

第1図	桑ノ丸遺跡地形図	159
第2図	桑ノ丸遺跡周辺地図	160
第3図	桑ノ丸遺跡グリッド配置図	165
第4図	遺物類別出土状況図	166
第5図	桑ノ丸遺跡層序	167
第6図	第一地点断面実測図	169
第7図	第一地点平面図 (I)	171
第8図	竈状遺構実測図	173
第9図	12類完形土器出土状態実測図	175
第10図	土器実測図及拓影	176
第11図	第一地点平面図 (II)	177
第12図	地層横転実測図	179
第13図	縄文式土器出土状況図	180
第14図	第二地点平面図	181
第15図	集石実測図	182
第16図	第2地点、第3地点断面図	183
第17図	第3地点平面図	184
第18図	第4地点平面図	185
第19図	第4地点断面図	186
第20図	柱穴遺構配置図	187
第21図	1類土器 (吉田式土器)	188
第22図	2類 (前平式土器-I)	193
第23図	2類 (前平式土器-II)	194
第24図	2類 (前平式土器-III)	195
第25図	2類 (前平式土器-IV)	196
第26図	2類 (前平式土器-V)	197
第27図	2類 (前平式土器-VI)	198
第28図	2類 (前平式土器-VII)	201
第29図	2類 (前平式土器-VIII)	202
第30図	2類 (前平式土器-IX)	203
第31図	第3類土器 (I)	207
第32図	第3類土器 (II)	208

第33図	第3類土器(Ⅲ)	209
第34図	4類(押型文土器)	210
第35図	5類(平栴Ⅱ式) 6類(塞ノ神A式) 7類(塞ノ神B式)	212
第36図	8類(轟式土器) 9類(阿高式土器)	214
第37図	10類(指宿式系土器)	216
第38図	11類(西平式、三万田式土器)	217
第39図	12類(成川式土器-I)	218
第40図	12類(成川式土器-II)	219
第41図	12類(成川式土器-Ⅲ)	221
第42図	13類(土師器)	223
第43図	14類(須恵器)	224
第44図	15類(近世陶器)	224
第45図	石鏃実測図	227
第46図	石匙、スクレーパー実測図	228
第47図	石器実測図	229
第48図	石器実測図	230

第1表	桑ノ丸遺跡出土土器類別表	166
第2表	1類土器(吉田式土器)一覽表	189
第3表	2類土器(前平式土器・円筒形)一覽表	191
第4表	2類土器(前平式土器・角筒形)一覽表	200
第5表	3類土器一覽表	206
第6表	4類(押型文土器)一覽表	210
第7表	5類(平栴式) 6類(塞ノ神A式) 7類(塞ノ神B式)一覽表	211
第8表	8類(轟式土器) 9類(阿高式土器)一覽表	213
第9表	10類(指宿式土器) 11類(西平・三万田系式土器)一覽表	220
第10表	12類(成川式土器)一覽表	220
第11表	13類(土師器) 14類(須恵器)一覽表	225
第12表	15類(近世陶器)一覽表	225
第13表	石器一覽表	231